

## アレクサンドリアのクレメンス : 『ストロマテイス』 ( 『綴織』 ) 第6巻 全訳

著者	秋山 学
雑誌名	文藝言語研究. 言語篇
巻	65
ページ	41-136
発行年	2014-03-31
その他のタイトル	Clemente Alessandrino, Gli stromati, libro VI (traduzione giapponese)
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/121211">http://hdl.handle.net/2241/121211</a>

アレクサンドリアのクレメンス  
『ストロマテイス』（『綴織』）第6巻  
—全訳—

秋 山 学

序.

初期ギリシア教父の一人、アレクサンドリアのクレメンス（150－215）の著作に関して、筆者はしばらく以前より、いくつかの本学紀要を借りて全訳作業を進めてきた。すでに『プロトレプティコス』（「ギリシア人への勧告」；全1巻）、『パイダゴゴス』（「訓導者」；全3巻）については、訳出を終えている。クレメンスの主著に当たる『ストロマテイス』（「綴織」；全8巻、ただし第8巻はメモの類、あるいは偽作ともされる）に関しては、すでに第3巻まで訳出公表を終えている<sup>1</sup>。今回同時期に公表するのは、同著の第4巻、第6巻および第7巻である<sup>2</sup>。第5巻が省かれるのは、すでに1995年2月の時点で、平凡社より刊行された『中世思想原典集成』第1巻「初期ギリシア教父」中に、拙訳によるものが収められているためである<sup>3</sup>。拙訳には誤りも散見されるが、教文館版による『キリスト教教父著作集』にこれらクレメンスの著作が収められる際に改稿・改訳を進めるべく計画中である。現在は、ともかくクレメンスの著作の全容を紹介すべく訳筆を進めることを優先させている。なお、同じくクレメンスの著作としてかなり良く知られている『救われる富者は誰か』についても、やはり平凡社刊になる前述の同巻に収められているが、これについても改稿を企図している<sup>4</sup>。

さて『ストロマテイス』（「綴織」）のうち、本号言語篇には第6巻の全訳を収め、同時期に発刊される同文芸篇にはこれに先立つ第4巻の全訳を収める。また筑波大学大学院人文社会科学研究科古典古代学研究室より定期刊行物として発刊されている『古典古代学』の第6号には、同第7巻の拙訳が収録される予定である。こうして、クレメンスの主著である『ストロマテイス』についても、メモ書きともされる第8巻の訳出は措くとして、第5巻の公表からおおよそ20年弱の月日を経て、その全貌を公表することができるのは望外の喜びである。

邦訳に際し、底本としては、既刊分・第3巻までの方針を踏襲し、オットー・シュテラーリン (Otto Stählin, 1868 – 1949) の校訂になる校訂版テキスト (Stromata Buch I-VI / Clemens Alexandrinus ; herausgegeben im Auftrage der Kirchenväter-Commission der Königl. Preussischen Akademie der Wissenschaften von Leipzig : Hinrichs, 1906 ; Die Griechischen christlichen Schriftsteller der ersten drei Jahrhunderte, Bd. 2) を用い、近代語訳としては、イタリア語訳 (Clemente Alessandrino, *Gli Stromati: Note di vera filosofia*, Introduzione, traduzione e note di Giovanni Pini, Milano 1985) および P.Descourtieux の仏訳 (SC446, Paris 1999) を参照した。各章の冒頭に掲げた内容小見出しは、ミーニュ版のラテン語訳から適宜採用したものである。

本第6巻では、これに続く第7巻とあわせて、クレメンスによる「覚知(者)」の神学思想が余すところなく開陳される。それは、ある意味で東方キリスト教神学の精神性を規定するとも言える「人間神化」の思想を基軸としたものであり、さらに言えば『ヨハネ福音書』に見られる、「十字架上の復活共同体」を神学的に展開させたものとも言える思想である。

## I. この巻の内容概括

1.1) さて、この「真なる愛智に基づく覚智のための覚書」すなわち『ストロマテイス』の第6および第7巻は、その中で伝えられる倫理的な教えを可能なかぎり記述する巻であり、「覚智者」とはその生においていかなる者であるかを提示する部分である。さらにここからは、哲学者たちに対し、この覚知者が、彼らの想像しているような無神論者ではまったくなく、ただ真に敬神の念にあふれた者であるということを明らかにしたい。したがって覚智者の信仰のあり方を、覚書きの形で誤りなく伝えうるかぎりに関して、総括的に解説しようとする。2) というのも「永遠にいたるまで留まる食物」(ヨハネ6,27) のために働け、と主が命じておられるからである。また預言者は、ある箇所でも述べている。「牛やロバが徘徊するすべての水辺に、種を蒔く者は幸い」(イザヤ32,20)。これは、諸民族より集められ、律法から唯一の信仰へと導かれた民を指す。その一方、高貴な使徒によれば「弱い人は野菜だけを食べている」(ロマ14,2)。3) かの訓導者 (paidagōgos) はわれわれに先じ、三つの巻のうちに分割して、子供時代からの教導と教育を提示した。すなわちそれは、信仰教育 (katechēsis) を通じ、信仰とともに増し高められ、成人のうちに加えられる

人々のため、覚知の知識の伝承を目的として靈魂を徳に満ちたものに備える生活様式を意味している。4) かくして、これらの記述を通じてわれわれにより語られるであろう事どもから、ギリシア人たちは明瞭に、自分たちが不敬にも神の友を迫害し、尊敬してこなかったということを学ぶであろう。そして「ストロマテイス」の性格に基づく覚書がすでにかなり進んできた現在も、主の顕現に関してギリシア人たちおよび異邦人たちによって提示された事どもにより、疑問点は水解されるべきなのである。

2.1) 草原の中に色とりどりに咲いている花々や、楽園に咲く果実の樹木などは、その種類にしたがって他の品種と別にされることはない（それはちょうど、『草原』とか『ヘリコン』とか『ケリア』とか『織物』といった名で、好学の士たちがさまざまに論考を集めて執筆しているのと同様である）。しかるにたまたま記憶に昇った事どもを、秩序や文体の洗練を図らずに取り散らかしたまま混ぜ合わせることで、われわれによる『ストロマテイス』（『綴織』）の覚書は、草地の如くに織り成される。2) このような具合であるので、わたくしにとってこの覚書は火打石である。覚知に適う事柄が、もし誰かある人に当たったならば、有益かつ有用な事柄に向け、汗を伴った探究となることであろう。3) 穀物のための労苦ばかりでなく、覚知のための労苦もそれ以上でありかつ正しきものと考えられる。ただそれは狭く、真に主の御心に適った道を、永遠にして幸いなる救いへと辿る人々にとってのものである。4) われわれの覚知と靈的な楽園は、われわれの救い主その方であり、この方に向かってわれわれは植えられ、いにしへの生活から善き土地へと移し変えられ植え替えられた。樹木の植え替えは、よき実りのために寄与する。かくして、主は光であり真なる覚知であるが、この方に向けてわれわれは植え替えられたのである。

3.1) さて、他の仕方によっても覚知は二様のあり方で語られる。まず一つ目は、共通のあり方によるものであって、すべての人間に等しく、理解と把握という形で現れる。把握 (antilepsis) とは、認識に際し各基体に対して等しく行われるものであって、これには理性的能力ばかりでなく、おそらく是非理性的能力も与かっている。わたくしとしては、この把握については「覚知」という名で呼ぶことは控えたい。人間は本性的に、諸感覚器官を通じてこの把握を予め行っているからである。2) 一方二つ目は、取り分けて「覚知」と名づけられるべきものであり、思考 (gnōmē) と言葉によって特徴づけられるものである。この二番目の覚知によっては、ただ理性的な能力のみが覚知となる。その際この覚知は、思惟されるものに対し、靈魂の働きのみによって純粹な形

で働きかける。3) ダビデはこう述べる。〈憐れみ深い人は幸いである〉(詩篇111,5)。これは、流浪によって破滅に陥った人々に対して、の意である。〈貸し与える人も幸いである〉。すなわち、真理の言葉の分かち与えによって、の意である。それは行き当たりばったりではなく、深い省察によらねばならない。なぜなら〈彼は裁きの場にあっても、おのが言葉を統べる〉からである。彼こそ〈貧しき人々に蒔き、与えた〉人である。

## II. ギリシア人相互の借用

4.1) 先に掲げた課題に着手する前に、序のかたちで、『ストロマテイス』第5巻の末尾で未解決のまま残してあった事柄について付言せねばならない。

2) われわれは、象徴的な形式は古代に遡るが、われわれの許なる預言者たちばかりでなく、いにしえのギリシア人たちの多く、およびそれ以外の民族上の異邦人たちの少なからぬ人々もそれを用い、さらには、儀礼で執り行われる事どもの神秘的な側面にも言及せざるを得なかった、と明記した(ストロマテイス5,4,19 - 5,9,59)。わたくしは、諸原理についてギリシア人たちが語る事柄について進んで検討するときには必ず、これらのことを明瞭にすべく掲げることにはしたい。3) というのもわれわれは、諸々の神秘もまた、この観想のうちに属すのだということを明らかにすることになろうからである。3) しかるにギリシア的な思惟の強調点が、聖書を通してわれわれへと与えられた真理から明らかにされるということを提示したならば、その後いかなる意味において真理の窃盗が彼らの許に及んだのかを、量的に過ぎない限りにおいて、見つける度ごとに明らかにした。であるから、自ら自身のうちに窃盗を行ったその証人として、ギリシア人たちを呼び出すことにしよう。4) というのも、彼ら自身に固有の事どもを、かくも明白なかたちで互いに盗み合うことで、彼らは盗人であることを明確にしているにもかかわらず、さらにはわれわれの許にある真理を気の進まないさまで己がものとしながらも、同胞に対してはひそかにそれを伝えているからである。つまり自らの許なるものに関しては手控えるにもかかわらず、われわれの許なるものについては慎しむことをしないのである。5.1) わたくしとしては、哲学に関する教説については沈黙を守ることにしたい。異端論を分かち奉じている人々自身が、忘恩の誹りを受けぬように、書面で告白していることであるが、自らの教説の主要な部分はソクラテスから取り込んだと言う。2) もっともわたくしは、人口に膾炙している事柄、およびギリシア

人たちの間で名を成す人々の証言から少し用いて、彼らの借用のあり方を吟味し、時代関係に関しては無頓着に、以下に記してみることにしたい。

3) まずオルフェウスがこう詩で歌っている。

「女性より他に、犬みたような、恐ろしきものはない」

(オルフェウス、断片 264)。

4) これに対してホメロスはこう述べる。

「女性よりも恐ろしく、犬みたようなものは他にない」

(ホメロス『オデュッセイア』 11.427)。

5) またムサイオスは次のように記している。

「術知は、力よりも常に、はるかに優れている」

(ムサイオス、断片 4 デイールズ)。

6) 一方ホメロスはこう述べる。

「木こりも力では上回りえない」 (ホメロス『イリアス』 23.315)。

7) 再びムサイオスはこう詩作している。

「まさしく小麦畑が葉を生やすように、

トネリコの木も、ある葉は枯れ、ある葉は生える。

ちょうどそのように、人間のやからも、その世代を変えるもの」

(ムサイオス、断片 5 デイールズ)。

8) ホメロスはこれを言い換えている。

「葉のあるものは風が大地に吹き落とし、あるものは

木が繁茂して育てる。それは春の季節がやってくるころ。

ちょうど同じように、人間の世代も、あるとき生まれ、あるときしぼみ行く」

(ホメロス『イリアス』 6.147 - 149)。

9) 再びホメロスは次のように述べている。

「殺された人々に関して誇らしげに語るのは不敬なること」

(ホメロス『オデュッセイア』 22.412)。

10) アルキロコスとクラティノスも同様のことを記している。先ず前者は、

「殺された人々に関して冷笑するのはよくない」 (アルキロス、断片 64)。

11) 一方クラティノスは『ラコニア人たち』の中でこう記している。

「亡くなった勇者たちに関して大いに自慢するのは、

人間としておぞましきこと」 (クラティノス『ラコニア人たち』、断片 95)。

6.1) さらにアルキロコスは、次のホメロスの詩句

「ああわたしは愚かなことをした。わたし自身、それを否定するつも

りはない。

多くの人々の前で」(ホロス『イリアス』9.116)

を変改し、2) 次のように述べている。

「わたしは間違っていた。他の人にもこの迷妄が及んだだろう」

(アルキロス、断片 73)。

3) それは言うまでもなく、次の叙事詩句の場合でも同様であり、

「戦神は共通、かつての殺戮者を殺してゆく」(ホロス『イリアス』18.309)

4) を、アルキロスはおよそ次のように変改して述べている。

「いかにもそうだ。戦神アレスは、人間たちにとって共通に真正」

(アルキロス、断片 62)。

5) さらにアルキロスは、次の詩句をも書き換えている。

「人間にとって、勝利とは神々の試みのうちに置かれたもの」

(cf. ホロス『イリアス』7.102)。

6) それは次のイアンボス詩から明らかである。

「若者らを勇気づけよ。勝利の試みは神々の胸三寸」

(アルキロス、断片 55)。

7.1) またホメロスは次のように歌っている。

「彼らは足を洗わず、地べたに寝る」(ホロス『イリアス』16.235)。

2) エウリピデスは『エレクテウス』の中で次のように記している。

「彼らは滑らかでない地面に

眠る。泉で足を濡らすこともせずに」

(エウリピデス『エレクテウス』断片 367)。

3) 同様に、アルキロスは次のように語る。

「人によって、心喜ばせる人はみなそれぞれ」(アルキロス、断片 36)。

4) これは次のホメロスの詩句に倣ったものである。

「人が違えば、それぞれ喜びとする業も異なる」

(ホロス『オデュッセイア』14.228)。

5) エウリピデスは『オイネウス』の中でこう述べている。

「人が違えば、それぞれのやり方で、別々の物が気に入る」

(エウリピデス『オイネウス』断片 560)。

6) またわたくしは、アイスキュロスが次のように言ったと聞いている。

「麗しくも幸いなる者は、家に留まるべきである。

行状の悪しき者、彼もまた留まるべきだ」

(アイスキュロス, 典拠不詳断片 317).

7) 一方エウリピデスは同様のことを次のように舞台上で叫んでいる。

「幸運に恵まれた者は、家にいるのが幸い」

(イウリピデス『フィロクテス』断片 793).

8) そればかりでなくメナンドロスも、次のように喜劇作品を記している。

「自由であるためには、家にいなければならない。

そうでなければ、決して幸いにはなり得ないだろう」

(メナンドロス『自虐者』断片 145).

8.1) またテオグニス<sup>1)</sup>は、次のように述べている。

「逃げる者には、親しくまた信頼できる仲間はいない」(テオグニス 209).

2) 一方エウリピデスはこう詩作している。

「親しき者はみな、貧しき者を見捨てて逃げてゆく」

(イウリピデス『メデイア』 561).

3) エピカルモスはこう述べる。

「おお娘よ、なんという巡り合わせだ。お前は年かさにして、年下の男と共棲するのか」

さらにこう付け加えている。

「この男は別の若い女性を手に入れ、

娘は別の男を捜し求める」(エピカルモス, 断片 298).

4) 一方エウリピデスはこう記す。

「女性が若くして若い男に嫁ぐのはよくない。

彼は別の女性の寝台を奪おうと狙い、

彼女は困ってこの男に災いを望む」(イウリピデス, 典拠不詳断片 914).

5) さらにエウリピデスは『メデイア』の中で次のように述べている。

「悪しき男の贈り物は、役に立たない」(イウリピデス『メデイア』 618).

6) ソフォクレスは『鞭を携えるアイアス』の中で、次のようなイアンボス韻律の詩を歌っている。

「敵の贈り物は贈り物にあらず、役にも立たない」

(ソフォクレス『アイアス』 665).

7) またソロンは次のように詩作する。

「満ち足りすぎれば傲慢を生む。それはあまりの幸福に続いて訪れる」

(ソロン, 断片 8).

8) これに対してテオグニスはこう記す。



「満ち足りすぎれば傲慢を生む。悪しき者に幸福が伴った場合がそれだ」(テケニス 153).

9) ここからトゥキュディデスも『戦史』の中で、こう述べている。「多くの人々は、とりわけ短期間のうちに思いもかけぬ繁栄が訪れると、傲慢に転ずるのが習いである」(トゥキュディデス『戦史』3.39.4). 10) フィリストスも同様に、これと同じことを模倣し、次のように述べている。「とりわけ、予想に反して繁栄した人々は、傲慢に陥るのが常である」(フィリストス, 断片 51).

9.1) さらにエウリピデスは次のように詩作している。

「苦しい生活をして糧を得た父と母から  
生まれた子供たちは、優れている」

(エウリピデス『メアケロス』断片 525 ; 4 以下).

2) 一方クリティアスはこう記している。「わたしは人間の誕生から始めよう。どのようにすれば、肉体において最良で最も強力な者が生まれるのか。生み育てる者がよく鍛え上げられ、力を得られるような食生活をし、肉体を苦難で鍛え上げるならば、そして生まれてくるであろう子の母親も身体面において力強くよく鍛錬されていれば、それが適うであろう」(クリティアス, 断片 32 デイール).

3) またホメロスは「楯作りの段」において、次のように述べている。

「彼はその中に、大地、天、海を作った。  
またその中に、大海オケアノスの偉大なる力を作った」

(ホロス『イリアス』18.483 ; 18.607).

4) これに対してスィリア人のフェレキュデスはこう述べる。「ザースは大きくて美しい衣をつくり、その中に大地とオゲノス、そしてオゲノスの館を縫い取った」(フェレキュデス, 断片 2 デイール).

5) はたまたホメロスはこう述べる。

「羞恥の念は、あるいは人間を大いに損ない、あるいは益する」  
(cf. ホロス『イリアス』24.45).

6) 一方エウリピデスは『エレクトゥス』の中で次のように記している。

「羞恥の念について、わたし自身は判断がつきかねます。  
必要とするかと思えば、大きな災いともなるからです」

(エウリピデス『エレクトゥス』断片 365).

10.1) あるいは、相互に借用しあっている場合としては、同じ時代に活躍しまた互いに競い合った詩人たちからも、その用例をあげることができよう。2) たとえば次はエウリピデスの『オレステス』からの一節である。

「おお、眠りの愛しい魅惑よ、病の防ぎ手よ」

（エウリピデス『オレステス』 211）.

- 3) 一方次の用例はソフォクレスの『エリフュレ』からの一節である。

「退出するがよい。あなたは病の癒し手・眠けを催している」

（ソフォクレス『エリフュレ』断片 198）.

- 4) またエウリピデスの『アンティゴネ』には次のような一節がある。

「庶子というと、名前では軽蔑されるが、その本性は変わらない」

（エウリピデス『アンティゴネ』断片 168）.

- 5) 一方、次の一節はソフォクレス『アレアダイ』からのものである。

「すべて良きものは、等しい本性を備えている」

（ソフォクレス『アレアダイ』断片 84.2）.

- 6) 次は再びエウリピデスの『テメノス』からの一節である。

「苦しむ者には神もまた援助を惜しまない」

（エウリピデス『ヒッポリュトス』【初版】断片 432.2）.

- 7) 一方ソフォクレスは『ミノス』の中でこう歌っている。

「行動に出ない者どもには、運命は味方しない」

（ソフォクレス『ミノス』断片 374）.

- 8) また次の一節は、エウリピデス『アレクサンドロス』からのものである。

「時が、あなたの姿を明らかにしてくれるでしょう。

時を証しにわたくしは、

あなたが良き方か、悪しき方かを学び取り、知り分けるでしょう」

（エウリピデス『アレクサンドロス』断片 60）.

- 9) 一方次の一節は、ソフォクレス『ヒッポノオス』からのものである。

「さらに加えて隠し事など決してするな。すべてを見そなわし、

すべてを見そなわす時が、すべてを明らかにするのだから」

（ソフォクレス『ヒッポノオス』断片 280）.

11.1) では次の事柄をも同様に探究してみることにしよう。エウメロスは次のように詩作している。

「9人の乙女ごらは、ムネモシュネと、オリュンポスのゼウスの御娘」

（エウメロス、断片 16）.

- 2) 一方ソロンは、エレゲイアを次のように始めている。

「ムネモシュネと、オリュンポスのゼウスの輝かしき御娘らよ」

（ソロン、断片 13.1）.

- 3) またエウリピデスは、ホメロスの次の句を書き換えている。

「あなたは一体、どこのどなたですか？ お国はどちらで、ご両親はど  
ういう方でしょう？」(ホロス『オデュッセイア』 1.170；14.187)。

- 4) エウリピデスはこれを、『アイゲウス』の中で次のようなイアンボス詩にしている。

「われわれはあなた様のことを、どちらの国のご出身だと  
申しましょうか、この国の客人になられるとは。  
お生まれはどんな国でしょう。  
生んだ方はどなたでしょう。どんなお父上の子と呼ばれるのでしょ  
う」(エウリピデス『アイゲウス』断片 1)。

- 5) 次はどうだろうか。テオグニスには次のように歌っている。

「酒の飲みすぎは良くない。だが自覚的に飲むのなら、  
害にはならず、むしろ効能がある」(テオグニス, 509)。

- 6) 一方パニュアッスイスはこう記している。

「酒は、人類にとって神々からの、何と最良の贈り物であることか、  
程よく飲むなら。でも度を過ぎるとかえって始末が悪い」

(パニュアッスイス『ヘラクレイア』断片 14.1；14.5)。

- 12.1) だがそればかりでなく、ヘシオドスにはこう歌っている。

「あなたには、火の代わりに災いを与えよう。それは、すべての者に  
とって喜びとなるものだが」(ヘシオドス『農と暦』 57 以下)。

- 2) 一方エウリピデスの詩は次のようである。

「火の代わりとなるもう一つの火、すなわち女性は、  
より大きく、さらに打ち克ちがたい芽となる」

(エウリピデス『ヒポリテス』初版, 断片 429)。

- 3) さらにホメロスは次のように歌っている。

「ひもじくなった腹を満足させるのは不可能だ。  
破滅的だ。腹は多くの災いを人間にもたらす」

(ホロス『オデュッセイア』 17.286 以下)。

- 4) 一方エウリピデスはこう歌う。

「わたしは必要に負けてしまった。それは悪しく破滅をもたらす腹だ。  
そこからすべての災いが発生する」(エウリピデス, 典拠不詳断片 915)。

- 5) また喜劇作家のカッリアスは次のように記している。

「狂人と一緒だと、みんなが同じように狂わねばならないと言われる」

（カリアス、断片 20）.

6) 一方メナンドロスは『売られた者たち』の中で、これに張り合っこう述べている.

「賢慮ある者がいても、どこでも調和するわけではない。  
何人かはともに狂わねばならない」

（メナンドロス『売られた者たち』断片 421）.

7) テオス島のアンティマコス<sup>1</sup>は次のように語っている.

「贈り物からは人間にとって多くの災いが生まれる」

（アンティマコス、断片 1）.

8) 一方アギアスは次のように詩作する.

「贈り物も業も、人間の心を欺くもの」（『ノストイ』断片 8）.

13.1) またヘシオドスは次のように述べている.

「良き妻よりも素晴らしいものを、男が手に入れることはできない。  
悪しき妻よりも恐ろしきものは他にない」

（ヘシオドス『農と暦』702 以下）.

2) 一方シモニデスは言っている.

「良き妻よりも素晴らしいものも、悪しき妻よりも恐ろしきものも  
男は手に入れることができない」（シモニデス、断片 6）.

3) またエピカルモスはこう述べている.

「長い期間を生きるためには、ほんのわずかな期間しか生きていない  
と思うことだ」（エピカルモス、断片 267）.

4) 一方エウリピデスは次のように語る.

「明らかならざる幸いととも生きるのであれば、どうしてわれわれ  
は、できるだけ幸いに生きられるよう、苦しまずに生きないであろ  
うか」（エウリピデス『アンティオバ』断片 196.4 以下）.

5) 同様に、喜劇詩人のディフィロス<sup>2</sup>は次のように述べている.

「人間の生涯は変転に満ちたもの」（ディフィロス、断片 118）.

6) 一方ポセイディッポスはこう言う.

「人生を苦痛なく生き抜ける人間はいないし、  
人生の最後まで不幸のままにいる人もいない」

（ポセイディッポス、断片 30）.

7) またプラトンも、人間が変化極まりない動物であることについて、これに  
関連する事柄を記し述べている（プラトン『第 13 書簡』360D）.

- 8) エウリピデスは、さらにこう語っている。

「おお人生よ、汝は死すべき人間にとって大いに厭わしいもの、  
すべてにおいて、躓きに満ちて待ち構える。  
あるものを育て、あるものを萎れさせ、  
何であれ、人間にとって完遂せねばならない事柄に対し、  
いかなる定めをも設けない、  
ゼウスの許から、死という氷のような終末が  
送り届けられる以外には」(エウリピデス、典拠不詳断片 916)。

- 9) 一方ディフィロスはこう記している。

「災い、苦悩、思い煩い、略奪、苛み、病を  
秘めていない人生など存在しない。  
これらの災いにとって、死は一種の医師のように映る。  
災いを負う人々を、眠りによって憩わせ、  
終息させるのだから」(ディフィロス、断片 88)。

- 14.1) さらにエウリピデスはこう言っている。

「神霊には多くの姿がある。  
神々は、多く予期せぬかたちで支配する」。

(エウリピデス『アルkestis』 1159 以下；『Andromache』 1284 以下；  
『Hakai』 1388 以下；『Helen』 1688 以下)。

- 2) 悲劇詩人のテオデクテスも似たようなことを記している。

「人間の運勢の定めなきこと」(テオデクテス、典拠不詳断片 16.3)。

- 3) またバッキュリデスは次のように述べている。

「神霊がすべての時間を与えるのは、  
人間のうち限られた者に対してのみ。  
盛りの活動をする者たちが、灰髪の初老に至る頃、  
突如死が忍び寄り」(バッキュリデス、断片 25 ブラズ)。

- 4) 一方喜劇詩人のモスキオンはこう記す。

「すべての者のうちで最も幸いなのは次のような人、  
それは最後まで生きて平凡な人生をまっとうする者」

(モスキオン、典拠不詳断片 10)。

- 5) テオグニス is 次のように言っている。

「若い妻は老いた夫にとって良いものではない。  
小船みたように、舵に従わないから」(テオグニス、457 以下)。

6) これに対して喜劇詩人のアリストファネスが次のように記しているのが見出されよう。

「若い妻にとって年老いた夫は恥ずかしいもの」

(アリストファネス, 断片 600).

7) アナクレオンは次のような詩を作っている。

「わたしは、優雅な愛神が、花も豊かな花冠につぼみをつけるのを  
歌い寿ぐ。この方こそ、神々の  
支配者、人間をも征する方」(アナクレオン, 断片 65).

8) 一方エウリピデスはこう記している。

「愛神は、男や女を攻め落とすだけではない。

天上界にあって、神々のたましいを平定し、

大海をも制する」(エウリピデス『ヒッポリュトス』初版, 断片 431).

15.1) だが、われわれが栄誉を追求し、御言葉と教説に関してギリシア人たちが剽窃を行ったという事実を立証しようと逸るあまり、この叙述が冗長になり過ぎることのないようにしたい。そこで、ここではわれわれに証言をしてくれるエリスのソフィスト・ヒッピアスに登場願おう。彼は、わたくしがいま取り掛かっているのと同じ問題に遭遇している。2) 彼は、およそ次のようなことを述べているのでこれを引用しよう。2) 「彼らの中で、ある事柄はオルフェウスによって、またある事柄はムサイオスによって、端的にそれぞれ別の場所で語られており、またある事柄はヘシオドスによって、またある事柄はホメロスによって、あるいはさらに別の詩人たちによって語られている。またそれらの事柄は散文作家たちのうちにも見出されるが、そのある者はギリシア人、ある者は異邦人なのである。しかるにわたしはこれらの人々すべてのうちからほぼ同質と思える事柄を抽出し、この新しくかつ多彩な論を展開しようと思う」(エリスのヒッピアス, 断片 6 ティールス).

16.1) だが哲学と歴史ばかりでなく、弁論術もまた同様の批判を免れ得ないということに気づくために、これらに関しても少しばかり提示するのが適切であろう。

2) クロトンの人アルクマイオンは、「敵人を警戒するのは、友人を警戒するよりも容易である」(アルクマイオン, 断片 5 ティールス) と言っているが、3) ソフォクレスは『アンティゴネ』の中で次のように詩作している。

「悪しき友よりも大きな傷が何かあり得るだろうか」

(ソフォクレス『アンティゴネ』 651 以下).

4) 一方クセノフォンも次のように述べている。「友人のように見せかけることほど敵に害を与えることはない」(クセノフォン『キュロスの教育』5.3.9).

5) エウリピデスも『テレフォス』の中で次のように述べている。

「われわれはギリシア人であるのに異邦人に仕えるのか」

(エウリピデス『テレフォス』断片 719).

6) 一方トラシユマコス『ラリッサの人々のために』でこう言っている。「われわれはギリシア人であるのに、異邦人のアルケラオスに隷属するのか」(トラシユマコス, 断片 2 ティールス).

17.1) またオルフェウスは次のように詩作している。

「水は靈魂にある。だが死こそ水にとって返礼。

水から土ができ、土から再び水ができる。

実に靈魂は、水から大気をすべて取り替えるのだ」

(オルフェウス, 断片 230 アーベル).

2) ヘラクレイトスはこれらの詩句から自らの教説を構成し、およそ次のように記している。「靈魂にとって水となることは死である。水にとって土となることは死である。土から水が、水から靈魂ができるのだから」

(ヘラクレイトス, 断片 36 ティールス).

3) ピュタゴラス派のアタマスは次のように述べている、「生成せざる万物の始原・根源は次のように4つある。それは火・水・空気・土である。これらのものから、生成するものの誕生がある」。4) 一方アクラガスの人エンペドクレスは次のように詩作している。

「まず、万物の根源としては4つ存在することを聞け。

それは火と水と土、そして大気の限りなき高みである。

これらから、かつてあったもの・これからあるであろうもの・いまあるものができる」(エンペドクレス, 断片 6.1; 17.18; 21.9 ティールス).

5) またプラトンは次のように言っている。「それゆえに神々は人間界の事どもを知悉しており、最も慈しむものどもを、いちはやく生から解放するのだ」(伝プラトン『アクスイコス』367BC). 6) 一方メナンドロスは次のように詩作する。

「神々が愛する人は、若くして亡くなる」

(メナンドロス『二度だまし』断片 125).

18.1) 一方エウリピデスは『オイノマオス』の中で次のように記している。

「われわれは、現れた事柄から見えない事柄を証する」

(エウリピデス『オイノマオス』断片 574).

2) 一方『フォイニクス』ではこう語られる。

「見えない事柄は、しるしによって相応しく捉えられる」

(エウリピデス『フォイニクス』断片 811)。

3) ヒュペレイデスは言っている。4) 「見えない事柄については、学ぶ者たちがしるしと像をもって探究せねばならない」(ヒュペレイデス、断片 197)。

5) イソクラテスもまたこう述べている。「将来の事柄は、すでに起きた事柄に照らして証しせねばならない」(イソクラテス 4.141)。これに対してアンドキデスも次のように述べるのをためらわない。「将来に起こるであろう事柄に関しては、以前に生じたしるしを用いる必要がある」(アンドキデス、3.2)。

6) さらにテオグニスも次のような詩を歌っている。

「偽の黄金や、銀をめぐる迷妄はまだ耐えられる、  
キュルノスよ、そして知恵ある人間にはその発見も容易である。  
だが友なる人の胸のうちに隠された心は、  
偽りとならば、思いのうちに欺きの心を持つ。  
これは神が、人のうちに、  
もっとも欺瞞に満ちたものとして備えたもの、  
そしてこれを見分けるのは、どんなことよりも困難なこと」

(テオグニス、119 - 124)。

7) 一方エウリピデスは次のように記している。

「おおゼウスよ、あなたは何故、黄金のうちでも何が偽物であるかを  
明らかなしるしとして人間に与えたのか。

でも人間のなかの悪人をどのようにして判別すべきでしょう。

いかなる特徴も、身体に生まれつき宿っているわけではないのだから」

(エウリピデス『メデア』516 - 519)。

8) 一方ヒュペレイデスは、自ら次のように述べている。「人間の思惟のいかなる特徴も、その顔の上には現れない」(ヒュペレイデス、断片 198)。

19.1) またスタスィノスは次のように詩作している。

「父を殺し子供たちを残す者は愚かだ」(『キプリア』断片 22)。

2) クセノフォンは言っている。「わたしには、<父を殺めながらその子供の命を助けてやる者は>と言っても同じように思える」(ハロトス『歴史』1.155)。

3) ソフォクレスも『アンティゴネ』の中でこう歌っている。

「母親も父親も冥府の人となったのに、どうして

兄弟が増えることを望めましょうか」(ソフォクレス『アンティゴネ』911 以下)。



4) 一方ヘロドトスは言っている。「母も父ももういないので、わたしにはさらに兄弟ができることはありません」(ヘロドトス『歴史』3.119)。

5) さらにテオポンポスが次のように詩作している。

「老人が二倍の子供だとはよく言ったもの」(テオポンポス、断片 69)。

6) 彼に先行して、ソフォクレスは『ペレウス』のなかでこう述べている。

「わたしは女主人として、ただ一人

アイアコスの裔ペレウスを手引きし、新たに教育しましょう。

年老いた男は二度目の子供だといえますから」

(ソフォクレス『ペレウス』断片 447)。

7) 弁論家のアンティフォンはこう言っている。「老人を養うことは、子供を養うことに似ている」(アンティフォン、断片 66 テイルス)。8) そればかりではなく哲学者のプラトンもこう言っている。「おそらく老人は、二度目の子供になるだろう」(プラトン『法律』646A)。

20.1) さて、トゥキュディデスは次のように記している。「 Marathon ではなくが武勇を奮った」(トゥキュディデス『戦史』1.73.4)。2) これに対してデモステネスは次のように言っている。「 Marathon で武勇を奮った人々に誓って」(デモステネス『冠について』208)。

3) 次のことに関してもわたくしは看過すまい。クラティノスは『ピュティネ』で次のように述べている。

「準備に関しては、あなた方もおそらくご存じでしょうが」

(クラティノス『ピュティネ』断片 185)。

4) 一方弁論家のアンドキデスはこう言っている。「おお陪審員諸君よ、わが敵の準備と戦意については、あなた方のほとんどすべてがお気づきでしょう」(アンドキデス、1.1)。5) 同じようにニキアスも、リュシアスに宛てた『預金について』の中でこう述べている。「訴訟の相手による準備と戦意については、おお陪審員諸君よ、あなた方がご覧のとおりです」(リュシアス、断片 70)。これに対してその後、アイスキネスもこう言っている。「おおアテナイ人諸君、あなた方は準備のほどと戦列とをご覧になっている」(アイスキネス、3.1)。

7) 一方デモステネスは、次のように語っている。「おおアテナイ人諸君よ、この争いをめぐり、どれほどの熱意で勢力合戦が行われたか、あなた方のほとんどすべてでご存知だとわたしは思う」(デモステネス『偽りの使節派遣について』

1)。一方フィリノスも同様にこう述べている。「おお陪審員諸君、この争いをめぐり、どれほどの熱意で勢力合戦が行われたか、あなた方の一人として知ら

ぬ方はないとわたしは思う」（フィリス、断片4）。

21.1) またイソクラテスは次のように言っている。「財産関係は別として、彼とは類縁ではない」（イソクラテス、19.31）。2) これに対しリュシアスは『孤児について』の中で、こう述べている。「彼は血縁上ではなく、単に財産上の縁者であることが明らかになった」（リュシアス、断片84）。

3) ホメロスもこう述べている。

「おお兄弟よ、もしこの戦いから逃れたなら、  
われらは常に不老、君たちは不死の身となるだろう。  
わたしは最前線で戦うこともなく、誉れを授ける戦いに  
そなたを送り込むこともせずに。  
だがそれでも、いまや死の幾多の定めが迫っておろうとも、  
それは人間として、避けることも逃れることもできないのだから、  
行こうではないか、もしやわれらの誰かに誉れが授かるかと望むの  
なら」（ホメロス『イリアス』12.322 - 328）。

4) 一方テオポンポスはこう記している。「もし現在の危険を逃れおおせて、残りの人生を安寧に過ごしたとしても、そんな臆病な生涯は驚くに当たらない。むしろ今、これほど多くの死の危険が生命に差し迫っているのだから、戦いにおける死のほうこそ選び取るべきものだと思う」（テオポンポス、断片77）。

5) では次の例はどうだろうか。ソフィストのキロンはこう叫んでいる。「見よ、破滅が近づいている」（cf. 『ストロマテイス』1.14.61.2）。これに対し、エピカルモスは同じ見解を他の名詞を持ち出してこう述べている。

「破滅という娘が近づいている。刑罰の娘だ」（エピカルモス、断片268）。

22.1) だがそればかりでなく、医師のヒポクラテスも「時と場所、年齢と病気に留意せねばならない」（ヒポクラテス『医師の心得』1.2）と述べている。2) これに対してエウリピデスは、それをヘクサメトロス（六脚韻）で次のように歌っている。

「巧みに病を癒すことを知る者は、その町に住む人々の食生活や  
土地柄に目を向け、病を観察する必要がある」

（エウリピデス、断片917）。

3) 一方ホメロスは次のように詩作している。

「モイラ（運命）に関しては、いかなる人間もこれを免れることはできない」（ホメロス『イリアス』6.488）。

3) さらにアルキノスも次のように語っている。「すべての人間は、遅かれ早か

れ死なねばならない」(cf. アリストテレス『アテナイ人の国制』34.3). またデモステネスはこう言っている。「すべての人間にとって、人生の終焉は死である。たとえ彼が小部屋に自らを閉じ込めて守っていたとしても」(デモステネス『冠について』97).

23.1) ヘロドトスもまた、スパルタの人グラウコスに関する物語の中で、ピュティアがこう言ったと述べている。<神にあっては試みるのと為すのとは同じこと>(『歴史』6,86). 2) 一方アリストファネスはこう述べる。

「思惟するのは実行するのに等しい意味をもつ」(断片 691).

3) またそれ以前にエレアの人パルメニデスは

「思惟と存在とは同一である」(断片 5)

と述べている。4) いったい、プラトンはくわれわれは、性愛の始まりは見ることであり、希望は情念を減らし、記憶は育み、習慣は守ると言ってもあなたがちの外れではなからう>(『ファイドロス』249d, 250cd, 251c; 『饗宴』210a-e) と述べているし、5) 喜劇詩人フィレモンもこう記している。

「すべての人々はまず見て、それから驚き、

さらに思い巡らし、それから望みを

抱くもの。そしてこれらから性愛が生ずる」(断片 138).

6) そればかりでなく、デモステネスも「われわれは皆、死ぬのが義務である」(『冠について』97) 云々と述べ、ファノクレスもまた『愛または美』の中でこう記している。

「いかにも、モイラ(運命)の網は解きたい。われらがどれほど

大地に生まれようとも、そこから逃れることはできない」

(ファノクス, 断片 2).

24.1) あなたはおそらく、プラトンが「植物はすべて、その最初の芽が徳に向けて美しく方向づけられるならば、自らの本性のうち最も強力な部分が、適合した目標を自らに課す」(プラトン『法律』765E) と言っているのに対し、2) 歴史家のエフォロスが次のように述べているのを見出すであろう。「野生の植物は、若い頃を逸すると、まったく矯正が効かないものである」。

3) またエンペドクレスに次のような詩句がある。

「かつてわたくしが少年また少女、

低木、鳥、また大海の鱗ある魚であったころ」

(エンペドクレス, 断片 117 テイルス).

4) これをエウリピデスは『クリュシッポス』の中で次のように改変している。

「生じたものは、何一つ死滅することはない。  
あるものからまた別のものへと分かれてゆき、  
他の形態を呈するだけのこと」

（エウリピデス『クレシュポス』断片 839,12 – 14）.

5) またプラトンは『国家』篇の中で、女性は共有であると述べているが（プラトン『国家』457C）、6) エウリピデスは『プロテシラオス』の中で次のように記している。

「女性の寝台は共有であるべきだ」（エウリピデス『プロテシラオス』断片 653）.

7) 他にエウリピデスは次のように記している。

「必要なだけのもので、賢慮ある者たちには十分なだから」

（エウリピデス『フェニキの女たち』554）.

8) これに対してエピクロスはこう述べている。「自足こそ、すべての中で最も富めるもの」（エピクロス、断片 476）.

9) またアリストファネスは次のように記している。

「あなたは正しくあれば、生活をしっかりと保てるだろう。  
そして混乱も恐怖もなく、美しく生きられるだろう」

（アリストファネス、断片 899）.

10) これに対してエピクロスはこう述べる。「正義の最大の実りは、惑わないこと」（エピクロス、断片 519）.

25.1) 思想に関するギリシア人たちの窃盗の種類は以上で充分であろう。それは、洞察力のある人にとっては、以上の範例で事足りるという意味である。彼らは、すでに示したように、思想や措辞に関して借用を行い言い換えをしているのが判明するばかりでなく、完全な窃盗を行っているということが吟味によって明らかにされるであろう。2) 彼らは単独で、他者のものを自らのものとして盗んでは取り込んでいる。それはたとえば、キュレネの人エウガンモンがムサイオスから『テスプロトイ人について』という著作を完全に盗み、またカミロイの人ペイサンドロスがリンドスの人ペイシノスの『ヘラクレイア』を盗み、さらにはハリカルナッソスの人パニューアッシスがサモスの人クレオフュロスから『オイカリアの占領』を盗んでいるといった具合である。

26.1) さてあなたは、偉大なる詩人ホメロスが、

「あたかも人がオリーブの繁茂する若枝を慈しむように」

（ホメロス『イリアス』17.53）

以下の詩句を、そのままオルフェウスによる『ディオニュソスの失踪』（オルフェウ

ス、断片 206) から転用しているのを見出すことができるだろう。

2) また『テオゴニア』の中では、クロノスに関して次のような詩句がオルフェウスによって作られている。

「彼は細いなじを別に作っておいた。それを、万能のヒュプノス（眠り）神が嘉された」（オルフェウス、断片 149）。

これをホメロスはキュクロプスに転用している（ホメロス『ホメリクス』 9.372 – 373）。

3) ヘシオドスも『メランプース』の中で次のように詩作している。

「不死なる神々が、人間たちにどれほど多くのものを備えたかを  
知ることは甘美なこと、それは弱き者・強壯な者の持つ明白な徴」

（ヘシオドス『メランプース』断片 164）。

それに続く部分も、これは詩人ムサイオスから字句どおり借用したものである（ムサイオス、断片 7 テイリス）。

4) また喜劇詩人のアリストファネスは『テスモフォリアの女たち』初版の中で、クラティノスの『燃やされた人々』からの詩句を転用している。5) 一方喜劇詩人のプラトンとアリストファネスは、『ダイダロス』の中で互いに借用しあっている。6) 一方喜劇詩人のフィレモンは、アリストファネスの息子のアラロスによって作られた『ココロス』を、自らの『ヒュポポリマイオス』の中に借用し喜劇化している。7) また歴史家のエウメロスとアクシラオスは、ヘシオドスの詩句を散文に書き換え、自分の文章のように改変している。8) さらに、歴史家であるレオンティノイの人ゴルギアス、ナクソスのエウデモスは、メレサゴロスの著作から盗用を行っている。彼らばかりでなく、プロコンネソスの人ピオンもそうであるが、彼はいにしえの人カドモスの著作をまとめ、転用することも行っている。さらにアンフィロコス、アリストクレス、レアンドリオス、アナクシメネス、ヘッラニコス、ヘカタイオス、アンドロティオン、フィロコロス、さらにはメガラの人ディエウキダスも、ヘッラニコスの著作である『デウカリオン譚』の冒頭部分を改変している。27.1) わたしは、エフェソスの人ヘラクレイトスについては沈黙を守ろう。彼はそのほとんどの部分をオルフェウスから取り入れている。2) またプラトンはピュタゴラスから、靈魂不死説をも摘み取っているが、彼は他にエジプト人からも借用している。3) しかるに、プラトン門下の人々の多くは彼の著作を編集しているが、それに拠ると、はじめにわれわれが述べたストア派、そしてアリストテレスは、教説の大半またもっとも主要なる部分をプラトンから借用しているということが示さ

れている。4) そればかりでなくエピクロスもまた、主たる教説をデモクリトスから折衷しているのである。

5) ここでは以上にしておこう。なぜならもし、ギリシア人たちによる自己中心的な窃盗について、また彼らが、われわれの許から取り込んだ事柄を、自前による最も美しい教説の発見だと言ってわが物顔をしている様について、いちいち反駁しつつ詳説することを選択したならば、わたしの生涯は尽きてしまうだろうからである。

### III. 聖書の物語からのギリシア人の借用

28.1) さて、すでに異邦人から教説を抽出した人々ばかりでなく、彼らに加え、われわれの許にある、天上の神的な力により聖なる生き方をしている人々を通じ、われわれの回心のために、予想に反して働く事柄を模倣し、ギリシアの神話的語りを通して驚異譚を語る人々もまた、その教えが論駁された。2) そこでわれわれとしては、彼らが物語っている事柄が真実であるのか虚偽であるのか、彼らに問い質してみよう。彼らはそれが「虚偽だ」と言うことは決してあるまい（彼らが自らに対して「否」の投票をすることはありえまい。それは彼らが自ら進んで、虚偽を書き記すという、最大の愚行を行っているということ認める行為であるから）。3) だがモーセと他の預言者たちを通して驚異のうちに示された事柄が、どうしてなお信ずるに値しないと彼らには映るのであろうか。全能である神は、すべての人間を氣遣い、救いに向けて回心を促すが、それはある者に対しては律法をもって、ある者に対しては脅威をもって行われる一方、脅威を含む徴が用いられる場合もあれば、温和な告知をもってそれが行われることもある。4) ギリシア人たちは、かつて早魃が長年にわたってギリシアを疲弊させ収穫の不作をもたらしたおりに、伝説によれば、その生き残った人々が飢餓から嘆願者となり、デルフォイに赴いてピュティアの巫女に「どうすればこの恐怖から逃れることができるのか」と尋ねたという（アポロドロス『ビブリオテカ』3,12,6,9以下）。5) 巫女は彼らに対して、災厄に対する唯一の救い道を告げた。それは、アイアコスの祈りを用いよ、というものであった。そこでアイアコスが彼らの信頼を一身に集め、ギリシアの山に登り、浄らかなその両手を天に向かって差し伸べ、神のことを共通な父と呼び、打ち砕かれたギリシアを神が憐れんでくださるようにと祈った。6) 彼が祈りを捧げると同時に突然雷鳴が轟き、あたり一面の大気が雲に包まれた。そして激しく止むこ

とのない雨が降り注ぎ、その辺り一帯を満たしたという。こうして申し分のない豊かな収穫がもたらされたが、それはアイアコスの祈りによってもたらされた実りであった。29.1) 聖書にはこう語られている。〈サムエルが主を呼び求めると、主は刈り入れの日、轟きと雨とを下した〉(サムエル上 12,18)。2) 〈正しき者たちにも不正なる者たちにも雨を降らせる〉(マタイ 5,45) 方は、自らの下に配された諸力を通じてそう行うのであるが、その方は一なる神に他ならないということが分かるだろうか。3) しかるに聖書全体は、正しき人々の祈りを通じて、われわれに関わる事どもすべてについて、個々の願いを神が聞き届け完遂するという例に満ち満ちている。

4) またギリシア人たちは、ケオス島において季節風がしばらく止んだとき、アリストaiosが、雨を降らせるゼウスに生贄を捧げたという。風が続き、万物が炎天下で干上がり、実りを冷やすのが常である風は吹かなかったというのである。その風を、彼は容易に呼び求めることができたのである。

5) 一方デルフォイにおいて、クセルクセスがギリシアに向けて進軍しようとしたとき、ピュティアはこう答えた(ヘロドトス『歴史』7.178; 7.188)。

「おおデルフォイの人々よ、風に向かって祈りを捧げよ。そうすればより良くなるだろう」。

つまり彼らは風に対して祭壇や捧げ物をして、風を助力者にしたというのである。かくしてセピアス岬の辺りで風が激しく吹き、ペルシア軍のすべての装備を全滅に追い込んだというわけである。

30.1) またアクラガスの人エンペドクレスは「阻み屋」と呼ばれていた。というのも彼は、アクラガスの山から、あるとき辺り一帯に強くて病をもたらす風が吹き、彼らの妻たちが不妊になる原因となったとき、風を止めたと言われているからである。2) それゆえ彼自ら、叙事詩の様式で次のように記している。

「おまえは疲れを知らぬ風の力を止めるであろう。その風とは、  
地上に吹き起こって死すべき者どもの耕地を滅ぼすもの。  
また再び、汝が望むなら、返報の風を起こせるだろう」

(エンペドクレス、断片 111.3 - 5)。

3) さらに彼は、自分に倣って「ある者たちは神託の術を用い、またある者たちは長く辛い病に悩んだ」(同上 112) と言っている。4) 実に人々は、義人たちが、われわれの手許にある書物から、癒しや徴や怪異を執り行っていると信じてきた。もし彼らが、何らかの諸力や風を起こし、雨をもたらすとすれば、次の詩篇を耳にするがよからう。〈諸々の力の主よ、あなたの幕屋はなんと愛

すべきものであることか>（詩篇 83,2）. 5) この方は諸力・諸権能・諸能力の主なのであって、彼についてモーセは、われわれがこの方とともにあれるように、こう述べている。それは<あなた方の心の頑なさの包皮に割礼を施せ。二度とあなた方のうなじを頑なにしてはならない。なぜならあなた方の神である主は、主なる諸存在の主、神々の神である方、偉大にして力強き神であるから>以下の部分である（申命 10,16 以下）。6) イザヤもまた、こう言っている。<あなた方の目を上げて見よ。誰がそれらの事すべてを創造したのか>（イザヤ 40,26）。

31.1) 一方ある人々は、疫病や雹や竜巻やその他の類も、質料的な無秩序のみによってではなく、諸霊や善くない天使たちの怒りに伴って生じるのだと考えたがと言う。2) クレオニスに住む魔術師たちは、雹を降らすであろう雲を中空に認めると、歌や奉納物でもってその怒りの脅威を去らせると言われている。3) すなわちもし何か死などの不都合が生物に取りつくと、彼らは自らの指から血を流させて生贄の用に供するのである。4) またマンティネイアのディオティマは、疫病に先立ってアテナイ人たちを生贄に献げ、病の発生を10年遅らせたという（プラトン『饗宴』201D）。それはクレタ島のエピメニデスの場合も同様であって、人々のための彼の献げ物は、ペルシア戦争を同じ期間だけ遅延させたという（プラトン『法律』642D）。彼らは、その靈魂をわれわれが神々と呼ぼうが天使と呼ぼうが、何も違いはないと考えている。5) しかるにこの方面に長けた人々は、神域の多く、ないしそのほとんどすべてにおける至聖所において、そこに鎮座する神々の聖域をしつらえ、それらの靈魂を「霊」と呼び、人々に対してそれらを崇めるよう教えている。それはあたかも、その「霊」が、生の浄らかさのゆえに、神的な先慮により、人々の儀礼を通じて、その辺りの土地に徘徊する権能を得ていると言うかのごとくである。なぜなら彼らは、本性的に、ある種の靈魂は肉体によって支配されるということを知っているからである。32.1) だがこれらの事どもに関しては、論述が進めば天使論のくだりにおいて適宜述べることにしよう。

2) さてデモクリトスは、中空の事柄に関する観察によって多くの事柄を予知し、「智慧」と名づけられていた。弟のダマソスが彼の言うことに熱心に耳を傾けたので、デモクリトスはある星辰の推移から、豪雨になるであろうと証言した。そこである人々は彼の言うことを信じて収穫物を集めたが（ちょうど夏の盛りで、収穫の時期に当たっていたためである）、他の人々は不意に大量の雨が降り注いだためすべてを失ってしまった。



3) だがどうしてギリシア人たちは、シナイ山の麓での神の顕現をなお信じようとしなのだろうか。炎が燃え上がりながらも山の麓で育まれた物を何ら焼き焦がすことをせず、また楽器もないままラッパの響きが奏されて轟いたというのに（出エジプト3,2；19,18以下；20,18）。4) というのも、かの神の山への「降臨」と言われているものは、全世界に及ぶ神の力の顕現であり、それは近づきたい光を告げ知らせるものである。つまり聖書における比喩的表現（*allégoria*）とは、そのようなものなのである。5) それに加え、アリストプロスが言うように、「年端の行かない者を除いて100万人を下らない民衆がすべて、円状に山を取り囲んでいたときに、炎が見えた。山の周囲は5日かけてもめぐりきらないほどの大きさであった」のである。33.1) したがって、この顕現の場所すべてにおいて、あたかも野営していたかのような人々すべてに、燃え上がる炎は看取されていた。だから神の降臨は場所的に起こったものではない。神は遍在するのである（イェルミヤ『福音の準備』8.10.12—17）。

2) 一方歴史書を編む人々は、ブリタンニア島の周辺の山に洞穴があり、その頂上には裂け目があると言う。風がこの洞穴に吹きつけ、空虚な部分の溝にぶつかると、シンバルをリズム良く叩くような響きが聞こえると言われる。2) またしばしば、木々の上部に風が一斉に吹くと、葉が動いて鳥の歌にもよく似た響きが生じる。4) 一方ペルシアの事柄を書き記した人々は、マゴイたちの住む比較的高い場所において、三つの山が広大な場所で一続きに並んでいると物語っている。この場所を通して旅した人々は、まず最初の山に至って波の打ち寄せるような音を聞くという。それはあたかも戦場であって、一万人を下らない人々が叫んでいるような具合だという。次に真ん中の山に至ると、同じ場所でさらに多くの人々がよりはっきりした叫びを挙げているようだという。そして最後には、あたかも勝どきのパイアン（パイオン）の声を挙げているかのような声が聞こえるという。5) 思うに、これらすべての響きの原因とは、場所の滑らかさと空虚さであろう。実に、一箇所に吹きつけた風が跳ね返され、再び同じ場所に赴いてより一層激しく響きを起こすのである。

34.1) だがこのことはこれまでにしておこう。全能の神には、たとえ臣下たる者が一人もない場合であっても、聴覚に、声と幻影とを生じさせることができるのである。その際に神は、連関を自然なかたちで有する普通のあり方に反して自らの偉大さを示す。それは、それまで信ずることをしなかった靈魂を回心に向かわしめ、与えられた掟を受容するようにさせるためである。2) しかるに雲や高い山が存在する場合に、どうして異なった響きを聞き届けること

が不可能なことがあろうか。そこに内働する原因によって霊が動かされるとい  
うのに、それゆえ預言者もこう言っている。〈あなた方は語りかける言葉の  
声を聞いたが、その似姿はまったく見なかった〉（申命 4,12）。3) お分かりであ  
らうか。主の声が、どうして形を伴わないロゴスであるのかが。というのも御  
言葉は力であり、主の光り輝く言葉であり、天上より教会の集いの上に到達す  
る真理なのであり、光り輝く専心的な奉仕を通して働いてきたからである。

#### IV. エジプト人およびインド人からのギリシア人の借用

35.1) さてわれわれは、哲学者の中でも最も優れた者たちが、教説の最も  
優れた部分をわれわれから強奪して自説であるとし、あるいは、異端派渾に  
自説を拡散させる他の異邦人たちからも剽窃を行っているのを見出す。それ  
が著しいのはエジプト人たちからであって、とりわけ、靈魂の輪廻転生説  
(metensōmatōsis) がその最たるものである。2) エジプト人たちも、なにがし  
か彼ら固有の哲学を有している。とりわけこれをよく示すのが、彼らのいとも  
聖なる儀礼 (threskeia) である。

3) まずは「歌師」が先導し、ある音楽の符牒版を携えている。この人物は  
ヘルメスの書から二巻を取り込んだに違いないと言われている。その一方は  
神々への讃歌を含むもので、もう一方は王の生涯を抜粋したものである。

4) 歌師に続いて登場するのは「占星術師」である。手には時計と紫色をし  
た占星術の符牒版を抱えて進み出る。この人物は、ヘルメスによる占星術の、  
数では四巻より成る書を、つねに口ずさんでいなければならない。そのまず一  
冊目は、惑星の世界に関するもの、二冊目は太陽・月・五つの惑星の運動に関  
するもの、三冊目は太陽と月の食と輝きに関するもの、そして四冊目はその「出」  
に関するものである。

36.1) 続いて「神聖書記」が進み出る。彼は頭に羽毛を挿し、両手には書物  
と籠を携えている。そのなかには墨として用いるインクと筆記用の葦ペンが  
入っている。それらは総称して「神聖筆記用具」と呼ばれており、これらは世  
界記述、地誌記述、エジプトの地域記述、ナイル川の描写、そして神官たちの  
用具と彼らによって聖化された場所、さらには韻律と聖事における有用な事柄  
に関して知るために必携である。

2) 続いて「聖衣係」が前述の人々の後に従う。彼は正義を執行するための  
定規と神酒を捧げるための杯を手にして持っている。これらは全体として教養具、ま

た屠牛具と呼ばれている。彼らの許にある神々への崇敬に関わるもの、またエジプトの敬虔心に関係するものは10個ある。それはすなわち、薫香、初穂、讃歌、祈祷、行列、祝日あるいはそういったものの類である。

37.1) 彼らすべての後に「預言者」が登場する。彼は公然と水差しを抱きかかえており、彼の後に奉納用のパンを運ぶ者たちが続く。2) この人物は、いわば神官の代理人として、神的事項と呼ばれる十冊の書物をそらんじている(これは法と神々、そして神官団のすべての教養を包括するものである)。なぜならエジプト人たちにあつての預言者とは、収入の維持に関して知悉する者だからである。

3) さて、ヘルメス神に極めて不可欠な書物としては四二冊が数えられる。そのうちの三六書はエジプト人たちの哲学全体を包括するものであつて、前述した者たちはこれをそらんじている。しかるに残りの六書は「パストフォロイ」と呼ばれる人々が知悉している。これらは身体の状態、病氣、身体の器官、薬物、眼球、そして最期に女性に関する事どもに関わる医術書である。

38.1) エジプト人たちに関する事どもは、簡潔ではあるが以上で終わりとしよう。次にインド人たちの哲学についてであり、これについては大いに称揚されている。

2) マケドニア人のアレクサンドロスは、最も優れかつ最も寡黙であるとおぼしきインド人の裸体行者十人を選び、彼らに問題を課した。その際に彼は、もしたくみに返答できない場合には殺す、と威嚇しておいた。そしてまず最も年長の者一人に対して、返答するように命じた。3) かくしてこの男はまずこう尋ねられた。「生きている人間と死んでしまった人間と、どちらの数がより多いか」。そこでこの男は「生きている人間だ。なぜなら死んでしまった人間は存在しないから」と答えた。4) 次に二番目の男は「陸と海と、どちらがより多くの生物を養っているか」と尋ねられた。そこでこの男は「陸だ。なぜなら海は陸の一部であるから」と答えた。5) 次に三番目の男は「今日まで知られていない動物の中で、最も活発なのはどのような動物か」と尋ねられた。そこでこの男は「人間だ」と答えた。6) 次に四番目の男は「彼らの指導者であつたサッパスを追放したのは、どのような理由によるのか」と尋ねられた。そこでこの男は「自分たちは彼が美しく死ぬよりも美しく生きていることを望んだからだ」と答えた。7) 次に五番目の男は「昼と夜とどちらが先に生じると思うか」と尋ねられたので、この男は「夜が一日分早い。なぜなら答えのない質問に対しては、答えでない答えをもつて返答することが必要であるから」と答

えた。8) 次に六番目の男は「最も愛されるにはどのようにすればよいか」と尋ねられた。そこでこの男は「恐ろしくない程度に力を十全に備えていれば」と答えた。9) 次に七番目の男は「どのようにして人間は神になるのか」と尋ねられた。そこでこの男は「人間には行うことのできない事柄を実行すれば」と答えた。10) 次に第八番目の男は「生と死と、どちらが力を持つか」と尋ねられた。そこでこの男は「生だ、災いをもたらす分だけ」と答えた。11) 次に九番目の男は「人間にとって、いつまで生きているのが良きことか」と尋ねられた。そこでこの男は「死んだほうが生きているよりも良い、と思うようになる時まで」と答えた。12) アレクサンドロス第十番目の男にも何か述べるように命じたが（この男は裁判官であった）、彼は「それぞれ皆、良くない答えを述べた」と話した。そこでアレクサンドロスは「あなたがそのような判決を下すということは、あなたがまず最初に死ぬべきだという意味か」と尋ねた。そこでこの男は「王よ、どうしてあなたは本当のことを言っていると言えようか、あなたはもっとも悪しき答えをした者を最初に殺す、とおっしゃったではないか」と答えた（プルタルコス『対比列伝：アレクサンドロス伝』64）。

## V. 救いの普遍性：神に関する認識のあり方

39.1) さてギリシア人が窃盗者として、聖書全体から抽出を行っているということに関しては、わたくしが思うに、複数の証拠から十分に示すことができると考える。2) ギリシア人たちのうちで極めて高名な人々が、神を認識において知っていたのではなく、単に周回的言説（periphrasis）において知っていたただけだ、ということについては、ペトロが『宣教』において次のように述べている（『ペトロの宣教』断片2-5）。2) 「あなたがたは、唯一なる神が存在し、その方が万物の始源を創造し、また終わりに関する権限を有している、ということを知っている」。3) そして「彼は見えざる方でありながら万物を見そなわし、収めきることのできない方でありながら万物を容れ、自らは欠けることのない方でありながら、万物がこの方のことを必要としましたこの方によって存在する。この方は把握しえず、永遠であり、腐敗せず、作られたものではなく、自らの力の言葉、すなわち子によって万物を創造した方である」。4) さらにこう付言している。「あなた方はこの方のことを、ギリシア人たちがするような仕方で崇敬してはならない」。ということはすなわち、われわれと同一の神を、ギリシア人たちの中で有徳の人々は崇拝しているが、彼らは完全なる認識

に拠るのではなく、子による伝承を学び取ってもいない、ということである。5) そこで使徒は「崇敬してはならない」と言いはするものの、それは「ギリシア人たちが崇敬している神を崇敬してはならない」と述べているのではなく、「ギリシア人たちがするようなやり方で崇敬してはならない」と言っているのであり、彼は神に対する崇敬の仕方を変えるべきだと述べているのであって、他の神を告げているわけではない。40.1) では<ギリシア人たちがするような仕方ではなく>とはいかなる意味であろうか。それはペトロ自身が次のように付言して明らかにしている。<彼らは無知にさいなまれ、われわれがするように完全な覚知でもって神を知っているのではない。神が彼らに対し、用いるようにと与えた能力でもって、彼らは木や石、青銅や鉄、金や銀で彫像を形作り、その素材や適切な使用法を忘れ、事物に隷属するものを打ち立て、崇めている。2) それは、神が彼らに対し、食すようにと与えたもの、すなわち空の鳥、海の魚、地を這うもの、四足で大地を巡る動物たち、いたちやねずみ、ネコやイヌ、サルなどである。これら人間にとって固有の食物を彼らは奉納物として奉獻し、死者を神々とし、彼らに対して死したものを奉納しつつ、神に感謝を捧げているのである。これらを通じて彼らは、神が存在するということを否定しているのである>。41.1) そしてわれわれとギリシア人たちは同一の神を認識しているものの、その次第は同様ではないということについて、彼は次のように付言している。<あなた方はユダヤ人たちのように崇敬すべきではない。彼らは自分たちだけが神を認識していると思っているが、それは彼らが良く認識していないからである。彼らが崇拝しているのは天使や大天使たち、月日や月なのだ。3) だからもし月が姿を現さないとすると、彼らは「第一の日」と呼んでいる安息日の儀を執り行わないし、新月の祭りも除酵祭も、祝祭も大祭も何も行わないのだ>。4) しかる後彼は、探究している事項の主要点を付言する。<だからあなた方も、われわれがあなた方に伝えた事柄を、敬虔に正しく学び、守るがよい。キリストを通して神を新たに崇敬しつつ。5) というのもわれわれは、主が語られたとおりに聖書のうちにこう記されているを見出すからである。「見よ、わたしはあなた方と新しい契約を交わす。それはわたしがホレブの山であなた方の父祖たちと交わしたようなものではない」(エミヤ31,31以下)。6) 主はわれわれと、新しい契約を交わした。なぜならギリシア人やユダヤ人の契約は旧いものであるが、われわれは新たに、同じ主を第三の世代として崇敬するキリスト教徒だからである>。7) 思うに彼は、唯一の神がギリシア人によっては異邦的に、ユダヤ人によってはユダヤ人らしく、そしてわれわ

れによっては新たにまた霊的に覚知されているということをはっきりと明らかにしている。42.1) さらに、同じ神が二つの契約の先導者であるということに加え、この神はギリシア哲学をギリシア人に与えた方でもある。それは全能の神が、ギリシア人たちにおいて、この哲学を通じて讃えられるようになるためである。次のことは、ここからも明らかである。2) すなわち、ギリシアの教養からのみならず、律法からも、救われる民の一つの種族へと、信を認める人々は呼び集められる。それはこれら三つの民が、時間によって分かれたることなく、本性において三種であると仮定できるように、唯一の主の様々な契約によって教育されるためである。彼らは一なる主の言葉を信じているのであるから。3) そして、神はちょうど預言者たちを遣わしてユダヤ人たちが救われることを望んだように、ギリシア人たちの極めて優れた人々をも、彼らの言葉に固有の預言者として立たせたのである。それは彼らが、神より来たる善き働きを受け入れることができるようにするためである。その際彼らは一般の人々から選りすぐられたのであり、このことを使徒パウロは『ペトロの宣教』によれば次のように述べて明らかにしている。43.1) 「あなた方はギリシアの書物も手に取るがよい。シビュラに関して、彼女が一なる神と、将来に起こるべき事柄を明らかにしているのを認識するがよい。またヒュスタスペスを手にとって読むがよい。そこに大いにはっきりと明確に、神の子について記されているのを見出すだろう。そして多くの王たちがキリストに対して闘いを挑むのと同様に、彼、彼の名を担う者たち、彼の信徒たちを憎み、彼の忍耐と彼の再臨を憎むということ」。2) その後彼は一言をもってわれわれに問いたす。「宇宙のすべて、そして宇宙のうちにあるものは、いったい誰のものであるか。神のものではないのか」。それゆえにペトロは、主が使徒たちに対してこう言ったと述べる。「誰かもし、イスラエルの人の中に、わたしの名によって回心し、神を信じることを望む者があれば、彼の罪は赦されるであろう。あなた方は12年後に世に出て行くが、〈われわれは聞いていない〉と言う者は一人もいないであろう」。

## VI. 救いの普遍性：ギリシア人に与えられた神の賜物としての哲学

44.1) 福音の告知が今まさに時宜を得てわれわれに届いているのと同じように、時宜に適った形で、ヘブライ人には律法と預言者が与えられ、ギリシア人には哲学が与えられた。哲学は彼らの耳を、福音の告知に適うように慣らしたのである。2) <イスラエルを購う聖なる神、主は言われる、わたしは恵みの

時にあなたを聞き届け、救いの日にあなたを助け、あなたを立てて民の契約とし、国を再興して荒野の嗣業を嗣がせる。縛めにある者たちにはこう命じる、出でよ、闇のうちにある者たちに身を現せ、と> (イザヤ49,7-9)。3) もしユダヤ人たちが縛めにある者たちだとすれば、彼らに向かって主も「出でよ、望む者らは、縛めのうちから」と述べた。彼らは自ら縛めのうちに身を置き、<背負い切れないほどの荷> (ルカ11,46) を、世俗的な妨害によって、自分たちの上に積み上げている者と呼ばれる。これはすなわち明らかに、彼らが<闇のうちに住む者>であって、偶像崇拜のうちに、靈魂の支配的部分を埋もれた状態で有している者だということを述べているのである。4) というのも信仰は、律法に照らして正しき人々には欠ける。それゆえ彼らをも主は癒してこう語る。<あなたの信仰があなたを救った> (マタイ9,22)。一方哲学によって正しき者どもには、主に対する信仰のみならず、偶像崇拜を遠ざける行為も欠けている。5) ただ真理が明らかにされるや否や、彼らは、すでに行ってきた行為を反省する。それゆえに主は、冥府に住める者たちにも福音を告げたのである。45.1) 実に、聖書にはこう語られている。<冥府は滅びに向かって言う。彼の姿を見たことはないが、彼の声聞いたことはある> (ヨブ28,22)。2) ここでは、この場所が声を受け取って前述のようなことを言っているわけではなく、むしろ冥府に留め置かれ、自らの身を滅びへと引き渡した人々が、いわば船から海へと自ら身を投じるかのように述べているのである。まさしくこの人々こそ、神の力と声聞き届けた人々である。3) 一体誰が、よく考えてみるならば、義人と罪びとの靈魂が一度の裁きに居合わせると仮定し、神の先慮の不公正さを詰ったりするだろうか。4) 果たしてどうなのだろうか。主は、洪水の際に没した人々にも (1ペトロ3,19以下)、あるいは縛めに遭っている人々にも、さらには監獄で見張りの許に置かれている人々にも福音を告げ知らせたということが明らかにされているではないか。5) 『ストロマテイス』第2巻においても、使徒たちが主に倣い、冥府にいる人々に対しても福音を告げ知らせたということが示された (『ストロマテイス』2.9.44.1)。というのも思うに、この世ばかりでなくあの世にあって、弟子たちのうち最良の者たちは、師に倣う者たちとならねばならない。それは、ある者はユダヤ人たちを、またある者は異邦の人々を回心に導くためである。すなわち、片や律法と哲学を通じて義のうちに生きてきた人々に対し、片や完全な形でなく罪のうちに人生をさまよってきた人々に対し、回心を呼びかけねばならないのである。6) というのもこのことは神の経綸に適うことなのである。このこととは、品位をもって義のうちに、先んじて生活

していた人々も、犯した罪に関連して回心した人々も、たとえ互いに異なった場所で信の告白をしようとも、全能の神の民のうちにあつて、個々に固有の覚知にしたがつて救われる、というあり方である。

46.1) しかるにわたくしが思うに、救い主もまた、働いておられる。それは彼の業が救うことだからである。したがつて彼が為したことは、彼に信を置くことを望んでいた人々を、為しえた限りにおいて、宣教によつて救いへと引き寄せることであつた。2) 実にもし主が、受肉の際と同じように、他ならず福音を告げるために冥府へ下つたとするならば、その福音の告知は、単にユダヤ人たちだけのためだったのであろうか、それともすべての人々のためだったのであろうか。3) そしてもしすべての人々のためだとするならば、信じる者はすべて、たとえ異邦人出身の者であっても、その場で信を告白するならば、救われるであろう。なぜなら神の懲らしめは悔い改めへと導く、救済的で教育的なものであり、罪人の死よりもむしろその回心を選び取るものだからである。そしてこのことは、肉体から解放された靈魂のほうがより浄らかに見抜くことができるであろう。なぜなら、たとえ諸々の情動のために翳りを帯びていようとも、もはや肉体的なものに執着していないためである。4) だがもし主の宣教がユダヤ人だけのためのものであつたとすれば、彼らには救い主を通しての認識 (epignōsis) と信仰が欠けていたのであるが、神は人を重んじることのない方であるということになる。使徒たちもまた、地上におけると同様にかの冥府にあつても、異邦人出身の相應しい人々に対し、悔い改めに向けて福音を告げ知らせたのである。このことは『ヘルマスの牧者』によつても的確に言い表されている。5) 「彼らは人々とともに水のうちに下つた。だが彼らは生きてままた下り、生きてままた上つた。それに対して人々は予め埋葬され死者として下り、生ける者となつて上つた」(『ヘルマスの牧者』9,16,6)。

47.1) 実に福音は、眠っていた者たちの多くの身体が蘇つたと述べている(マタイ27,52)。これはすなわち、より優れた状態に移し変えられたとの意味である。つまり、救い主の経緯に従つて、いわば普遍的な運動と変化が生じたということである。2) つまり、正しき人は正しき人と、正しき人であるという点に関して何ら異なるところはない。たとえ律法の下にある人であれ、ギリシア人であれ、それは変わらない。なぜならユダヤ人にとってのみならず、すべての人間にとって神は主であり、事情を知悉している人々よりもっと親密な仕方、父親なのである。3) というのももし、美しく生きることが律法に則つて生きることであり、ロゴスに適つた生き方をすることが律法に従つて生きる



ということであるならば、律法以前の人々で正しく生き抜いた人々は、信仰のうちで数え上げられ、義人であると判断されたのである。よって律法の外にあった人々も、靈魂の特性に従って正しく生きたのであれば、たとえ冥府で見張りに遭ってしようとも、主本人からであれ使徒たちの働きを通じてであれ、主の声を聞き届け、速やかに回心し信じたことであろう。われわれは、主が神の力だということを記憶しているからである。そしてこの力は弱まることを知らないからである。4) かくしてわたくしとしては、神が善き方であり、主が正義をもって、またこの世であれ他処であれ回心する人々に対しては公正さをもって、救う力を有しているということが示されたと思う。というのもこの働きの力は、この世に及ぶのみならず、あらゆる場所において常に働いているからである。

48.1) まさしく『ペトロの宣教』の中で、主は復活の後、弟子たちに向かってこう述べている。2) 「わたしはあなた方12人を選んだ。わたしに適う弟子と判断したからである。つまりあなた方は主が望んだ人々である。そして信に値する使徒たちと判断されたのである。わたしはあなた方を、世界中に広がる人々に対して福音を告げるよう、世界に向けて遣わす。そのとき人々は、神が唯一であることを知るであろう。あなた方は、キリストに対するわが信仰を通じて将来起こる事柄を明らかにするであろう。それは、これを聞いて信じる人々が救われるためである。一方聞いていたのに信じなかった人々が、〈われわれは聞いていない〉と弁明し証言することができないようにするためである」(『ペトロの宣教』断片7)。3) これはどういう意味だろうか。冥府にも同じ経綸が到達しているということではないだろうか。それは冥府においても、すべての靈魂が福音を耳にして、あるいは回心を示し、あるいは彼らが信じることのなかった裁きが正当なものであるということを告白するためである。4) だが、少なからざる優劣の差があり得るかも知れない。それは主の来臨に先立ってこの世を去った人々が、信じるないし信じないという事柄に関して、福音を告げられもしなかったのに、その責を彼ら自身に求められるというような場合である。5) というのも彼らが不当に断罪されるということはまっとうなことではないからであり、主の来臨の後の人々だけが、神的な正義を享受することができたからである。6) 天上界における理性ある靈魂にはすべて、次のように語りかけられている。「あなた方の中で誰か、神を明らかに知らずに、無知ゆえに行った事柄があるなら、認識を改めて回心するならば、すべての過ちは彼らの許から赦されるであろう」(『ペトロの宣教』断片8)。7) 「というのも」、彼

は言う。「見よ、わたしはあなた方の眼前に死と生とを置いた。生を選べるように」。ここで神が言っているのは、選択の規準として据えたのであって、両方を実行するようにとの意味ではない、ということなのである。49.1) 彼はまた、別の書ではこう述べている。〈お前たちがわたしの言葉を聞き、望むならば、大地の実りを食することができる。だがお前たちがわたしの言葉を聞かず、また望まないならば、剣がお前たちを滅ぼす。主の口がこれらのことを語った〉（イザヤ1,19以下）。2) あるいはダビデも、というよりもむしろ主が敬虔なるものの顔から（その一人は天地創造以来、異なった時代に信仰によって救われ、また救われるであろう人である）、こう述べる。〈わたしの心は喜び、わたしの舌は踊る。さらにはわたしの肉は希望のうちに幕屋を張る。なぜならあなたはわたしの靈魂を黄泉のうちに捨て置かず、あなたの敬虔なる者が破滅を見ることを許さない。あなたはわたしに生命の道を知らしめる。あなたはわたしを、御顔とともに喜びで満たす〉（詩篇15,9－11）。

50.1) したがって、民が主にとって貴重なものであるのと同様に、ユダヤ人とあわせ異邦人の中で回心した者も含めて、「改宗者」と名づけられ、すべて聖なる民なのである。2) したがって聖書が同じ箇所、彼らが「牛」また「熊」となるであろう、と言っているのも相応しい（イザヤ11,7）。まず「牛」と呼ばれているのはユダヤ人であり、律法のもと、くびきの下にあって、清らかな動物と判断されたものを指す。なぜなら牛は、ひづめが割れ、反芻するからである（レビ11,3）。3) それに対して異邦人は「熊」という表現で表されている。これは清められていない野獣だからである。この動物は肉においてかたちを成さない子を産むが、その肉は、言葉の上だけで獣に似たものに形作られるためである。というのも異邦人から回心する者は、獣的な生活から馴らされるために御言葉によって形作られるからである。そうなることとすでに馴らされていて、牛と同じように清らかなものとなっているのである。4) まさしく預言者が次のように言うとおりでである。〈ダチョウや、スズメの娘たち、そして野の獣すべてがわたしのことを誉め讃える〉（イザヤ43,20）。5) 不浄なる動物のうち、獣は野において、すなわち世において知られる。それは、信に関して野卑で汚い者たちは、生活をいまだに律法の下なる正義によって浄めておらず、獣と呼ばれる。6) ところが獣であることから主に対する信仰によって、彼らは神に属す人となる。それは根源を改めたいと望むことからそうなることへと進歩を遂げるからである。7) というのも主はある人々に対して勧告を行うが、すでに手ほどきを授けた人々に対しては、その手を伸ばし、引き寄せるからである。

<万物の主は誰の顔色もうかがわず、強大な者をも恐れぬ、なぜなら大いなる者をも小さな者をも、主が自らつくり、万物に先慮を及ぼしているからである> (知恵 6,7). 51.1) またダビデはこう言っている、たとえく異邦の民が自ら掘った穴に落ち、隠して張った網に足を取られる> (詩篇 9,16) としても、<主は貧しき者にとって逃れの場となり、良き時機にも艱難の時にも助け手となる> (詩篇 9,10). つまり艱難のうちにある人々は、時を得て福音を告げられたのである。2) それゆえに彼は言う、<異邦の民にあって主の業を誉め歌え> (詩篇 9,12). それは彼らが不当に裁かれないためである。3) したがってもし、肉のうちにある者たちが、不当に裁かれないようにということのために福音を告げられたのであれば、どうして主の来臨に先立って生きた人々に対して、同じ理由から福音が告げられなかったことがあるのか。4) なぜなら<主は正しき方、正義を愛される。その御顔は直しさを見る> (詩篇 10,7) からであり、<不正を愛する者は自らの靈魂を憎む> (詩篇 10,5) からである。

52.1) だが実に、洪水の際にすべての罪ある肉が滅んでしまったのだとすれば、彼らにとってこの懲罰は教育のためにあったと言えよう。ゆえにまず、神の意向が教育的であり内にエネルギーを秘めたものであって、立ち返る人々を救うものであるということに信ずるべきである。つぎに、微細なものから成立している靈魂が、より厚いものからできている水から何か恐るべき事柄を被るということはまずないであろう。なぜならその微細さ・単純さの故に、打ち負かされることはないであろうから。そこから、靈魂は非物体的であるとも呼ばれるのである。2) しかるに、より厚みのあるものが罪によってさらに厚ぼったいものとなるや、靈魂に反して欲情を抱く肉的靈とともに、これは打ち棄てられるのである。3) すでに、共通性を重んずる者たちの首長であるウァレンティノスが、『友人たちについて』という説教の中で、およそ次のように記している。「記された事柄の多くが、民衆の書物のなかに見出される。それは、神の教会のうちに記されているのである。というのもこれら共通の事柄は、心から発する言葉であり、心のうちに記された法だからである。これこそ、愛された者に属する民であり、愛される者は、彼を愛する人々のものなのである」。53.1) というのも彼は、ユダヤ人たちの書物であれ哲学者たちの書物であれ、それらを「民衆的な書」と呼び、真理を一般的なものにしようとするためからである。

2) さて、バシレイデスの息子にして弟子でもあったイシドロスは、『預言者パルコルの釈義の書』の第一巻において、自らおよそ次のような措辞で述べて

いる。「アテナイの人々は、ソクラテスには霊の声が付き従って何事かが開示されたと言う。またアリストテレスは、すべての人間は肉体を撰ったとき以来その人に憑いている霊の声を耳にしている（アリストテレス、断片 193 ローズ）と言う。彼は、この予言的な教えを受容し、自らの書物のうちに取り込んでいる。ただその際にこの論をどこから借用したのかを告白していない」。4) 続けて同じ書籍の第2巻では次のように記している。「われわれが、選ばれた人々に固有の事柄だと言っていることが、先んじてある哲学者たちによって述べられているとは誰も考えないでいただきたい。というのもこれは彼らの発見なのではなく、預言者たちから借用して己が物であるかの如く、彼ら自身の許にいる知者の説に帰しているのだから」。5) さらに同じ巻でこう述べている。「というのも彼らは、わたしに思われるに、哲学しているかのようなふりをしているのだ。それは、翼の生えた樾の木とは何か、その上に艶やかに刺繍された鋤とは何かに関して、フェレキュデスが比喩的に神学として、ハム族の預言から仮説として取り込みつつ、語り挙げたすべての事柄を学ぶためである」。

## VII. 真の哲学

54.1) さて、以前に注記しておいたように（『ストロマテイス』 1.24 以下）、われわれは生き方を語る際、それを個々の宗派に即してではなく、真なる哲学であるところのもの、真なる智慧に向けた技術的な専心に照らして語るのである。これは、人生に関わる事どもに関する経験知を提供し、神的ならびに人間的な諸問題をめぐる、確実な覚知としての智慧であり、いわば確固たる躡くことのない把握であり、現在のこと・過ぎ去ったこと・将来のことをあわせ理解するものであって、主はこの智慧をわれわれに対し、来臨と預言者たちを通じて教えたのである。2) この智慧は言葉を通じても変わることがなく、覚知へと伝えられ、すべてにおいて真実であるように、子によって知られたとおりに神の意向に叶うものである。3) ある面では永遠であり、またある面では時と共に有用となり、一にして同じであり、他方多にして多様であり、情動による運動を伴わないものの、情動による衝動とともにあり、完全でありかつ常に追究を忘れぬものなのである。

55.1) 哲学とは、このような知恵を希求するものである。それは靈魂、言葉が真直ぐであること・生の廉直さであり、知恵に対して愛と友情をもって接し、この知恵を獲得するためにすべてのことを為す。2) われわれの許では、

愛智者とは万物の創造者であり教師である方の知恵、すなわち神の子に関する知識を愛する人々だと言われている。それに対して、ギリシア人の間では徳に関する理論に専心する人々のことを言う。3)しかるに哲学とは、諸派の各々(哲学各派を言う)にあって、同意された生をもって、一なる選択に向けて打ち立てられた論駁されざる教説のことであろう。4)これはそういった形で、異邦人における神由来の恩寵から盗み取られ、ギリシア的な弁辞でもって飾られている。彼らは窃盗者であるが、同時に聞き取り違えてもいる。とりわけ目につくのは、感動のあまり語ったこと・十分完全に咀嚼していない事柄があり、またある事柄については、人間的な推測と推論に基づくものもあるからである。それらに関して彼らは誤謬に陥っている。彼らは、真理に完全に到達したと考えているのであるが、それはわれわれがそう思っている物が正しいのであって、彼らのほうが部分的なのである。56.1) 実に、彼らはこの世に関わること以上の事柄については何も知らない。そしてちょうど、幾何学が長さ・大きさ・形状を扱い、その際に平面の記述をもってするのに対し、絵画術は目に入るすべての場所に関し、舞台演出の要領で取り扱うように思われるが、その際に視覚を欺き、視覚上の輪郭の印象による徴を技術的に用いる(その際に外見・幻影・跡線を遺し、あるものは浮き出るように、あるものは引っ込むように、そして他のものは単に思い描けるように、影やタッチで表す)。ちょうどそれと同じように、哲学者たちもまた、絵画術と同じように、真理を模倣するのである。2)しかるに自己愛は、個々の場合にしたがって、すべての過ちの原因となる。したがって人間界への誉れを選び取って自己愛におぼれるようなことがあってはならず、むしろ神を愛する者は、真に「賢慮を伴った敬虔な者」(プラトン『テイテス』176B)でなければならないのである。57.1)かくして、もし誰か、部分的なものを普遍的なものと同様に誤解して用い、奴隷を「主」また導き手として敬慕することになれば、彼は真理から逸れ、ダビデによって告白の中で語られた事柄を理解しないことになるだろう。〈わたしは土と灰とをパンのように食した〉(詩篇101,10)。ここでは、自己愛と虚栄心こそ彼における「土」そして迷妄である。2)だがこれに関しては、学びによって覚知また知識が醸成される。学びが伴えば、師を探することは必然である。3)というのもクレアンテスはゼノンを、テオフラストスはアリストテレスを、またメトロドロスはエピクロスを、そしてプラトンはソクラテスを奉じた。だがもしピユタゴラス、フェレキュデス、タレス、そして初期の知者たちに赴くとすれば、わたくしは彼らの師を探し続けなければならぬまい。またエジプト人、インド人、バ

ビュロニア人、あるいはマゴイたちに関しても、わたくしが彼らの師を捜し求めるならば、終わることはないであろう。その結果、わたくしはあなたを人類の最初の誕生の時点にまで遡及させることになるだろう。そこでわたくしはこう尋ねることになる。「師とは誰か？」と。4) 人間のうちには一人としていない。なぜならまだ学びを終えていないからだ。だがそれは天使の誰かでもない。なぜなら、天使たちが天使として告げたようには、人間たちは聞かなかつたのであり、またわれわれに耳があるにしても、彼ら天使たちには舌はないのだから。また天使たちには、声を発することのできる器官は与えられていない。それは唇とかそれに付随するもの、すなわち喉とか気管とか、はらわたとか息吹とか、呼吸される大気とかの意味である。5) 神が叫びを挙げるとするのは、これとはまったく異なる。それは近づきたい聖性の許に行われるのであり、大天使たち自身ですら神とは離れて立つのである。すでにわれわれは、天使たちやその上に立つ指導者たちも学んだということを知っている。なぜなら彼らは生まれたものだからである。58.1) かくしてわれわれに行うべきこととして残されているのは、彼らの師を求めることをもなげうって歩むことである。唯一生まれざる存在とは、全能の神のみであり、唯一、他に先立って生まれた存在とは、その方を通じて万物が成り、その方なくして成ったものは何一つなかった（ヨハネ1,3）方である（＜なぜなら神は真に唯一であり、彼こそ万物の始原を創造した方である＞【『パトロの宣教』断片2】と、万物に先立って生まれた子のことを告げてペトロが記しているが、＜初めに神は天と地を創造した＞（創世1,1）という句を正確に理解している）。この方はすべての預言者たちによって「知恵」と呼ばれており、この方が成ったものすべての師であり、万物を予め知っている神の助言者である。2) この方が万物の第一の創造の時点で天上よりくさまざまな仕方で、多岐にわたって（ヘブライ1,1）教育を施し、完成させてきた。そこから次のように語られるのも相応しい。＜あなた方は、自分たちの許には地上の師がいると言ってはならない＞（マタイ23,8以下）。あなた方は真の哲学が、どこに端緒を有しているかがお分かりであろう。もし法が真理の似像であり影であるのなら、真理の法は少なくとも影である。だがギリシア人たちの自己愛は、ある人々を「師」として喧伝しているのである。

59.1) さて、あらゆる血統が創造者なる神に向かって立ち戻るのと同様に、正しきものとする美の教えも主に向かい、主に導き主を捉えるものである。2) だがある教え（*paideusis* と読む）に従い、真理の種子を何がしかの方法で捉えておきながら、その人々がそれらを育み得なかつた場合、不毛で雨の降

らない土地に託されてしまい、野生の植物に窒息させられてしまったとしよう。ちょうどファリサイ派の人々が世俗の教えを織り交ぜて律法から逸れてしまったようにである。すると彼らに関する責任は師にあるのではなく、不従順であることを選び取った人々にあるのである。3) しかるに彼らのうち、主の来臨と、諸書の明晰な解釈の可能性を信じていた人々は、律法に関する認識 (epignōsis) へと至った。これはちょうど、哲学に身を捧げた人々が、主の教えを通して真の愛智の認識へと至ったのと同様である。4) <主の教えは清い教え。土の炉で七度浄められ、火で試された真正正銘の銀> (詩篇 11,7). 60.1) また、義人はまるで銀であるかの如くに、しばしば浄められ、裁きの場にさらされて主の通貨となり、王的な刻印を受け取る。あるいはソロモンも<義人の舌は火にくべられた銀> (箴言 10,20) と述べ、吟味された知的な教えであれば、それは賞賛に値し受け入れられるものであることを告げている。これは、その教えがこの地にあって豊かに浄められていることを、すなわち覚知に満ちた靈魂が、土質的な火の排除によって、様々な方法で聖化されていることを示すものである。2) しかるに、靈魂がそのうちに住まっている身体もまた、純化されるとき、聖なる神殿の浄らかさに照らして適わしきものとなる。身体における靈魂の浄めとは、第一に諸悪の根絶なのであり、これのある人々は完徳と考えている。そしてユダヤ人とギリシア人に共通の信仰としては、端的に、これこそ完徳であるということになる。3) しかるに覚知者の正義は、善行を実行する上で、他の人々によって考えられている完徳に先立つ。そして正義の強調が善行へと移るとき、そのときには完徳が善行の変わることなき習慣となって神の似像のうちに留まる。なぜならアブラハムの後裔は、なお神の僕であるが、彼らもまた招かれた人々だからである。ヤコブの子らも、神に選ばれた人々であり、悪のエネルギーを転換させた人々なのである。

61.1) したがってもしわれわれが、キリストその人、および預言者たちを通じて働いた彼のエネルギーを「智慧」と呼ぶのであれば、そのエネルギーによって、覚知の伝承を学び取ることができるのであり、それはキリスト自身が来臨によって聖なる使徒たちを教えたとおりであるが、覚知とは智慧であるということになるであろう。それは現在あること、将来起こるであろうこと、そして過去に起こったことに関する確固とした躰きのない知識また把握であり、神の子から伝えられ啓示されたものなのである。2) そして実に、智者の目標が観想であるとすれば、哲学する者は神的な知識を捉えようと努めるものの、学びによって彼に明らかにされた預言者の声を捉えない限り、それを果た

すことはない。というのもその声を通じて、今あること将来起こるであろうこととして過去にあったことが、どのようであるか、どのようであったか、そしてどのようになるのかを把握するのであるから。3) かくして覚知とは、使徒たちからの継承により、少数の者たちだけに、文字に表されぬかたちで伝承され届けられたものなのである。

さて、実に覚知であれ智慧であれ、それは観想の永遠にして変わることはない習性へと鍛錬されることが不可欠である。

### VIII. 覚智者：浄められた義なる人

62.1) パウロもまた書簡の中で、哲学を批判しているとは思えないものの、高みに与かった覚知者は、もうギリシア哲学に再度赴くには当たらないと考えている（コロサイ2,8）。すなわち、ギリシア哲学を比喩的に「この世の構成要素」と呼びながら、基礎的であって真理の前教養に当たると解しているのである。2) それゆえ彼は、信仰から律法へと戻ろうとするユダヤ人々に向けてこう述べている。〈あなた方は再び、神の言葉の初歩的な事柄が何であるのかを教わる必要を持ち、固い食物の代わりに乳を必要としている〉（ヘブライ5,12）。まったく同じように、ギリシア人から回心したコロサイの人々に対してもこう述べている。〈誰かがあなた方のことを、人間の伝承に従う哲学や虚しい欺きによって虜にすることのないように警戒せよ。それらは世を支配する霊によっており、キリストに従うものではないからだ〉（コロサイ2,8）。すなわちそのような者は、哲学すなわち初歩的な教えに赴くように罫を仕掛けるのである。4) たとえ誰かが、人間の理解に基づいて、哲学はギリシア人たちによって見出されたと言うとしても、聖書には、この理解が神からの賜物であると述べているのが見出される。63.1) 例えば詩篇作者は知解を最大の賜物と考え、それを求めて次のように述べている。〈わたしはあなたのしもべです。わたしに理解させてください〉（詩篇118,125）。2) だがダビデは覚知の多様性を求めるわけではないことを次のように述べている。〈わたしに、善き心と教養と覚知を教えてください。わたしはあなたの掟を信じてきました〉（詩篇118,66）。3) 彼は律法こそ主要であることを告白し、それが品性の貴い人々に与えられるものであることを証している。4) かくして詩篇は再び神について述べる。〈いかなる民にも神はこのようになさることはなかった。彼が自らの判断を彼らに明かすこともなかった〉（詩篇147,9）。ここで「このようになさることはな



かった」と言っているのは、神がなされたとはいうものの、このようにではなかった、ということをはっきりと示しているのである。すなわち筆者は「このように」という表現を、われわれに対して行われた卓越性との比較において用いている。つまり預言者は「このように」という付加句なしに「行われることはなかった」と単に述べることもできたのである。5) 実際ペトロも『使徒行録』の中で、こう述べている。〈わたしは真に理解した。神が人をより好みする方ではなく、すべての民において、神を恐れ義を行う人は神に受け入れられるのだということ〉(使徒行録 10,34 以下)。64.1) したがって、神のより好みのなさというものは、時間に制約されたものではなく永遠なるものである。また神の善行性もあるときに始まったというのではなく、ある場所・ある人に限られたものでもなく、その善行性も部分的なものではないのである。2) 詩篇作者はこう述べている。〈わたくしに正義の門を開きたまえ。わたしはその門を通して主に告白に赴こう。この門は主のもの、義人たちがこの門を通して中に入る〉(詩篇 117,19 以下)。3) 預言者の言葉を解釈してバルナバはこう付言している。〈多くの門が開かれているものの、正義のうちなる門はキリストにおける門であり、この門を通して中に入る人はすべて幸いである〉。4) 次のような預言者の言葉も同じ考えを伝えるものである。〈主は多くの水の上を覆う〉(詩篇 28,3)。これは主が、さまざまな律法に関してのみその主であるというのではなく、ギリシア人であって正義に導く教えのあり方も、異邦人におけるそれも、主がその主であるという意味である。5) ダビデもすでに、真理に即して明瞭に証してこう歌っている。〈罪びとらは黄泉に向かうがよい。すべて神を忘却した民は〉(詩篇 9,18)。6) ここでは明らかに、彼らが以前は心に留めていた方を忘却し、忘却する以前は覚知していた方をなおざりにしているということである。かくして諸国の民の間にも、神に関する明瞭でない知識があったということになる。

65.1) だが、以上の事柄に関してはここまでとしよう。覚知者は博学でなければならない。そしてギリシア人たちが、プロタゴラスはどのような弁論に対しても弁を返すことができると標榜したと言っているように、どのような弁論に対しても備えができていたことが相応しい。というのも聖書には次のように記されているからである。〈多くの事柄を語る者は、逆のあり方にも聞かれうる〉(ヨブ 11,2)。〈主の比喻について、知者・知識人・そして自らの主を愛する者以外に誰が考えうるだろうか〉(バルナの書簡 6,10)。3) そこで、そのような人は〈信篤き人〉たるべきである。〈その人は、覚知を語り明かすことが

でき、言葉の判別にあたって知恵があり、業において秀でており、明らかでなければならぬ。というのも人は、偉大だと思われれば思われるだけ、それだけいっそう謙遜でなければならぬからである>と（ローマの）クレメンスが『コリント人たちに宛てた書簡』の中で述べている通りである。4) そのような人物は、次のような教訓に従うことのできる人である。<火の中から救い出した人々を、良く吟味して憐れむべきである>（1<sup>st</sup> 22 以下）。5) 言うまでもなく、斧は枝落としをすることを念頭に作られている。だがそればかりでなく、そこに混じり込んでいる棕櫚をもわれわれは斧によって分別し、ブドウの木に生えこんでいるものの刺、それがあると近づくのが困難な刺を打ち落とすためにも用いる。これらの事どもはすべて、枝打ちすることのうちに端緒を有している。6) 翻って人間は、予め神を認識するためにつくられているが、そればかりでなく農耕や測量や哲学にも従事する。それらのあるものは生きるため、あるものは良く生きるため、そしてあるものは示された事柄をよく考慮するためのことなのである。

66.1) だが実に、哲学が悪魔によってけしかけられたものだと主張する者たちは、次のことをも知るがよい。すなわち聖書は<悪魔は光の天使に姿を変える>（2<sup>nd</sup> コリント 11,14）と述べているということである。何をするためであろうか。明らかなことであるが、預言をするためである。2) だがもし、悪魔が光の天使として預言するとすれば、真理を語るということは明らかである。2) もし天使的であり光に満ちたものであれば、たとえ信仰離反というその基体に関して神と異質なものであるにしても、神の働きにも似たかたちで姿を変える際には、有益な事柄をも語るであろう。3) であるから、真理を通じて好学の士をその本来性に向けて導き、その後偽りに向けて誘惑するというのでない限り、どうして人を欺くことがありえようか。4) とりわけ、たとえ把捉的でないにしても、真理の経験がないわけではなく、真理を知悉しているという人は見出されるであろう。5) したがって哲学は偽りではない。たとえ盗人にして嘘つきが、エネルギーの変改によって真理を語ったとしても、その語り手を通じて無学にも語られた事どもを前もって知りぬくべきなのである。それは今預言をするために語られたことに関して守られるべきであり、もし真理に属しているのであれば、語られた事柄についても吟味すべきであろう。

67.1) さて、普遍的な論理（katholikos logos）に基づき、生にとって不可欠で有益な事柄は、すべて神からわれわれの許に来たると言ってもわれわれは誤っていないであろう。しかるに哲学が、とりわけギリシア人たちに、言わば

彼らにとって固有の律法として与えられ、それがキリストをめぐる哲学の礎石となっているということについても同様である。それは、たとえギリシアの事どもを哲学している者たちが、真理に対して聞こえぬふりをして、異邦人たちの声を軽んじ、また公共の法によって信徒たちに差し掛かる死の危険性を見過ごすにしても、変わることはない。2) 一方異邦の哲学におけると同様、ギリシアの哲学においても、ドクムギが蒔かれている (cf. マタイ 13,25 以下)。それはドクムギ固有の農夫によって行われたものである。それゆえ、われわれの許には実りをなすオオムギと併せて幾多の異端が生え育ったし、エピクロス派の徒らは、無神論や快樂主義、あるいはそれ以外の、正統の教義から逸れてギリシア哲学に蒔かれている事柄を述べ伝え、神から賜物として与えられている農事にとって、嫡出でない実りとしてギリシア人たちに現存しているのである。68.1) このような快樂を好み自己愛的な哲学を、使徒は<この世の知恵> (1 コリント 2,6) と呼んでいる。それはあたかも、この世の事柄、および自分ひとりだけの事柄を教え、したがってこの世で権力を持つ者たちの権威の下にあるものである。それゆえこれは、何か部分的な哲学であって、こま切れである。これに対して真に完全なる知識は、この世を越えた思惟界に関わり、さらに思惟界よりも靈的なものへと向かうものである。その対象とは、師がわれわれに、それらに関する理を教えるまでは、<目が見たことも耳が聞いたこともなく、人間の心に浮かぶこともなかったような事柄> (1 コリント 2,9) である。つまり師は、いとも聖なる事柄、さらにはそこから登攀してさらに聖なる事柄を、真正にかつ偽りなく主の「子性」を継承する人々に啓示したのである。2) というのもわれわれは敢えて、すべての事柄に関して知悉し、すべてを把握し、われわれには解決策のなかった事柄に関しても確固たる把捉に基づく人のことを「真なる覚知者」と呼ぶからである。それはたとえば、ヤコブ、ペトロ、ヨハネ、パウロおよびその他の使徒たちのような人である。3) なぜなら預言の術は、覚知に満ちており、いわば主から与えられ主を通してさらに使徒たちに明らかにされたものだからである。いったい覚知とは、覚知を通じて不死性へとおのが名が書き留められるために鍛錬する、理性的靈魂の一つの特質ではなからうか。というのも覚知と衝動、それらはいずれも、靈魂の力なのであるから。69.1) さて衝動 (hormē) とは、何らか同意の後での運動として見出される。というのも何かの行動へと衝き動かされる者は、まず行動に関する覚知を得て、次に衝動を得るからである。2) さらにこの事柄に関して考察を深めてみよう。学ぶことは、行為することに先立つ (というのも実行したいと欲して

いる事柄を行う者は、本性的にそれをまず学ぶものであるから）。そして覚知は学ぶことから生起し、行為は衝き動かされることから生じる。しかるに衝動は知識の後に続き、衝動の後に行為が伴う。覚知は、あらゆる理性的行為の発端であり創造者であろう。したがって、理性的靈魂の特性は、おそらくはこの覚知のみをもって特徴づけられることであろう。3) というのもまさしく、衝動とはいわば諸存在物をめぐって運動する覚知であり、覚知とはまさにこのもの、いわばこの、またこれらの諸存在物をめぐり、靈魂の觀照であり、それらの全体像を捉えることで完遂されるものである。70.1) 実際、ある人々は「知恵ある人間は、ある把握不可能な事柄が存在するというに納得している」と言う。だがこれらの事柄に関しても、何らかの把捉を有しているのであり、把握不可能なものが把握不可能であるということ把握しているのである。2) このことは、少しでも物を先見することのできる人々には共通することである。なぜならそのような人は、何か把握不可能な事柄が存在するということを確言するからである。しかるにわたくしの述べる「覚知者」とは、彼以外の人々には把握不可能だと思われる事柄を、彼自ら把握する人物である。その際、神の子には何事も把握不可能ではないと信じている。それゆえ彼にとっては、何事であれ、教わり得ないことは存在しないのである。というのもわれわれに対する愛ゆえに苦しみを受けた方は、覚知による教えのためであれば、何事も惜しむことがなかったからである。3) かくして信仰が確固たる立証となる。なぜなら神によって伝えられた事どもに、真理が相伴うからである。4) くもし誰か、博い敬虔を望む者があれば、彼はいにしえの事柄を知り、将来の事柄を予見し、言葉の言い回しや謎の解き方を知悉しており、しるしや予兆、季節や時の移り変わりを前もって覚知する> (知恵8,8)。この「彼」とは知恵の学び手のことである。

## IX. 覚智者：情動から解放された人

71.1) かくして覚知者とは、身体の滞留のために生ずる諸々の情動にのみさいなまれるような人である。その情動とは、空腹、渇き、その他その類のものである。しかし救い主に関して、その身体が身体として、この世での滞留のための不可欠な奉仕を要求したとすれば、それは笑止千萬なことであろう。彼は身体のために食事をしたのではない。その身体は聖なる力でもって維持されていた。ただ彼とともにいる人々が彼に関して誤解しないようにする必要があっ

た。ちょうど後世、ある人々が仮現論を主張し、救い主に関して単にその姿を現しただけだと仮定したのがそうである。だが救い主自身、まったくもって情動に動かされることはなく、彼の許には情動の動きや快楽、苦痛などはまったくもって忍び込む余地がなかったのである。2) しかるに使徒たちは、怒り・恐怖・欲情といったものを、主の教えを通してより覚知的な仕方でも克服し、情動による動きの見せかけの善、すなわちたとえば勇気・競争心・喜び・安心といったものを、それ自体としては受け入れることがなかった。それらは思惟にとって何らかの固定的な状態であるとしたのであり、またそれらによって変容を被ることもなかった。むしろ、実に主の復活の後には、修道の状態に変わることなく常に留まった。たとえ人が上述のような諸々の善を、御言葉によって生じたものであるとして受け入れるにしても、実に、まったくき者にあっては受け入れるべきでないものだからである。この「まったくき者」は、勇気を奮う必要もなく（彼は何か恐怖に陥ることがなく、人生における事柄で何か恐ろしいと思うこともなく、勇気なくしても、神に対する愛から離れることはありえないから）、安心を得る必要もなく（彼は何らかの苦悩に陥ることがないが、それはすべてが美しく生起すると彼が信じているためである）、気概を振るうこともないからである（彼を気概に向けて駆り立てることなど何一つなく、常に神を愛し、ただ神のみに全身全霊を献げ、それゆえに神による被造物を何一つ憎むことはないのだから）。5) さらに彼は何にも嫉妬することがなく（美にして善である方の似像となる上で、彼にはまったく欠けたるものは何一つないのだから。また彼は、この一般的な友愛の許に誰かを愛することもなく、ただ被造物を通じて創造者を愛するのみである）。72.1) したがって彼は、欲情にも憤りにも陥ることがなく、霊魂において何らかの他者の持ち物に欠けることもなく、常に愛をもって愛する人とともにいる。この方と、彼は選択意志によって親しみを得たのである。そして修道を通じての習慣化により、彼はこの方により一層専念して近づき、諸々の善の余剰を通じて幸いである。かくしてこれらの事どもの故に、師に対し無情動へと似せられることを余儀なくされる。2) というのも神の御言葉は知的であり、そのために、理性の似像はただ人間のみのうちに看取される。かくして善き人は霊魂において神に似て、神のごとき存在である。また神は人のごとき姿をしているのである。というのも理性とは、各々の人間にあって、われわれが特徴づけられている形相なのであるから。この点でも、人間に対して罪を犯す者どもは敬虔さを忘れた不敬な存在である。3) なぜなら覚知者にしてまったくき者は、気概と勇気を失ってはならない、つまり、

それらなくしては状況に対処・抵抗することもできないし、恐怖に耐え抜くこともできないのだから、と表明することは愚の骨頂なのであるから。73.1) むしろ、われわれが彼から平安さを奪い去ることはできないのではないだろうか。彼に対し、彼が悲しみゆえに狼狽し、それゆえに生きることからまったく絶望してしまうようなことはありえないのだ。さらに、欲情を彼がまったく持ち合わせていないとすれば、これもある人の考えであるが—その人の言い分によれば—、彼は美しくかつ善き人々と同様の欲求を持つことはできないだろう、というのである。2) 実に、美しき事物に対する親近性が、すべて衝動を伴って生じるのだとすれば、美しきものを希求する人が、どうして無情動でいつづけることができようか、と彼らは言う。3) だが思うに、この人々は、愛の神的性格を知らないのである。というのも、愛する人にとって愛とは、すでに衝動ではない。それは愛情を伴った親近性なのであり、覚知者を信の一性に向けて統合し、彼には時間も場所ももう必要なくなるのである。4) 彼は、いかなる状態に置かれることになるのか、愛を通じ、すでにその状態に成っている。彼は覚知を通じて予め希望を先取しており、何も欲求することがない。それは彼が、欲求するものを有することができるからである。5) かくして相応しくも彼は、変わることもない—なる習慣性のうちに覚知をもって愛し、美しきものどもに似たいという嫉妬心のうちにもいない。愛によって美を分かち持っているからである。6) このような彼にとって、勇気や欲情といったものが、さらにどうして必要なことがあるか。彼はすでに、無情動なる神への愛に発する親近性を獲得し、愛を通じて自らを親しき者どものうちに書き記しているのであるから。74.1) そこで、われわれに選び取られるべきは、覚知者のあり方であり、あらゆる靈魂の情動から完全に離脱することである。というのも覚知は鍛錬を、鍛錬は習性ないし状態を、状況ないしその類は、中庸の情動をではなく、無情動をつくりなす。というのも無情動を实らせるのは、欲情のまったき打ち砕きだからである。2) というのも覚知者が与かるのは、それら騒々しい善、すなわち情動に相伴う情動的な善ではないからである。たとえば、それは歓呼ではない（これは快樂に伴う）。また落胆でもない（それは苦悩と結びついている）。また警戒でもない（これは恐怖の下にある）。もちろん怒りでもない（これは激怒の隣に配される）。75.1) たとえある人々が、これらはもはや悪ではなく善だ、と言うとしてもそれは変わらない。というのも一旦愛によって完成を見た人が、観想の尽きせぬ悦びを永遠に止むことなく享受しながら、なお些細で低次元の事どもに喜びを見出すということはいえぬから

である。2)「到達されえない光」を受け取った人が、再び世俗の財へと向かうことに、一体いかなる理に適った理由が遺されているというのだろうか。たとえまだ時間と空間によるものではなく、むしろかの覚知による愛によるものであって、その愛を通じて嗣業とまったき万物変容が伴うものの内に、その光が到来するにしても、またその際、愛を通じて覚知的に選択することにより、覚知者が先んじて選び取ったものを、褒美を与える人がその業を通して確証するにしてもである。3) というのも主に向かう愛によって主に留まるなら、たとえその人の幕屋が地上に見られ、その人が自身を生命から切り離さないにしても（というのも彼にはそれが許されていないから）、靈魂を諸情動から解放し（これは彼に許されている）、情動を死したものとなした状態で生き、もはや肉体に妥協することなく、ただ不可欠なことにのみ肉体を用いることを自己に課し、もう自己崩壊の原因を提供しない、という生き方にならないであろうか？

76.1) かくして、どうしてなお、この人物に勇敢さの必要がであろうか。この男はもう恐ろしき状況のうちにはいないし、すでに、愛する人と完全にともにいるのであるから、現在不在の人に対しても、彼には同じようにできるに違いない。2) 節制を必要としない人にとって、節度がどうして不可欠であろうか。というのも、それを抑制するために節制を必要とするような欲情を持つということは、決して淨らかな人の業ではなく、むしろ情動にまみれた人のなせる業であり、勇気を獲得するにしてもそれは恐怖と臆病を通じ、添えてなされることなのである。なぜなら、神の友ともあろうもの、それは神が世の創造以前から頂点たるべき「子化」に向けて組み入れるべく計画していた者なのであるが、彼が快樂や恐怖に陥ったり、諸々の情動の抑制のために忙殺されるといったことは相応しくないからである。4) わたくしとしては次のように敢えて言いたい。すなわち、人はそのことのために創られているその事柄を行うために予め定められているのであるが、ちょうどそれと同じように、彼は愛した方を、何を通して知るか、それを自身予め有しているのである。彼は将来を説明しがたいかたちで有しているが、多くの人々が行き当たりばつりに生きているのに対し、覚知者は、覚知による信仰を通じ、他の人々には明らかでない事柄をも受け入れているのである。77.1) したがって彼のうちには、愛によってすでに将来が内在しているのである。というのも彼は、預言と降臨を通じ、偽ることのない神に信頼を置き、信じた事柄を、自身で有しかつ約束を所有しているのである（なぜなら、約束された方は真理なのであるから）。そして約束の成就に関して、約束された事柄の信憑性を通じ、知識として確かにこれを保

持している。2) しかるに、その事柄に関して確かな状況を、将来の事どもの把捉として知っている者は、愛を通じて将来に出遭うのである。3) 彼はもう、この世の事柄を手にすることができるようになどと祈ることはない。それは彼が、真に善き事どもを手にするのであろうこと、そして適わしく直しき信仰を常に所持することを信じて疑わないからである。4) さらにこれらに加え、彼はできる限りこの方に多く似ることができるよう祈るが、それは神の栄光のためであり、この神の栄光とは、認識 (epignōsis) によって完成されるのである。5) というのも救い主に似た者は誰であれ、人間の本性にとって似像を容れることが許される限りにおいて救い主的であり、掟に関する事どもを、逸脱なく打ち立てるからである。神的なるものを、真なる正義を通じて奉ずることは、この人のなせる業であり、覚知の業である。78.1) 祈りにおけるこの人の声を、主は遅らせることはしない。主はく求めよ、そうすればわたしは叶えるであろう。思いなせ、そうすればわたしは与えるであろう> (マタイ7,7) と述べているからである。

2) 総じて、変化するもののうちに、不変なるものが固着性と存立とを得ることは不可能である。不変なるものは永続的なあり方のうちにあり、それゆえに主導的部分は変化極まりない状況のうちにあって、習慣的な力を維持することが無理だからである。3) というのも、外界から忍び寄り襲い来る事物によって絶えず変転している者が、どうして習慣性や静止状況、要するに知識の保持が可能に置かれるのだろうか。しかも哲学者たちは、徳を習慣・静止状況そして知識であると考えているのであるから。4) 覚知とは、人間とともに生まれるものではなく、後天的に獲得されるものである。そして覚知の学びは、集中力と生育・成長を必要とする。しかる後止むことのない配慮によって習慣へと至り、かくして神秘的な習慣のうちに完成され、愛によって躓くことなく留まるのである。5) というのも第一の原因、またこの第一の原因によって生まれた原因をこの覚知は取り込み、それらのうちに障害なく留まり、不動の状態のうちに、不動にして変化せず、動揺することのないロゴスを獲得するばかりでなく、善と悪、すべての誕生に関して、つまり要するに主が語った事柄に関して、世の創造から終末に至るまでの最も正確な真理を、真理そのものから学び取って保持するのである。その際に、たとえある事柄が尤もらしくまたギリシアの論理からして必然的であるように思われたにしても、真理を差し置いてそれを選び取ることはせず、ただ主によって語られたことを明らかで明確なこととして所持するのである。6) そしてたとえ他の人々にはいまだなお



隠されている事柄であっても、すでにすべてに関する覚知を獲得している。そしてわれわれの許にある事どもを彼は預言するが、それは現在のことを今あるとおりに、また将来にことについてはそれが起こるであろうように、そして過去の事柄についてはそれが起こったとおりに伝える。79.1) 知的な事柄にあっては、知者はただ一人であるが、この方が主導しまた善に関する言葉を統括する。彼は思惟界の事どもを常に統率し、天上界における原型なるものから、自らの人間的な事柄に関する統率を描き出す。その様はさながら航海する者たちが、星座に従って船の進む方向を正すようである。そして相応しき行為をすべて実行しうるように備え、あらゆる煩わしきこと・恐ろしきことを超越視することに慣れ、堪忍せねばならない折には、性急なこと・自らにも公共にも不調和なことは一切行わず、先慮に富み、白日のまた夢魔による快樂には決して屈することがない。2) つまり彼は生き方に関しては、祈りと自足に賢慮をもって慣らされており、莊嚴さを伴ってよく備えができており、生きるに際して必需品をわずかしか必要とせず、物が乏しいと不平を鳴らすこともなく、それらに関しては先立つものとしてではなく、生活上の共同体から肉の維持に不可欠なものとして、必要な分だけ、自らに要求するのである。彼にとって先立つものは、覚知に他ならないのであるから。

## X. 覚智者と学問

80.1) その結果彼は、覚知に向けて鍛錬する事どもに自らを献げ、個々の学問において真理に適う事柄を取り入れ、音楽にあっては調和の取れた事柄のうちにある類比を追究し、数学にあっては数の増減を銘記するとともにそれら相互の関係をも、最大限いわば数の類比に関連づける。一方幾何学にあっては本質そのものを本質から観想することに努め、何か永続的な距離と、変化せざる本質、すなわち物体そのものとは他の実体を思惟することを習慣化する。3) さらに、天文学によっては思惟のうちに大地から宙へと挙げられて天上界に高められ、回転を伴って星辰とともに運動し、常に神的なるものとそれら相互の共鳴を探る。それはアブラハムが、そこから駆り立てられて創造者の覚知に高められるに至ったものである。4) だがそればかりでなく、覚智者は弁証法をも援用し、諸々の類と種の区別を選び取り、諸事物の判別へと至る。そして遂には、第一のそして単純なるものを掴み取るまでになるのである。5) しかるに多くの者どもはまるで幽霊を恐れるかの如くにギリシア哲学を恐れ、自分た

ちを欺くのではないかと心配する。81.1) けれども彼らにあって、もし信仰というものがそのようなものであるとすれば（これを覚知と呼ぶことはすまい）、もっともらしい言説から解放されるために、解放されるがよい。そして早速、真理を有することはないだろうことを告白すべきである。というのも彼は、真理は征されえないが、尤もらしい言説は崩壊する、とということになるからである。そこでわれわれは、紫色を、他の紫色を対峙させることをもって抽出しよう。2) かくしても、誰かが「自分は卓越した心を持っていない」と告白するとすれば、彼は両替商の机も持っていなければ御言葉の規準も持っていないことになるだろう。どうしてこの人間が、さらに両替商を続けてゆけると言うのだろうか、正真正銘の貨幣を贋金から区別し見分けることもできないというのに。3) ダビデはこう叫んでいる。〈正しき人はとこしえに揺らぐことがない〉（詩篇 111,6）。つまり彼は、邪悪な言葉によっても、惑溺の快樂によっても揺らぐことがなく、その結果彼自身の嗣業から揺らぐこともない。4) 〈彼は悪しき声に怯えることもない〉（詩篇 111,7）。つまり彼は、自らをめぐる虚しき誹謗や偽りの誉れにおびえることはなく、悪辣な言葉を恐れることもない、なぜなら彼は、正しく尋ね正しく応えることを通じて、それらを判別する術を身に付けているから、というのである。というのも弁証法は、いわば笠石のようなものであり、それは真理に関して、ソフィストたちによって躓かされないためのものである。5) なぜなら主を捜し求める者たちは、賞賛された際に、預言者によれば、主の聖なる名において心に喜ぶべきだからである（詩篇 104,3）。6) 〈あなた方は、主を捜し求め、心を強くしてあれ。すべてにおいて〉、すべての方法で〈主の御顔を捜し求めよ〉（詩篇 104,4）。なぜなら主はさまざまな方法で、多様な仕方で語るのであるから、一様に認識されるはずがないのである。

82.1) われらが覚知者は、これらの徳を併せ用いることで博識となることはなく、むしろいわば協働者として関わり、共通のこと・固有のことを区別することにおいて真理に近づくであろう。というのもあらゆる迷妄と誤謬の原因とは、諸事物がどこで互いに共通し、どこで相違しているかを判別することができないことだからである。2) もし誰かが、定められた定義によることなくロゴスに接近しようとするならば、知らずに共通性と固有性とを混交させてしまうことであろうし、そうなると彼は行き詰まりと迷妄に陥ることは必定である。3) しかるに名前と事柄の峻別は、聖書そのものにあっても靈魂に大いなる光を生み出すものである。というのもより多くのものを意味する措辞と、さらに

より多くのもに耳傾けることは、それらが何か一つの事柄を意味する際には不可欠だからである。4) ここから正確に応答する術も生じるのである。4) しかるに無益なものはどんどんと排除すべきなのであり、何ら適合しない事柄は抑える。たとえば、真理の正確な伝承のための補助的な前訓練のようなものは、可能な限りにおいて抑止すべきである。そうすると必然的に覚知者の学問を併用することになり、誤用された結果真理を消去しかねない論理に対しては防衛することになるのである。83.1) 覚知者は、円環的 (enkyklios) 教養の学びやギリシア哲学に関して進捗している人々から、取り残されることはない。もっともそれらは卓越した理念に基づくものではなく、必然的で第二番目、そして状況に応じた理念によるものである。異端説の許で苦吟した者たちが全力を挙げて享受する事柄を、この覚知者は良きことのために用いるであろう。2) ギリシアの哲学にたまたま強調された真理が部分的なものであるとして、真なる真理は、ちょうど太陽が白いものにも黒いものにも変わることなく諸事物に光を及ぼすのと同じように、それらの各々がいかなるものであるのか、それを明らかにする。ちょうど同じように、この真理もまた、ソフィスト的なあらゆるもともらしき言説を吟味する。3) それはちょうど、ギリシア人たちによって次のように喝破されているのと同様である。

「大いなる徳の初め、おお、師なる真理よ」(ピンドロス、断片 205)。

## XI. 〈数学〉

84.1) さて、天文学に関して、われわれはアブラハムという規範を有している。ちょうどそれと同じように、代数学に関するアブラハムが規範である。2) というのも彼は、ロトが捕虜として捕えられたと聞き、自分の親族の者たち 318 人を招集し、大部な敵の軍勢を急襲しこれを打ち負かしたのである (創世 14,14 以下)。3) しかるに形の上で、300 を表す文字は、主の墓【十字架】の徴であると言われている。一方イオタとエータと言う文字は、救い主の名を表すものと言われる。4) このようなわけで、救いに関してアブラハムは使用人であると言われる。それは、意味と名称に関してそう生まれ付いている人々に対してであるが、彼らは捕虜になった人々、彼らに付き随った非常に数多くの人々の主となっている。5) すでに 300 という数字は、100 という数字の 3 倍であるが、10 という数は、完全に完全なる数字であることが同意されている。6) また 8 という数字 [第 1 の完全数である] は、あらゆる距離・長さ・広さ・

重さにおける平等性を表している。

7) さらに聖書にはこう語られている。〈人間の日々の数は、120年間である〉（創世6,3）。しかるに、一者としてのあり方から統合に至るまで、数字にすれば15である。月は15日目に満ちる。85.1) また別の解釈もありうる。それは120が三角数【 $\text{trigōnos}$ ;  $y=x(x+1)/2$ のタイプの数;  $x=15$ のとき  $y=120$ 】であるというものである。さらに別の理解によれば、 $120 = 64 + 56$ であり、まず64とは等しい数（ $\text{isotēs}$ ）の積（ $8 \times 8$ ）であり、その各々を掛け合わせた四角数【 $\text{tetragōnos}$ ;  $y=x^2$ のタイプの数;  $x=8$ のとき  $y=64$ 】でもある。そして64は $1 + 3 + 5 + 7 + 9 + 11 + 13 + 15$ である。一方56とは異なった数（ $\text{anisotēs}$ ）の積（ $7 \times 8$ ）に相当するが、この $7 \times 8$ とは異数の積（ $\text{heteromēkēs}$ ）であり、二を基数とする偶数の7つ分（ $2 + 4 + 6 + 8 + 10 + 12 + 14$ ）に当たる。2) さらに別の意味理解に従えば、120という数字は4つの数から成る。それは15, 25, 35, 45の4つであるが、まず15という数字は三角数【 $y=x(x+1)/2$ ;  $x=5$ のとき  $y=15$ 】であり、二番目の25は四角数【 $y=x^2$ ;  $x=5$ のとき  $y=25$ 】、三番目の35は五角数【 $\text{pentagōnos}$ ;  $y=3x^2 - x / 2$ のタイプの数;  $x=5$ のとき  $y=35$ 】、四番目の45は六角数【 $y=2x^2 - x$ のタイプの数;  $x=5$ のとき  $y=45$ 】である。3) すなわち、これら4つの数にあっては、どの数にも同じ類比関係で5が現れる。すなわち15は5でできた三角数である【 $15 = 5 \times 6 / 2$ 】。また25も5の二乗であり、以下同様である。4) 実に、25という数字は5を単体としてその二乗であるが、レビ族の象徴であると言われている（民数8,24）。しかるに35という数字は、6, 8, 9, 12という4つの数の和であるが、この同じ数が代数的にも【 $12 - 9 = 9 - 6$ 】、幾何学的にも【 $6 : 8 = 9 : 12$ 】、調和学的にも【 $1/6 - 1/8 = 1/8 - 1/12$ 】、二つの数の対応で示せる。この日数の期間で、7ヶ月の胎児ができるとユダヤ人たちは言っている。しかるに45という数字は、6, 9, 12, 18という数字の和であるが、3倍の数の間の割合で示せる（代数的【 $18 - 12 = 12 - 6$ 】、幾何学的【 $6 : 9 = 12 : 18$ 】、調和学的【 $1/6 - 1/9 = 1/9 - 1/18$ 】）。またこの日数の期間で、9ヶ月の胎児ができると言われている。

86.1) 以上は、代数的な規範の一種である。一方幾何学的な証しの例としては、幕屋の製作と契約の櫃の設計がある。これらはいわば最も論理的な類比をもって、神的な想念によって製作される。それは理解の賜物により、感覚世界から思惟世界に入る。否むしろ、この世のものから聖なるものへ、しかも至聖なるものへとわれわれを導くものである。2) というのも<箱舟（四角形

の木) > (創世 6,14) とは、四角形という形状が、すべての角において直角であるということにより、堅固さを完遂するというを明らかにしている。そしてこの箱舟の長さは 300 ペキュス、幅は 50 ペキュス、高さは 30 ペキュスとされている (創世 6,15)。このペキュスは、上から順に完成されていて、基礎の広さから削り取られてピラミッド型になっている。一方契約の櫃は、火によって浄められ吟味されたものの象徴である。その幾何学的な類比的構造は、この聖なる住まいの運搬のために為されている。指定される数字の相違は、その住まいの違いを明らかにしている。87.1) ここに盛り込まれた割合は、6 倍すなわち 300:50, 10 倍すなわち 300:30, そして 5:3 となっている (epidimoiros)。なぜなら 50:30 は 5:3 であるから。2) さらに、300 ペキュスという数字は、主によるしるしの象徴を述べている。一方 50 は聖霊降臨祭における希望と赦しである。また 30 もしくはある写本にあるように 12 という数字は、教えを表したものとされている。なぜなら 30 歳のときに主は宣教を始めたのであるし (ルカ 3,23), 12 人とは使徒たちの数である。そしてこの建造物はこのペキュスで完成されるべきである。なぜなら主の教えは一つにおいて完成されるものであるし、信仰も一性において一致を見るべきだからである。

3) 一方神殿の卓の長さは 6 ペキュス、4 本の足はそれぞれ 1 ペキュス半とされている (出エジプト 25,23 - 24)。かくしてペキュスをすべて足すと 12 になる。これは 1 年間の月のめぐりの数に一致する。これにならって万物が育ち、大地が 4 つの季節に従って実りをもたらすのである。4) 思うに、卓とは大地の似像を明らかにしているのであろう。この卓は 4 つの足で支えられている。それは夏・秋・春・冬である。これらを通じて一年が巡る。それゆえ卓はく波のようにうねっている>と言われる (出エジプト 25,23)。あるいはまた、これは万物が季節の周回をもって転回するためかもしれないし、大地が大海によって囲まれていることを明らかにしているのもあろう。

88.1) 次に音楽の規範には、豎琴を奏でるとともに預言をおこなったダビデに就いてもらおう。彼は神を、韻律のある節回しで讃えたのである。よく調和のとれた類の讃歌はドーリス風の旋律に、一方激しい調子の讃歌はフリュギア風の旋律に適う。これはアリストクセノスが述べていることである。2) 異邦の豎琴の調和は、節回しの荘厳さを強調するが、それは極めて古くに遡るもので、これがテルパンドロスには規範となっており、彼はドーリス風の調和に乗せてゼウスをおよそ次のように讃えている。

「ゼウスよ、万物の根源、万物の主導者、

ゼウスよ、あなたにこの古めかしい讃歌を捧げる」

(テルパントロス、断片1バルク).

3) ところで詩人にとっては、キタラでもって、まずその意味するところによれば主が比喩的に表現されている。しかるに第二義的には、主をムーサイたちの隊長とし、靈魂を止むことなく叩き続ける人々が意味されている。4) もし救われる民がキタラと呼ばれるのであれば、御言葉の息吹と神の認識のもとに、彼が音楽的に賛美しているのが耳にされる。彼は御言葉によって信仰に向けて叩かれるのである。5) さらにあなたは、他のあり方においても、律法と預言者と、さらには使徒たちの教会における音楽的な共鳴が、福音とともにあることを理解するであろう。それは各々の預言者によって、人によって異なるものの、全体として調和をなすものなのである。

89.1) だが思われるに、名を書き記されている人々のうちの大半は、ちょうどオデュッセウスの仲間たちのように（ホロス『オデュッセイア』12.165以下）、御言葉を野卑なかたちでやり過ぎてしまうのである。その際にセイレーンではなく、リズムと旋律をも通り過ぎし、耳を無学のうちに染めるからであり、ひとたびギリシア人たちの学問に聴覚を従わせてしまったなら、その後は帰国を希求することすらできない有様であることを、彼らが知っているためである。2) しかるに教理を授かる人々、とりわけそれがギリシア人たちである場合、彼らの益になるような有用な事柄を摘み取った者には（「大地と、そこに満ちるのは主のもの」【詩篇23.1】）、理性を持たない動物の如くに、博学を控えるという必要はない。むしろできる限り、より多くの助力を、耳傾ける者たちに結び付けるべきなのである。3) だが決して、彼はこれらの者どもと時を過ごすようなことがあってはならず、ただ彼らのうちの有益な部分にのみ向かうべきなのであって、それは彼らがこれを手中に収め取り込むや、真なる哲学を目指して郷里へと旅立つことができるようになるためである。そのとき彼らは、すべての事柄に対して揺らぐことのない、しっかりとした手綱を靈魂に獲得していることであろう。

4) かくして倫理性の秩序化と反省のために、音楽に携わる必要がある。90.1) 言うまでもなく、われわれは酒宴の場で、豎琴の演奏を傍らに祝杯を挙げるのであるが、それはわれわれの情動に関わる部分をなだめるとともに、神に賛辞を捧げ、肉体的なまた靈魂上の成育に資する滋養を人間が享受しうることに関しての、限らない賜物を感謝するためである。2) 余分な音楽は排除すべきであるが、それは靈魂を砕き、あるときには獣的な、またあるときには制

しようのない快楽的な、そしてあるときには狂乱の魔術的な精神散乱へとわれわれを陥れるからである。3) おなじことは天文学に関しても言える。これは天界の記述を通じて、その全体の形と天の運行、星辰の運動について、靈魂がより親密に創造者の力に近づくことを可能にする。そして一年の季節、空気の変化、星が昇る時期についてよく注意して把握することを教える。航海術や農耕術は、この天文学の活用によって満たされており、それは棟梁術や家屋建築術が幾何学に満たされているのと同様である。4) 一方、真理を洞察し虚偽を反駁することに向けて、この学問は可能な限り意識的な状態に備える。それは証明と類比を見出すことにもつながり、その結果不相似なるもののうちに類似したものを探索させ、われわれに対し、近づきたい長さ、ごく把握しやすい神の顕現、部分的ならざる徴を発見することへと誘い、感覚世界から思惟界へとわれわれを移行させるのである。

91.1) かくして数学は哲学の協働者であり、哲学は真理について把握するためのものである。たとえばマントも当初は羊毛であり、しかる後けばを梳いて毛状となり、その後織機にかけられる。2) つまり靈魂は、最高の備え方が為されるためには、まず前もって準備され、それから多様に織りなされることが必要である。なぜなら真理のある部分は覚知的であり、ある部分は製作的であり、観想的なものから出発して修練と幾多の鍛錬、そして経験を要するからである。3) だがそればかりでなく、観想的なるものも、その一部は「究極に関わる事柄とは何か」、また一部は「その関係はいかなるものか」という問題だからである。それゆえ教養も同時に備えられることが必要であり、かくしてこれら双方に調和するものとなるのである。4) 従って、覚知に資する事柄の本質的な部分を学び終えた者は、その後は安寧のうちに留まることができる。行為を観想に沿って正せるからである。5) 究極の事柄は、ある部分は書き記すことへと誘い、またある部分はロゴスを伝えることへと招く。その有用性に応じて、ある教養は有益であり、また主の書物の読書は語られた事柄の実証のために必須である。それは、ギリシアの教養から専門的なかたちで導かれる場合には特にそうである。

92.1) そのような交わりの場合、ダビデは次のように描き出している。〈諸国の王女、あなたが愛でる女性たちの中から、黄金の衣、多彩な装飾を身にまとった王妃があなたの右に立てられる〉(詩篇 44,10)。この「多彩な」とは、ギリシアあるいはその他の国々のことである。〈王妃は黄金の糸による織り布をまとい、多彩な装飾を身にまとう〉(詩篇 44,14)。しかるに〈真理は主を

通して来たる> (ヨハネ1,17). 2) というのも、彼はこう述べる。 <もしあなたが知恵を与えて下さらないなら、そしていと高きところからあなたの聖なる息吹を送って下さらないなら、誰が認識できようか。 こうして地に住む人間の道はまっすぐにされ、人はあなたの望むことを学ぶようになり、知恵によって救われた> (知恵の書9,17以下). 3) というのも覚知者は、聖書によれば古の事どもを知り、将来の事どもを推測し、言葉の理解や謎の解明に秀でており、しるしや不思議、季節や時の推移を予見する> (知恵の書8,8). これはわれわれが先に述べたことである。 93.1) あなたは数学の源泉が、知恵に発しているということをご存知だろうか。 しかるに、太陽やその他の星がどのようにして動くのか、あるいは、たとえば幾何学や弁証法、その他様々な学問の各々を知ることで何の益があろうかと反駁する人々があるだろう。 なぜならそれらは、相応しい報いをなにも益してくれないし、ギリシア哲学は人間の知恵なのであって、真理の教えではないのだから、と。 彼らに対しては次のように答えるべきである。 すなわちまず、この人々は諸事物の最大の事柄、すなわち理性の選択に関して躓いている。 2) なぜなら<敬虔なる事どもを敬虔に守る人々は敬虔なる者とされ、それらを学ぶ者たちは弁明の法を見出す> (知恵6,10). というのも独り覚知者だけが、為すべき事柄をすべて敬虔かつまっとうに実行するからであり、その次第は、彼が主の教えに従って学び、人を通じて受け取ったとおりだからである。 3) さらに次のような言葉を聞くことができる。 <彼の手のうちには>、すなわち知恵の力のうちには、 <われわれも、われわれの言葉も、すべての賢慮も、労働のための知識も含まれているから> (知恵7,16). <神は、知恵とともに住まう人でなければ愛さない> (知恵7,28). 4) そして彼らは、ソロモンによって語られた次の言葉を読んだことがないのであろう。 つまり彼は神殿の建設に際して次のように述べているのである。 <知恵が技術者となり、組み立てた。 父よ、あなたの思いが導いた> (知恵14,2以下). 94.1) では棟梁術や操舵術に比して、哲学のほうが劣っていると考えることが、どうして非論理的でないことがあろうか。 2) おそらくは主もまた、ティベリアス湖の対岸の芝生の上に座った大衆を、2匹の魚と5個の大麥パンで養ったとき、ギリシア人たちおよびユダヤ人たちに対し、神的な火に先立ち、律法により育まれた食糧による前教養をほのめかしたのではなかっただろうか。 3) というのも大麥は、真夏の灼熱に先立って実るからである。 一方魚は、異邦の大波を上回って生まれ伝えられるギリシアの哲学を意味する。 なぜなら、なお地に伏す者どもに対して、十全な食糧となるからである。 4) というのも魚た



ちは、もはやパンの切れ端のごとくに増えることはなく、主による祝福に与かり、言葉の力を通して神性の復活に息づくからである。5) だがもしあなたがさらに詳細を究めたいというのであれば、魚の一匹を普遍的教養 (enkyklios) の一つとし、残りのものは、育ち行く哲学を意味すると受け取るがよい。それらはいかにも、主の言葉と共鳴するからである (Λιβ<sup>ε</sup>の読み synangeloi に従う)。

「魚の大群は、声を挙げてこれに呼応する」

(ソフォクレス、不詳作品断片 695)

と、悲劇のムーサは何処かでこう語っている。6) <わたしは驕り行かねばならない、栄えるのはあの方> (ヨハネ3,30)、すなわちそれ以降はただ主の御言葉のみであり、この御言葉に向かって律法は限界づけられる、と預言者であるヨハネは語ったのである。95.1) すでにもう、読者は真理の神秘について理解されたであろう。わたくしがこの議論についてさらに進めることをためらうとしても、お赦し願いたい。ここではただ、次のことだけを告げておきたい。<すべては彼によって成り、彼なくして成ったものは一つもなかった> (ヨハネ1,3)。2) すなわちここで語られているのは<隅の親石> (エフェソ2,21) のことであり、神の使徒によれば<そのうちにすべての建造物が調和をもって成長し、神の聖なる神殿にまで至る>のである。3) わたくしは今ここでは、福音書の中で次のように語られる比喻については沈黙を守ろう。<天の王国は、網を海に向けて投ずる人間に似ている。彼は獲れたおびただしい数の魚の中から、より良きものを選択する> (マタイ13,47以下)。4) すでに、四種類の徳についてわれわれの許なる知恵がおよそ次のように述べている。かくしてその泉についても、ユダヤ人からギリシア人へと提供することになったのであり、それをここから学び取ることができるだろう。<もし誰かが正義を愛するなら、正義の労苦とは徳である。なぜなら彼は、節制と賢慮、正義と勇気を教えるからである。人間の生涯において有用なものは、これらを措いて他にはない> (知恵8,7)。5) すべてにおいて彼らは次のことを知らねばならない。すなわち、われわれは本性において徳に向けて作られているが、それを誕生の段階から持つようにはなく、それを獲得する適性を有しているのである。

## XII. 覚智者と徳

96.1) 異端者たちによってわれわれに提起されている問題、すなわち「アダ

ムが創造されたのは、完全な者としてか、それとも不完全な者としてか」という問いは、以上のような論拠から解決される。彼らは「もし不完全な者として創られたのなら、どうして完全な存在である神の業が不完全であるのか、しかも人間ともあろう者が、一方もし完全な者として創られたのであれば、どうして彼は掟を破ったのか」と問う。2) 彼らに対するわれわれの回答は以下のとおりである。すなわち、彼は構造において完全というわけではなかった。だが徳を受け入れる適性は持っていた。徳に向かう上で、その徳の獲得に向けて適性を有しているということは重要である。われわれは、われわれ自身の意図で救われることが望まれている。自発的な衝動力を持つということは、靈魂の本性である。しかる後、われわれは理性を有しているのであるから、哲学に対して生まれの親縁性を有している。なぜなら哲学は理性的なものであるから。実に、適性 (epitēdeiotēs) というものは徳に向かう衝動であって、徳自体がそうあるのではない。

3) 上述のように、すべての人々は生まれつき徳の獲得に向けられているが、学びと修練においてある者は進みが速く、ある者はそれほどでもない。それゆえ、ある人々は完全なる徳に至るに十分であるが、ある人々は、ある段階までは先行するが、また失速する者もあり、たとえとりわけ資質に恵まれていようとも、それとは逆に脱落してしまう者もある。4) そしてあらゆる学びに比して、覚知はその大きさ・真理性において卓越しており、獲得するのが極めて困難であり、それは幾多の労苦のうちに為される。97.1) だが思われるに、<彼らは神の神秘を知らない。神が人間を不腐敗性に向けて創造し、自らの特性の似像として人間を創ったのだということ> (知恵 2,22 以下)。全能の方のこの特性にしたがって、覚知者は「正しくまた敬虔に、賢慮を伴って」(プラトン『ティマイトス』176B) 完全なる年齢の域にまで到達するよう努力する (エフェソ 4,13)。2) 行為や想念ばかりでなく、その言葉も、覚知者にあっては浄らかなものとなっているということ、詩篇作者はこう述べている。<あなたはわたしの心を調べ、夜には究められる> (詩篇 16,3 以下)。<あなたはわたしを火で吟味されるが、わたしのうちに不義は見出されない。わが口が人々の業を語ることはないように>。3) ここでなぜ<人々の業>なのであろうか。彼は罪そのものを知っているが、それは回心に導かれた過ちではなく (これは他の信徒たちにとっても共通のことであるから)、罪とは何か、ということである。彼は何かある罪のことを指して言っているのではなく、端的に、すべての罪を指しているのである。それは人が悪しき仕方であつた事柄にではなく、為すべきでないことを

為したところに存する。4) そこから、回心も二通りとなる。まず第一は、過ちを起こしたということに対する共通な回心、もう一つは、罪の本性を学び取り、その罪から離れるようにと規定するロゴスに従って、その結果罪を犯さなくなるという結果が伴うことである。

98.1) さて、不正を働き罪を犯す者は悪霊の力によって誤るのだということは、主張すべきでない。なぜならたとえ無実の人間であっても、罪を犯す際には悪霊と同じことを選択するのだから、彼は躓きやすく軽率で欲情に流されやすく、悪霊と同様、悪魔的な人間となるためである。2) すなわち本性的に悪人である者は、悪によって罪を犯す者となり、卑しき者となるのであるが、その際に自ら選び取った悪を己がうちに有するのである。彼は過ちに陥り、行為において過つのである。逆に、真摯なる者は廉直に生きる。3) それゆえ徳ばかりでなく、美しき行為をもわれわれは「美」と呼ぶのである。諸々の美の中で、あるものはそれ自体として選択されるべきものであるが、たとえば覚知の場合がそれに相当する（というのも覚知が備わるならば、覚知がその人に現前し、われわれが止むことのない観想のうちにあり、覚知に向けまた覚知を通じて格闘しているということ以外には、覚知からさらにわれわれは何も目指すことをしないのであるから）。しかるにまたあるものは、他のものを通して選ばれるべきものであり、それはたとえば信仰の場合がそうである。なぜなら信仰を通じて懲罰の回避が成立し、また信仰を通じて報いの有用性が生じるからである。また多くの人々にとって、恐怖は罪を犯さないための原因である。あるいは約束は、従順を追求する上での端緒である。従順によって救いが生ずるのであるから。99.1) かくして最も究極の善とは覚知であり、覚知はそれ自体として選ばれるべきものであり、それに伴い、覚知を通じて随伴する諸々の善も選択されるのである。2) また懲罰は、懲罰を受ける者にとって矯正の原因であるが、彼方より洞察する能力のある人々には範例となり、この範例によって、同様の状況に陥ることが撃退される。3) かくしてわれわれは覚知を受け入れるのだが、それはその結果を待望してのことではなく、まさにそれ自体のために、覚知することを渴望するのである。まず第一の有益さは、覚知の習慣である。これは揺らぐことのない快樂と、現在のまた将来に向けての歡喜を提供する。4) この歡喜は「悅樂」と呼ばれているが、これは真理に基づく徳の省察であり、それは何らかしる靈魂の祝祭性と安寧を伴うものである。5) しかるに善くまた美しき行為とは、覚知に与かる業である。というのも真なる富とは、徳による行為のうちに増大するものであり、一方貧困とは世俗的な欲

情による立ち往生だからである。6) 必要不可欠な事物の獲得また使用は、有害な質をではなく、度を過ぎた量を有するものである。100.1) それゆえ覚知者は欲情を、獲得と所有にしたがって制御する。すなわち彼は、必要不可欠な事物の限度を超えることはないのである。2) かくして生きることは、この世にあって知識の増強と覚知の獲得に向けて必要不可欠なことであり、彼が多とするのは、生きることではなく、よく生きることである。その際、子供たちや結婚や両親のことなどを、神に対する愛や、生活の中での正義よりも優先させることはない。3) この人にとって、妻は子作りの後には、父を同じくする姉妹と見なされる。そのとき彼女は、子供たちに目を注ぐ際であっても、夫のことだけを想起し、真なる姉妹となることであろう。そのときには、容貌の特性によって、覚知を霊的な事柄から引き離したり限定したりしてしまう肉の面は排除されていることであろう。彼女たちは、それ自体としてまさしく靈魂と化しており、それは男性でも女性でもない中性の靈魂と化している。なぜならもはや<娶ることも嫁ぐこともない> (マタイ 22,30) からである。だからといってこのとき女性が男性に変わらずというわけでは決してなく、彼女はやはり非常に女性的で、かつ男勝りであり、完全な女性となるのである。101.1) これこそ、子供の誕生を告げられた際のサッラの笑いである (創世 18,12)。思うに、彼女は天使の言葉を信じなかったのではなく、むしろその天使の語りによって、自分が子の母となるであろうということを良く理解したのである。2) だからこそアブラハムはそれ以降、エジプト王の許でサッラの美しさのために危機に陥った際にも (創世 12,11 - 20)、彼女のことを正真正銘の姉妹で、父親が同じであり、母親が異なるのだ、と公言してはばからなかったのである (創世 20,12)。

3) 罪から回心したもののまだ堅固に信じていない者に、神は嘆願を通じてその願いを叶えるが、罪を犯すことなく覚知的に生きる者については、その人が念じただけで神はそれを与える。4) アンナが念じただけで、子供のサムエルを懐妊することが彼女に叶えられた場合がそれである (サムエル上 1,13)。聖書にはこう記されている。<求めよ、そうすればわたしは実行しよう。念じよ、そうすればわたしは与えよう> (マタイ 7,7)。5) われわれは、神が<心を究める方> (使徒行録 1,24 ; 15,8) であると受け止めている。それは神が、われわれ人間と同じように靈魂の動きから証拠立てる方なのではなく、結果から判断する方でもなく (そう考えることは笑止千万である)、さらには棟梁ができ上がった仕事を誉めるように神も光を創り、その後それを見て<美しい> (創世

1,3以下)とされたのでもない。4)むしろ神は、創るより前から、それがどのようになるかを知悉しており、それを讚美したのである。つまり<美となった>というのは、創造者の力(dynamis)によるのであって、天上より、始めのない呼びかけにより、可能性において成立するであろう美を指したと解されるのである。7)つまり神は、そうなるであろうものを、すでに前もって<美である>と呼んだのであり、これは真理を隠した転置法(hyperbaton)による表現なのである。

102.1)かくして覚知者は、まったき心をもって常に、愛を通して神に親しく祈る。まず罪の赦しを願い、続いて二度と罪を犯さず善行をなし、主によるあらゆる創造と経倫を理解することができるようにと。2)これは、心清い者となり、神の子を通じての認識によって、<祈りとともなる節制は善きこと>と語る聖書に聴き従いつつ、顔と顔を合わせての神的至福に適う者となるためである(1コリント13.12)。3)しかるに節制とは端的に、すべての悪から離れ去ることを告げる。その悪とは、業・言葉・そして思惟による事どもを言う。4)したがって、正義とは四角形をしているものと思われる。言葉において、業において、悪からの離脱において、そして善行において、その各辺が同一であって、覚知的な完成においては、いかなる場合にも、不正また不平等と見ることがないように、決して止まることがないのである。5)であるからある人が正しい人である場合、その人はまた完全に信仰深き人でもある。だがある人が信仰深き人であっても、それは決して正しいとは限らない。それは、進捗と完成における正義をもってわたしが「正義」と呼んでいるためである。その正義に照らして覚知者は「正しき人」と呼ばれるのである。103.1)たとえばアブラハムは、信厚き者となったために<義であると認められた>(創世15,6)。つまり彼は、信仰よりもさらに良くさらに完全である域に達したのである。2)というのも、単に悪しき行為から遠ざかっただけで、もしさらに善行を積むとか、どんな理由によりある事柄は遠ざけねばならずある事柄には励まねばならないかを覚るとかいうのでなければ、その人間が正しい人だとは言えない。3)使徒は言っている。<右の手と左の手に義の武器を持ち>(2コリント6,7)、義人は究極の嗣業へと遣わされる、と。その際、片方の手で守られ、もう一方の手では攻めるのである。4)というのも甲冑一式のうち楯だけで、そして罪に対する防御だけで完徳のために充分であるというわけではない。そこに、さらに義の業を伴わせ、善行に向けてのエネルゲイアを持たせねばならないのである。5)そのときにこそ老練の兵、そして正義における覚知者がわれわれの

前に明らかにされる。それは、ちょうどモーセの顔が輝いたように（出エジプト34,29）、この世にあってすでに栄光を受けた者の姿である。われわれは彼の顔を、上述した人々の持つ、正しき靈魂にとっての、固有の指標様式と理解する。

6) ちょうど羊毛のうちに染料の高い濃度が留まると、他の羊毛に特性を移し変移をもたらすように、靈魂に関しても、労苦が伴った場合、美しい部分は留まり、甘美な部分は残されるが、恥多き面は抹消されるものである。7) これらは各々の靈魂にあって、特徴的な性質であり、そこから、あるものは賞賛されるがあるものは問題化されるのである。104.1) 実に、ちょうどモーセにあって、その義なる行為と、彼に語りかける神への止むことなき親しさの一種の現れとして、彼の顔には栄光が刻まれたのと同様（出エジプト34,29）、義なる靈魂には、いわば善性の神的な力が、彼の司教的・預言者的・統治者的働きを通じて刻印される。それはさながら思惟界の輝きのごときであり、いわば太陽の温かみの如くに、顕現する正義の印章と、また止むことなき愛により靈魂と一体化した光が、神を運び神に運ばれる者の属性としてそこに現れるのである。2) ここにおいて、救い主である神への類似性が、覚知者のうちに穿たれるのであり、人間の本性に許される限りにおいて、彼は完全な者となる。その類似性は、<天にいます父>に似たものである（マタイ5,48）。3) それはこう語りかける者自身の姿である。<子らよ、わたしは今しばらくあなた方とともにいる>（ヨハネ13,33）。なぜなら神もまたそうであるから。彼は、本性において善であるとおりにではなく、神のごとくに幸いにして腐敗せぬまま留まる。「彼には困難はなく、他者に艱難を与えることもない」。すなわち彼は自ら善を行う。それは神が、真に神であり、善なる父であり、止むことなき善行のうちにあり、変わらぬ善性のうちに犯しがたく留まるからである。一体、働きをなさずまた善化させることもない善に、何の益があるというのだろうか。

### XIII. 覚智者：完全なる人

105.1) さて、当初は情動に関して中庸を持し、無情動を心がけ、覚知の完全性を帯びた善行において成長した人物は、この世において天使にも等しい者となる。すでに彼は、光り輝ける者となっており、輝く太陽の如くに、善行を通して、神への愛によって、正しき覚知をもって聖なる家へ急ぐ。そのあり方は使徒たちの如くであるが、それは使徒たちのように、何か本性上の卓越した特性があって選ばれたという理由によるのではない。ユダも彼らとともに選ば

れたのであるから。むしろ彼らが使徒たちとなり得たのは、彼らが目標を先見していたために選ばれたからである。2) 実に、彼らとともに選ばれたのではないマッティアスは（使徒行録1,23；1,26）、自らを使徒となるに相応しい者として献げ、ユダの抜けた場を勤めることになったのである。106.1) かくしていまや、主の掟によって修練を積み、福音を通じてまったき仕方では覚知的な生き方をする人々は、使徒として選ばれ、己が名を連ねることができるようになる。2) この人物こそ真に教会における長老（presbyteros）であり、神の意向のための真の執事（diakonos）である。彼が主に関わることを為した教える際には、人々によって按手されたため（使徒行録6,6）ではなく、長老であるから義人なのだ判断されたためでもなく、義しい人であるから長老の座に選ばれたという理由によるのである。彼は、たとえこの地上にあって首席の座で尊敬されることがないにしても、24の座に自らの座を占めて民を裁く。その様は『ヨハネによる黙示録』が語っているとおりである（ヨハ黙示録4,4）。3) 救いのための真なる掟とは唯一であり、それは世の創造の時点からわれわれの許にまで伸びるものであるが、世代と時代の異なりに応じ、賜物に関して判断され、多様である。4) というのもその結果、救いのための唯一にして不変の賜物とは、一なる神から一なる主を通じて「様々なかたちで」（ヘブライ1,1）益をなすものであり、その故に、ユダヤ人からギリシア人を隔てていた「隔ての壁」（エペソ2,14）は取り壊されて、富める民となるのである。107.1) こうしてこの両者は＜信仰の一性において＞（エペソ4,13）出遭うのであり、双方からの選びは一つである。そして主は、選ばれた者たちよりもさらに選ばれた者であるのが、まったき覚知による人々、もっとも崇高な栄光をもって崇敬されている人々であると言う（マタイ19,28；ルカ22,30）。彼らは裁判官また行政官であり、ユダヤ人およびギリシア人から等しく選ばれて、総計24人で構成され、その恵みは二倍である。また、この世の教会における位階（prokopē）は司教（監督episkopos）・司祭（長老）・助祭（執事）より成るが、これは思うに、天使の栄光とその経綸の写しとなっている。聖書はこの経綸が、使徒たちの足跡を辿り、正義の完遂のうちに、福音に従って生きてきた人々を待っていると語る（1コリント2,9）。3) 使徒は、彼らが＜雲のうちに＞（1テサロニケ4,17）挙げられると記す。彼らはまずは奉仕するのであるが、その後栄光の位階に従って（栄光は栄光によって異なるためである）長老の座に配される（1コリント15,41）。こうして彼らは＜まったき人にまで＞（エペソ4,13）成長するのである。

#### XIV. 真理と善き業に励む者たちには、各々の報いに応じて、 天における場が付与されるであろうこと。

108.1) このような完徳の域に達した人々が、ダビデの言う〈主の聖なる山に休らう人〉（詩篇 14,1）人であろう。この山とは天上的な教会であり、そこに神の愛智者たちが集う。彼らは心において浄らかで、そのうちに偽りのない真なるイスラエル人である。彼らは安息のヘブドマスに留まることなく、神との類似を示す善き業によって、恵みのオグドアスを受け継ぐ者にまで高められ、飽きることのない観想 (theōria) という純粹の観照 (epopteia) に専心する。

2) 〈他の群れもある〉、と主は述べる。〈この囲いに入らない他の羊の群れである〉。この群れとは他の囲いに属し、類比的に、信仰のみに値するものとされた群れである。〈しかしわが羊は、わたしの声を聞く〉。この羊とは、覚知をもって掟を理解するものである。ただ、業の応報と対応とともに、拡大的にまたふさわしく受け取ることも可能である。

4) したがってわれわれは、〈あなたの信仰があなたを救った〉（マルコ 5,34）という言葉に耳にする場合、いかようにであれ信じる者たちが、たとえ業が伴っていないとも救われる、ということの主が語っているのではないと受け取る。

5) すなわち主はこの言葉を、律法に照らして何一つ責められることのないような仕方生きてきたユダヤ人たちだけに対し語っているのであり、彼らには、ただ主に対する信仰だけが欠けていたのである。

109.1) したがって、無抑制のうちにある人は信篤き人ではない。むしろ、たとえ肉の身を脱していないとも、その人は情動を振り捨てることが必須である。それは、自らに固有の住まいに入ることができるためである。

2) 信じるよりも覚知にある方が優れている。その次第はちょうど、単に救われるということよりも、救われた後に最上の名誉に適う者とされることの方が優れていると同様である。

3) かくしてわれらが信篤き者は、幾多の教養形成を経て情動を脱ぎ捨て、以前のものよりもさらに上位の館をめがけて突き進む。その際に彼が帯びているのは、洗礼の後に彼が犯した罪に対する回心のしるしであり、これこそ彼にとって最大の懲罰である。

4) また彼の心を傷めるのは、他の人々が与かっているのが判るのに、自分は未だに、あるいはまったく与かしていない事柄があることである。

5) さらに彼は、自分が犯した罪について恥じ入るが、これこそ信徒にとっては最大の懲罰である。神の義は善きものであり、神の善性は義なるものである。

6) したがってもし、完済が行われ個々の浄めが果たされることによって、罰が止むことになったとして



も、他の住まいに適うとされる人々が見出されるなら、彼らは、正義のゆえに栄光を受ける人々とともにいないことに関して、最大の永続的苦痛を抱くのである。

110.1) さてソロモンは、覚知者のことを「知恵者」と呼んでいるが、その滞在の価値に驚嘆する人々について次のように述べている。〈悪人どもは知恵者の最期を見ても、その人に対する主の配慮を悟らず、なぜ主が彼を安全な場所に移したかを理解しない〉（知恵4,17）。2) さらにこの人々が彼の栄光について〈述べる〉様をこう表現する。〈この者を、かつてわれわれはあざ笑ひ、愚かにも、彼に罵りを浴びせた。その生き方を狂気の沙汰と考え、その死を恥辱と見なしていた。それがどうして神の子らの一人となり、聖なる人たちの仲間に加わったのだろうか〉（知恵5,3-5）。3) かくして、信篤き人ばかりでなく、異邦人もまた、いとも義しき仕方により裁かれるのである。というのも神は先見者であるが故に、この人が信じることはないであろうということを知悉しているのであるから、自らに関する完徳をも受け入れるように、彼には哲学を与える。しかしそればかりではなく、信以前に、信仰のよすがとするために、太陽・月・星辰をも与えた。これは律法が述べるように、神が諸民族のために創造したものである。これは彼らが完全に不信仰となって神なき者どもとなり、破滅するようなことをなくすためである。4) しかるにこの掟のうちに入りながらも覚知に至ることのない者たちは、彫られた彫像に熱意を傾けるなら、もし回心しない場合、裁きを受ける。それは、ある者はそれが可能なのに神に信を置かなかったという理由により、またある者は望んでいても信深き者となるべく努力を払わなかったという理由による。111.1) 実に彼らもまた、星辰に対する崇敬から、その創造者に向かって登攀することをしない者たちである。というのもこれは、異邦人たちのために、星辰に対する儀礼を通じて、神に眼差しを注ぐために与えられた道だからである。2) しかるに彼らに与えられた星に留まることを欲さず、これらから石や樹木に墮ちた者たちについては〈初穀、あるいは壺から滴る水滴と見なされる〉（詩篇1,4；イザヤ40,15）。すなわちこれは、救いにとって余分なもの、体から外に飛ばされるものという意味である。3) したがって、端的に救うということ、すなわち正しく必要不可欠な廉直さとは中庸に属すものであるのに対し、ちょうどそれと同じように、覚知者の行いはすべて廉直さであるのに対し、端的に信厚き者の行為は中庸に属すものと言われよう。これは決してロゴスによって完遂されるものでも、知悉によって正しく打ち立てられるものでもない。しかるに、逆に異邦人

の行為はすべて過ちに導くものである。というのも諸書は、端的に良く行うということではなく、何らかの目的に向けて行為を為す、そしてロゴスに従ってその働きが行われることこそ相応しい事柄だとしているからである。112.1) したがって、リュラを弾いた経験のない者に対してリュラに触れさせるべきではないし、横笛を吹いた経験のない者に対して横笛に触れさせるべきでもない。ちょうどそれと同じように、覚知を獲得していない人々に件の事柄を扱わせるべきではないし、生涯を通じてその事柄とどう対処すべきかを理解していない人々に対しても同様である。2) 実に戦いの競技者たちは、自由の闘争を戦争のなかで戦うのみならず、饗宴の場においても、寝台にあっても、裁きの場にあっても、ロゴスに浸された者として、快樂の捕虜となることを恥じる。

「わたしは徳を、不正な利得と決して取り替えはしない」

(PLG 作者不詳断片 104B).

ここで「不正な利得」と呼ばれているものとは、とりもなおさず、快樂・嘆き・渴欲・恐怖、要するに靈魂のさまざまな情動である。その当座の甘美さは、結局悩ましい結果に終わる。〈たとえ世界を手に入れたところで、何の益があるか〉、主はこう述べる。〈靈魂を失ってしまつては〉(マタイ 16,26)。4) かくして、麗しき行為を完遂していない人々は、自らにとっての益をも知ることがないのである。もしそうであるなら、この人々は正しく祈ることも、神から善なるものを得ることもできない。それは彼らが真に善なるものを知ることがないからである。それだけではなく彼らは、賜物を受けていると感じることもないだろうし、知ることのない事柄に関して、それを相応しく享受することもできまい。それは与えられた賜物を麗しく用いることに対する無経験により、またあまりの無学の故でもある。彼らは、神的な賜物をいかに用いるべきかをまったく知らないからである。無学こそ、無知の原因である。

113.1) さらにわたくしは、現在の状況に伴って生じた出来事に関して叫びを上げ、言いふらすことは、真摯な靈魂の業でない限り、尊大な靈魂の仕業であるように思われる。

「それに加えて、必要なことをそつなくこなせ。

わたしと共にあること、そして正しき共闘者であることは善きこと、  
だがそれに囚われず、麗しき事をなせ」

(エウピデス、典拠不詳断片 918.1 ; 3 - 5)。

2) この誠実さ、すなわち神に対しても人間に対しても敬虔であることこそ、正しき人間を救うのであり、それは靈魂を、畏敬すべき考え、浄らかな言葉、

そして正しき業によって清浄なものを守る。3) かくして靈魂は、主に相応しい力を獲得し、神が存在すること、一方悪とは、無知と真直ぐな論理に従わない働き以外の何物でもないということを思い巡らし、常にすべてに関して神に感謝を捧げる。それは、正しき聴覚と神的な読解力、真なる探究、聖なる献げもの、幸いなる祈りを通じて、誉め、讃え、祝福し、音楽を奏でることによって行われる。このような靈魂はいかなる時にも決して神から引き離されることがない。次のように語られるのはいとも相応しい。〈主に信頼する者は真理を理解し、信篤き者たちは愛のうちに主に留まる〉(知恵3,9)。覚知者たちに関して、知恵がどのようなものとして論じられているか、お分かりになったであろうか。114.1) さらに類比的に、その住まいとは、信徒たちの尊さに応じて多様である。ソロモンはこう言っている。〈彼には信仰の選ばれた恵みと、主の神殿内での、より榮譽ある役職が与えられるであろう〉(知恵3,14)。ここでの比較級は、神の神殿すなわち全教会における、より低い役職の存在を示している。だが最上級をも想起すべきである。それは主である。3) 福音書における数字は、これら三つの住まいが選ばれたものであることを暗示している。すなわちそれは、30倍、60倍そして100倍という数字である。4) まず、主の像に従って〈まったき人間にまで〉(エフェソ4,13) 到達した人々の完全な嗣業、それから似姿ではあるが、ある人々のように、人間的な尺度(この伝承は不敬なものである)にはよらないもの、5) そして徳にもよらず、第一の原因に照らしてのものでもないものがある。このような伝承も不敬である。なぜなら人間と全能の神の徳が、同じであると前提しているからである。預言者は言う。〈あなたは、わたしがあなたに似た者であると決めてかかっている〉(詩篇49,21)。だが〈弟子にとっては、師のようになるだけで充分である〉(マタイ10,25)と師は語っている。6) かくして、神に対する似像性を通じて、神の子の地位に、その友の立場に配された者は、嗣業の共通性によって「主たち」また「神々」の一員となる。それは、主自らが教えているとおり、彼が福音に従ってまったき者とされた場合である。

## XV. 覚智者と聖書：観想

115.1) さて覚知者は、より親しき似像性、すなわち師の心を刻み込まれる。それはかの師が思いを致し、節度と賢慮ある者たちに命じ勧告したものである。これを、教えを授けた方が望んだ通りに理解し、自ら寛容な想念を抱き取り、

教えるに際しては、高く築かれる能力を持つ人々に対し、特に留意して<屋根の上で>（マタイ 10,27）教えを授け、まずは語られることのエネルギーを、生き方の軌範に照らして吟味するのである。2）というのも主は可能な事柄を命じたのであって、王的でキリスト的な者は、真に統御的で主導的でなければならない。なぜならわれわれは、外的な獣性だけでなく、われわれ自身のうちにある野卑な情動をも制するように定められているからである。3）したがって覚知者は、おそらくは悪しき生・善き生に対する気遣いによって救われるのであろう。それは<律法学者やファリサイ人たちに優って>（マタイ 5,20）理解力と活動力がなければならないとの意味でもある。4）ダビデは記している。<雄々しく、栄えてあれ、王たれ。真理と柔和さと正義のために。あなたの右の手は、あなたを驚くべき仕方で導くであろう>（詩篇 44,5）。ここで「あなたの右の手」とは主の意味である。5）かくして<どの知者が、これらの事どもを理解するであろうか？ 理解力あるものがこれらの事どもをも覚知するだろうか？ 何ゆえに主の道が真っ直ぐであるのかを>（ルカ 14,10）と預言者は言っているが、これは、ただ覚知者のみが、隠されたかたちで聖霊によって語られた事どもを想い巡らし、明らかにすることができるということを表している。6）そして<理解ある者は、時宜を逸することなく沈黙を守る>（アモス 5,13）と聖書は述べている。これはすなわち、彼が相応しくない者に対して口外することを慎むとの意である。なぜなら主はこう述べているからである。<聞く耳を持つ者は聞くがよい>（マタイ 11,15）。すなわちここで述べられているのは、耳を傾けたり理解したりできるのは万人のなせる業ではない、ということなのである。116.1）実に、ダビデも次のように記している。<闇のような水が大気の雲のうちにある、はるかかなたより彼の前に雲が到来し、あられと火の炭が降る>（詩篇 17,12 以下）。すなわちここで彼は、聖なる御言葉が隠されているということを知っている。2）さらに彼が告げるのは、覚知者たちには、浄らかで澄み切った御言葉があたかも害のないあられの如くに遣わされるが、多くの者どもには、あたかも火の中から取り出された炭の如くに、闇に満ちた言葉が遣わされ、その闇に満ちた言葉は、もし誰も点火し灯を点してくれなければ、輝くことも光を放つこともないだろう、ということである。3）そこで彼はこう述べる。<主はわたしに、覚知を得るための教養の舌を授けた>（イザヤ 50,4 以下）、すなわち、<いつ言葉を語るべきか>、その時宜にかなって、ということである。それは証しに際してのみならず、問かけや返答に際してもである。そして<主の教養はわたしの口を開く>と語られる。実に、言葉を、

いつ、どのように、誰に対して用いるべきかを知っていることは、覚知者の業である。117.1) すでに使徒は<世を支配する霊に従い、キリストに従うのではない> (コリ2,8) と語り、ギリシアの教えが初歩的なものであること、キリストの教えこそ完全なものであることを伝えている。これはすでに、われわれが以前に告げた事柄である (『ストロテイス』 6.8.62.1 以下)。

2) さて、野生のオリーブはオリーブの豊かさのために接ぎ木され、栽培オリーブと同じように育てられる。つまり挿入されるほうの木は、大地の代わりに、土台となる木を持つことになるのである。3) しかるにすべての植物は、神的な命により芽吹く。したがってもし野生オリーブが自然界のものであっても、オリュンピア競技祭の勝利者の頭を飾り、また榆の木がブドウの木を高みに差し挙げれば実りが豊かになるということを教える。4) すでにわれわれは、野生種のほうが、栽培種よりも、豊かな滋養を獲得するということを知っている。それは、料理に供され得ないためである。野生のものは、人の手が加わったものよりも消化されにくい、野生であることの原因がそもそも、消化される力の欠如にある。118.1) したがって接ぎ木されたオリーブは、野生に育ったという理由のために、より多くの滋養を取り込んでいる。ちょうど、このオリーブが滋養をよく消化するように習慣づけられて、人の手が加わったものの肥沃さにまで等しくされると同じように、哲学者もまた、野生のオリーブになぞらえられる。彼は、消化していないものを大量に所持しているが、探究的であり随順的で、真理の豊かさを希求する性格である。したがってもし、信仰によって神的な力をさらに得た場合には、有用で慣らされた覚知へと接ぎ木されるならば、野生のオリーブが真なる美と憐れみ深い御言葉に接ぎ木されるとき、ちょうど伝承されてきた滋養を消化し、美しいオリーブと化すであろう。というのも接ぎ木は無用のものを良質のものに変容させ、不毛のものが肥沃なものとなるように、農耕術と覚知的知識でもって強いるからである。

119.1) さて、接ぎ木の方法には四通りがあると言われている。まず一つ目は、木と樹皮の間に接ぎ木するものを調和させるというやり方である。これは異邦人からの素人が、表面から御言葉を受け入れる際の教え方である。2) 二番目は、木を割き、上質の植物を挿入するというやり方である。これは哲学した者たちに際して行われる方法である。なぜなら、彼らの教説が細断された上で真理の認識が生じるからである。つまり、ユダヤ人たちの以前の書き物が異化された上で、新たな上質のオリーブが接ぎ木されるというような方法である。3) 三番目は、野生種の接ぎ木であって、異端的なものを強制的に真理に

移し変え、接着させるやり方である。つまり双方を鋭い鎌でくさび状に削ぎ落とし、髓の部分に露わにするものの引っ張り出すことはせず、互いつなぎ合わせるのである。4) 接ぎ木の四番目の方法は、いわゆる「芽出し」と呼ばれているやり方である。これは上質の幹から芽を剥ぎ取り、樹皮の手のひらほどの大きさ分を円環状に刈り込んで、幹のうち円環部と同じだけの芽の分を掻き落とし、ぐるりと縛って泥を塗ったものを挿入するやり方である。こうすると、目は情動を被ることなく汚されぬまま守られることになる。この種類は、事柄を見抜くことのできる覚知的な教えに属する。言うまでもなくこの種のもは、柔弱な木に特に有用な方法である。

120.1) さて、使徒によって語られた「植え込み」というものは、果樹園のオリーブに行われうる。ここで果樹園のオリーブとはキリストその人のことであり、野性で不信仰な本性がキリストに向けて植え替えられ、キリストに信を置く人々となることである。だがより優れているのは、各人の信仰が靈魂そのものに接ぎ木されることである。2) というのも聖霊はこのような仕方では、各々の個性に応じて無限に分かたれ、植え替えられるからである。3) 一方ソロモンは、覚知について論じつつ、次のように述べている。〈知恵は輝かしく、朽ちることがない。知恵を愛する人には進んで自らを現す。求める人には自ら進んで姿を見せる。知恵を求めて早起きする人は、苦勞しない。知恵に想いを馳せることは最も賢いこと、知恵を思って目を覚ましていれば、心配もすぐに消える。知恵は自らに相応しい人を求めて巡り歩く〉(知恵6,12-16)。(というのも「すべての人に覚知が備わっているわけではない」(1コリ2,7)からである)。(知恵は道でその人たちに優しく姿を表す〉(知恵6,17)。ここで「道」とは生き方のことであり、契約をめぐる多様性の意味である。121.1) さらにソロモンはこう付言する。〈そして知恵は、深い思いやりの心で彼らと出会う〉(知恵6,16)。すなわち知恵は多彩な姿で、つまり言うまでもなくあらゆる教養を通じてその姿を現す。2) しかる後ソロモンは、最も完全な愛を添えて提示した上で、三段論法的(syllogistikos)な論理と真なる言辞を通じて明証される真なる付加句を導入し付言するのである。〈知恵の始まりは、教養(すなわち覚知)を求めるいとも真実なる欲求〉(知恵6,17)。〈教訓への配慮は愛、愛は知恵の掟の遵守、掟の墨守は不滅性の保証、不滅性は神に近くあることをもたらす。知恵に対する欲求は人を御国へと導く〉(知恵6,18-20)。3) つまり思うに彼が教えているのは、真の教養とはいわば覚知に対する欲求であり、教養の鍛錬は覚知への愛を通じて成立するのであり、愛とは覚知へと導く

であろう掟に対する墨守であり、掟の墨守とは掟の確実な遵守であり、それを通して不滅性が生起し、不滅性は神の近くにあることを可能にする、ということである。もし覚知への愛が人を不滅なる存在とし、この王的なる者を神の王国に近く導き昇るのであれば、覚知を発見すべく探究することが不可欠である。

4) しかるに探究とは把捉への衝動であり、何らかのしるしを通じ、その根底にあるもの (hypokeimenon) を発見することである。この発見とは把捉のうちに成立する探究の終結と休息である。これこそが覚知であり、それこそまさしく発見であって、それは探究の把捉のうちに存するものである。そのしるしは、先行し・共在し・相伴う、と言われている。

122.1) かくして、神をめぐる探究をめぐり、その発見とは子を通しての教えである。一方、われわれにとっての救い主が、かの神の子その方であるということのしるしとは、子の来臨に先立って行われた預言がこの方を告げていること、および感覺的世界への誕生に相伴ったこの方を巡る証言、さらには、この方の昇天 (analepsis) の後に告げられ明らかなたちで示されたこの方の力である。2) 従って、われわれの許に真理が存在するということのしるしは、神の子自らが教えたということなのである。というのも、すべての探究に関して普遍的な側面として、人物と事柄ということが見出されるならば、真なる真理はわれわれだけに示される。なぜなら示される真理に関して、その人物は神の子であるし、その事柄は信仰の力だからである。この力は、何であれすべてが逆らおうとも、世全体が立ちはだかろうとも、そこに充溢するものである。3) このことに関しては、永遠の業と言葉において確証されるということが同意され、かつこれは矯正の類であることが明らかとなったのであるから、先慮が存在するということを否定する者はすべて、論駁するにも値せずかつ不敬である。そこでわれわれにとって問題となるのは、何を為せば、またどのように生きれば、全能の神の認識に至るのか、そして神的なるものをどのように崇敬すればわれわれが救いのための責任者となりうるのか、ということである。その際にわれわれは、ソフィストたちからではなく、神自身から覚知を得、神に喜ばれる事柄を学び取り、正しく敬虔なることを実行することを手がけよう。4) われわれが救われることは神の御心に適ったことなのであり、救いとは、善行そして覚知によって成立し、これら両者にとって主が師なのである。

123.1) したがってプラトンによれば (プラトン『ティマイオス』40DE)、真理を学び尽くすことは、神から、もしくは神の後裔なる人々からにおいてのみ可能なのであるが、われわれは相応しくも、神的な言葉から証言を集め、神の子を通して

て真理を学びつくしていると高らかに誇ろう。その言葉とは、まずは預言者によって伝えられ、しかる後明証されたものである。もっとも真理の発見のために協働する事柄は、それ自体として不面目なものではない。2) かくして哲学は、神の先慮とともに幸福な生という返報、および悪霊に憑かれた生という懲罰を告げ、神学的な語りを展開して理解を促す。だが正確を期すべき、ないし部分にわたる事柄については、なお漏れなく尽くすことがない。なぜなら哲学は、神の子に関しても、先慮に基づく経緯についても、われわれと同じように取り扱うことはないからである。というのも哲学者は、神にならった信心というものを知らないためである。3) それ故異邦の哲学に基づいた教派は、たとえ一なる神そしてキリストを讃えているとしても、それは真理に照らしてではなく、一般的把握 (perilēpsis) にしたがって語っているに過ぎない。彼らは別の神を見出し、預言者たちが伝えたのとは異なる仕方キリストを受け入れる。だが彼らによって教説化された事柄の虚偽は、真理に照らしての生の規準に対立する限り、我々の教説とは相容れぬものである。124.1) もとよりパウロはテモテに割礼を施したが、これはユダヤ人信徒たちのためであった。つまり律法に由来するより肉的な規定をもシテモテが破ったならば、律法から手ほどぎを受けた人々が信仰から離れてしまうのではないかという危惧があったためである。その際パウロは、割礼の儀そのものが義化の働きをするわけではないということを見抜いていた (1コリント7,19)。というのもパウロは、すべての人のためにすべてとなったということ認めているが (1コリント9,22)、すべての人を獲得するためには、割礼によって教説の主要な部分をクリアしておく必要があると踏んだのである。2) 一方ダニエルもペルシア人の王の前で首飾りを懸けたが (ダニエル5,7)、これは民が艱難に遭うのを看過できなかったためである。3) したがって、真に偽っているのは、救いの経緯のために割礼を施している人々でも、何らか部分的な事柄のために躓いている人々でもなく、むしろ肝心な事柄に関して躓かせ、主を、それらに関わることにに関してないがしろにする人々である。彼らは主による真の教えを拒み、神と主の尊厳に従わずに聖書を語り、伝えているのである。4) というのも主の教えに従い主の使徒たちに従って、神を畏れる伝承を理解し修練に励むことは、神によって与えられた保証なのである。5) <だがあなた方は、耳で聞いたことを> (すなわち神秘のうちに隠されたかたちで、の意である。そのようなことは耳に語りかけられる際に比喩的な言い回しを用いるからである)、<屋根の上で告げ知らせよ> (マタイ10,27)。すなわちこれは、寛容な心で受け取り、大いに崇敬して伝え、



真理の規準に照らして聖書を明らかにせよ、との意なのである。6) というのも預言も救い主自身も、誰にでも理解しやすいかたちで単純に神的な神秘を告げ知らせたわけではなく、比喩のかたちで述べたからである。125.1) 実に使徒たちは主に関して、〈すべてを比喩のかたちで話し、比喩なしに彼らに話すことは一度もなかった〉(マタイ13,34)と述べている。2) もしくすべてが彼によって成り、彼なしに成ったものは一つもなかった〉(ヨハネ1,3)のだとすれば、預言や律法も彼を通して成り、彼を通して比喩のかたちで語ったということになる。ただ聖書はくすべては理解する者たちの前に真直ぐである〉(箴言8,9)と述べる。この人々とはすなわち、主によって明らかにされた聖書の解釈を、教会の規準に照らして受け入れ、遵守する人々の意である。3) そして教会の規準とは、律法および預言者たちが、主の来臨によって伝えられた掟と相和し調和するということである。4) 賢慮は覚知に伴い、節制は賢慮に伴う。賢慮とは神的な覚知であり、進化された人々のうちに存するのに対し、節制とは死すべきもので、哲学する人々のうちに存し、決して知者のうちにはない、と銘記しておこう。5) かくして、もし徳が神的なものであれば、徳のひとつである覚知もまた神的である。節制とは不完全な賢慮であり、賢慮を志向しつつ、労苦を伴ってその働きを為すものであり、観想的なものではない。それはちょうど正義と同様のものであって、それは人間的で共通なものではあるが、敬虔すなわち神的な正義に従うものなのである。6) なぜなら、正義はまったき人において存するが政治的な約定や法的な禁令のうちに成立するものではなく、むしろ個人の行為と神に対する愛から生起するものだからである。

126.1) かくして聖書は、数多くの理由からその意図を隠している。それはまず、われわれが探究者たるためであり、また常に救いの言葉の発見のために目覚めているためである。次いで、思惟するということがすべての人々に適うことではないという理由による。それは、聖霊によって救いのために語られた事柄を異なった意味に受け取って、そこなうことのないように、という意向による。2) それゆえ、選ばれた人々、そして信仰から覚知への進捗が認められた人々によって守られた預言の聖なる神秘は、比喩のうちに隠されているのである。3) なぜなら聖書の性格は比喩的なものであり、それゆえに主も、世に属す者ではないにもかかわらず、世に属す者として人間たちの間に到来したためである。それゆえ主はあらゆる徳を担い、世にあって育つ人間を、思惟的で主に適うものへと覚知を通じて上昇させ、世から世へと導こうと考えたのである。4) かくして主は、隠喩に満ちた書き物をも用いた。比喩はこの種のもの

であって、それは主自身ではないが、主に似た者の言葉である。これは理解力のある者を真理と主に適うものへと導く。あるいはある人々の言うように、他の言い回しを通じて主に適う仕方でも語られた事柄を、力強さをもって提示する言い回しである。127.1) すでに経綸はすべて、真理を認識していない者たちには、まさしく主をめぐる預言された比喩であるように思われる。そして誰かが、万物を創造した神の子が肉を摂り、処女なる母のうちに宿り、その感覚可能な肉が生まれるとともに、その結果として、肉が成ったと同じように、主が苦しみを受け復活した、と言ったり聞いたりした場合、使徒の言うように「ユダヤ人にとっては躓きであり、ギリシア人にとっては愚かしい限りである」（1コリント1,23）ということになるのである。2) こうして聖書が開けられ、耳を持つ者たちに、主が摂った肉が苦しみを受けたと真理を明らかにし、  
「神の力と知恵とを」（1コリント1,24）告げ知らせるのである。3) 総じて、聖書の比喩的な相貌は、すでに提示したように極めて古くに遡るものであり、相応しくも預言者たちの間にとりわけ豊かに宿っている。それは実に、ギリシア人の許の哲学者たちや、他の異邦人の許の知者たちが、起こりうべき主の来臨と彼によって伝えられるであろう神秘的な教えを知らなかったということを聖霊が明らかに示すためであった。4) かくして相応しくも預言は主を告げ知らせ、多くの人々の予測に反して語ることで、誰かを誹謗しているように思われぬように、意味する事柄を、他の想念にも転換可能な声でもって形作ったのである。5) まさしく預言者たちはすべて、主の来臨とともに聖なる神秘を告げ知らせたが、迫害され、殺されるに至った。それはさながら、主自身が彼らの書物を明らかにし、また主の弟子たちが御言葉を告げ知らせたことで、主の後、主と同じように生をなげうったのと同様であった。128.1) ここから、ペトロもまた『ペトロの宣教』の中で、使徒たちに関して次のように述べている。「われわれは、手にしている預言者たちの書をひもとく。するとあるものは譬えにより、あるものは謎めいた言い方により、またあるものは迂回せずに正面からキリスト・イエスの名を挙げています。そこにわれわれは、主の来臨と死、十字架、その他彼に対してユダヤ人たちが行ったあらゆる懲らしめ、さらには復活、エルサレムが占領される前の主の昇天を見出す。そこに、主が被らねばならなかったとおりに、またその後起こらねばならなかったとおりに、事柄が記されているためである。われわれはそれを理解して、神を信ずるに至るが、それは神に向けてそこに記されている事柄を通じてである」（『ペトロの宣教』断片9）。3) さらにその少し後で再び、神秘的な先慮によって預言が成立したことを明らかに

にしつつ、こう付言している。「われわれは、神がこれらのことを真に命じたということを知っている。われわれは、聖書から離れては何も語っていない」(『パトの宣教』断片 10)。

129.1) かくして、ヘブライ人たちの言語は、さまざまな特性を有している。そのあり方は、それ以外の言語がそれぞれ固有の特質を有し、民族的な特質を強調するようなある種のロゴスを包含しているのと同様である。実に、語りの言い回し (lexis) とは、民族固有の文字によってもたらされるものと定義される。2) しかしながら預言とは、必ずしもそのような方言によって知られるものではない。というのもギリシア的な特別のやり方によって、いわゆる言い回しの変化 (exallagē) は、われわれの許での預言に倣って、隠蔽を行っている。これは、まっすぐな言い方に対して、韻律にのっとり、あるいは即興的な言い回しで生ずる、意図的な逸脱によって示される言い方のほかに投入されるものである。3) かくして表現 (tropos) とは、主により主ならざるものに向けて、構成上の理由により、またロゴスのうちなる句の有用性のために添えて記される言い回しなのである。4) しかるに預言は、言い回しに関係する構造に全面的に関わるわけではない。それは句の美しさといった理由による。しかしその一方で、万物のうちに真理が備わっているわけではないということを、さまざまな仕方で隠す。ただ覚知のために耳目を閉ざす者たち、愛を通じて真理を探究する人々たちに対し、光は差し昇る。130.1) こうしてまず「格言」が、異邦の哲学によれば預言の一種だと言われ、これに加えて「譬え」あるいは「謎めいた言い方」が同様のものだと言われる。そればかりでなく「知恵」も同種に扱われ、その異種として「教養」、あるいは「賢慮の言葉」「捻った言葉」また「真なる正義」とも呼ばれる。さらには「判断を正す教え」、「不正ならざる者たちにとってのジャック・カード」とも言われるが、これは教養に照らして成立するためである。また新たに教えを受ける者にとっての「感覚と思慮」ともなる(箴言 1,1-6)。2) ソロモンは述べる。<これらの預言者の言葉に耳を傾ける者は、知者であればいっそう知恵に満ち、思慮深い者であればその思慮の操縦術を獲得し、譬えや暗喩、知者の語句、謎めいた言い方を思いつくことになるだろう>。3) もしゼウスの子であり、呼び名としてはデウカリオンとされるヘレンからギリシア語 (Hellenikos) という呼び名が起こったとすれば、われわれはそれに先立って成立したのであるから、何世代ほど、ヘブライ語よりもギリシア語のほうが遅れた言語であるか、容易に理解することができよう。

131.1) さて、記述が進むにしたがって、預言者によって語られた表現を、各々の聖書箇所にも照らして意味づけ提示してみたいと考える。その際、真理の規準に基づいた覚知に満ちたその方法を、工夫しながら示してゆきたい。2) というのもいったい、ヘルマスへの幻影の中で、「力」は教会の姿をとって現れ、選ばれた者たちに告げ知らせられるように望む書物を、写させるために手渡しているのではないか。この書物は「文字通りに」書き写されたと言われ、音節がどこで終わっているのかを見出すことはできなかつたとされる。3) すなわちここでは、この書物が明らかに、純粹に万人に「読まれる」かたちで受け取られたものだということが明らかにされているのである。そしてその際、信仰は文字要因の順序にまで及ぶものであるから、文字にのっとつての「読み」がほのめかされているのである。しかるに覚知に満ちた仕方でのこの書のひとときに関しては、信仰はすでにこれを進めているわけであるが、音節にしたがっての読みになぞらえられるようにとわれわれは受け取っている。4) しかしながら預言者のイザヤは、ある新しい書物を受け取って書き記すようにと命じられている。すなわち、諸書の解釈のために、聖なる覚知が後になつてもたらされるであろう、ということをも霊が預言しているのである（イザヤ8,1）。それは、その頃まだ知られていなかったために、未だ書き記されていなかったのである。つまり初めに、思慮ある人々だけに語られる、とされたためである。5) 救い主が使徒たちに教えを授けて初めて、書き記された伝承が、もはや文字によらないものとなり、われわれに伝えられることになった。書の刷新とともに、新しい心に神の力によって書き込まれるものとなつたのである。

132.1) このようにして、ギリシア人たちの中で最も論理的に思考する人々は、「解釈」という語彙がヘルメネイアであるところから「言葉」であるとされているヘルメスのために、ザクロの実を奉納した。なぜなら言葉は多くを隠すからである。2) モーセは相応しくも二様に受け取ることができるということを、ヌンの子ヨシュアはよく知っていた。それは天使とともにあるモーセと、山頂の洞穴の傍らで守られるに値するモーセである。3) しかるにヨシュアはこの光景を、下界にありながらカレブとともに霊によって挙げられ（民数13,6以下）、目にしたのであった。ただ二人の見方は同様ではなく、一方は大きな重荷を背負って早々に降りてきたのに対し、もう一方は下山した後、自らが目にした栄光を記述することになった。つまりもう一方の者よりも仔細に見聞する能力に恵まれていたのである。それは彼がより浄らかであったためである（ヨセフ『ユダヤ古代誌』4.8.48）。思うにこの物語は、すべての者に覚知が備わって

いるのではないことを示している。なぜなら、ある者たちは聖書の身体部、すなわち言い回しや名に目をやるが、これはいわばモーセの身体に相当する。一方ある者たちは名によって明らかにされた事柄に目を注ぎ、天使たちとともにあるモーセのことを論ずるのである。4) 言うまでもなく、主の名を呼ばれる者たちの中でも、ある人々は<ダビデの子よ、わたしを憐れんでください> (マコ10,48) と言うが、少数の者は神の子を認識する。たとえばペトロの場合がそうである。彼のことを主も幸いなる者としているが、それは彼の肉や血ではなく、むしろ天におられる彼の父が真理を明らかにしたためである。すなわちこれは、覚知者が、宿された彼の肉を通じてではなく、むしろ父の力そのものを通じて全能の方の子を覚知するということを明らかにしているのである。5) かくして行き当たりばつたりの人々にとって、このように真理の獲得が端的に困難だということだけでなく、それに適った人にとって知識は固有のものであり、観想の恵みは人々に直ちに与えられるわけではないということ、モーセをめぐる物語は教えている。それはすなわち、たとえばユダヤ人たちがモーセの栄光を目の当たりにするに適い (出エジプト34,30)、イスラエルの聖なる人々が天使たちの顕現を目にするに適ったように (ダニエル10,7以下)、われわれもまた、真理の宝石に眼を注ぐことができるようになるためである。

## XVI. 前章で語られた神秘的知性の凡例が、 十戒の神秘的解説のうちに示される。十戒の解釈。

133.1) さてわれわれにとっての覚知的な明晰さを概観する際に、その軌範として十戒を掲げることにしよう。十という数字が神聖であることに関しては、いまここで述べるのは余計であろう。そしてもし記された書板が<神の業> (出エジプト32,16) であるとすれば、それは自然本性に適った製作であるということ、これを明らかにするものである。なぜなら神の指とは神の力だと考えられるためであり、その力によって天と地の創造が完遂されたのであり、書板はこの天地双方の象徴であると考えられる。2) つまり神の書き物と筆跡が石版のなかに収められていることは、世界の創造だからである。3) しかるに十の言葉は、まず天界の像としては、太陽、月、星、雲、光、風、水、大気、闇、火を包括する。これらが天の本性的十戒である。4) 一方大地の像としては、人間、家畜、爬虫類、野獣、水に棲む魚と鯨類、また空飛ぶものの中から肉食系のものと草食系のもの、そして植物のうちから実りをもたらずものともたらさない

ものである。これらが大地の本性的十戒である。5) またこれらを包含する櫃は、神的ならびに人間的な事柄の覚知そして叡智であろう。そして二枚の石版は、おそらく二つの契約から成る預言であろう。134.1) したがってこれらは、無知と罪の増大に伴い、神秘的な仕方で刷新された。思われるに、掟は二つの霊によって二通りの仕方ですべて記されている。それは主導的なあり方とこれに従属するあり方である。なぜなら<肉は霊に反して欲情し、霊は肉の思いに反する> (ガラテヤ5,17) ためである。2) しかるにこの10という数字は、人間自身にも関わる。すなわち5つの感覚器官と、音声器官と生殖器官、それに第8のものとして創案に関する霊的部分、第9番目に靈魂の主導的部分、そして第10番目は、信仰によって付け加わる聖霊の刻印を受ける特性である。3) さらに、これら10個のいわば人間的な部位に対して、律法が付与しているように思えることは、視覚・聴覚・臭覚・触覚・味覚、そしてこれらに付随する働きの器官が二手に分かれ、各々手と足とに関わる点である。それこそ人間の構造なのだから。135.1) しかるに靈魂が肉体に導入され、さらに加えてその主導的部分が導入されてわれわれはそこで理性的思考を行うが、この部分は種が蒔かれた際に生まれたものではない。それはこの部分を抜きにしても10という数字が満たされるためである。これらの10個を通じて人間の働きすべてが完遂される。というのも人間は姿勢において真直ぐであることにより、諸々の情動から生きるための端緒を得るからである。2) というわけで理性的部分と主導的部分は、生ける者にとって存立の原因であるが、そればかりでなく、非理性的部分が冷め、人間存立の一部となるための原因でもあるとわれわれは主張する。3) すなわち、生きるための能力は、それによって成長や発育、総じては運動の能力が包括されるものであるが、霊が肉のなものとして獲得しており、非常に鋭敏な運動をなすものである。これは感覚ならびに肉体の他の部分を通じて至るところに進み行き、肉体を通じてまず情動を被るからである。4) しかるに主導的部分は選択的な能力を有しており、探究・学習・覚知はこの能力をめぐるものである。そればかりでなく、すべての関係性はこの主導的部分へと一つに統合されている。何のために、どのようにして人間が生きるのか、ということもそうである。136.1) じつに、身体的な霊を通じて人間は感覚し、欲求し、喜びをなし、怒り、育まれ、成長する。実に人間は、この身体的な例を通じ、想念および思惟に従って行動へと向かう。そして彼が欲情に関わることを制するときには、主導的な部分が王的な役割を果たすのである。2) かくして<欲情してはならない> (出エジプト20,17) と述べられる際、それはあなたが、肉

的な靈に隷属するのではなく、むしろこれを支配せよ、との意味である。なぜなら<肉は靈に反して欲情し> (ガラテヤ5,17以下)、本性に反するまでに蜂起しては制御を超えるからである。一方<靈は肉に反し>ながらも、人間の本性に従って生活様式を制する。3) したがって人間が<神の像に倣って> (創世1,26) 成った、と語られるのはいとも相応しい。その姿が、構造的な事柄に照らしてのものではなく、神がロゴスをもってすべてを創造し、人間がロゴスによって覚知的な者となるとき、麗しき行為を成就するであろうからである。4) したがって二枚の石版は、創られたものと主導的な部分という二つの靈によって与えられた掟、すなわち律法以前に伝えられた掟を告げるものであると他処(134,1)で述べたのは、まず理に適っているであろう。5)そして諸感覚の運動は、思惟によって刻印されるとともに、身体に発するエネルギーを明らかにするのである。なぜならこれら兩者によって、把握が成立するからである。(137,1)さらに、感覚が感覚世界に関わるように、思惟は思惟世界に関わる。行為も二重であり、方や思惟に関わり、方やエネルギーに関わるのである。

2) さて、十戒の第一の掟は、全能の神が唯一なる方であることを提起する。この方はエジプトから民を、砂漠を通して祖国の地へと移住させた。それは人々が、神の働きを通じ可能な限りにおいて、神の力を知らんがためであった。そして人々が、創られたものに対する偶像崇拜から離れ、すべての望みを、真理に照らして神に置くようにさせるためであった。3) 次に第二の掟は、神の偉大なる力を、捉えようとすべきではないし掲げ示すこともしてはならないと告げるものである(神のこの力とは、その名である。なぜならその名だけは、現在でもなお多くの者が、学ぶことのできるものだからである)。この方の呼び名を、創られたものや、人間たちの内の技術者たちが作り、そこに「在る方」(出エジプト3,14)の住まない虚無なるものに転じてはならない、と告げるものである。なぜならただ「在る方」その方のみが、創られたのでない同一性のうちにおられるからである。4)そして第三の掟は、神によって世界が創られ、神がわれわれに七日目を、生活上の悪しき情動からの休日として与えたということ告げるものである。なぜなら神は疲れを知らず、情動を被らず、欠けたところもない方であるのに対して、われわれ肉をまとえる者どもは休息を必要とするからである。138.1) 第七の日(ヘブドマス)とは<休らい>と名づけられているものであり、悪からの離脱によって原初の日、われわれにとっての真なる休息を準備するための日である。この日は、真に光の誕生する最初の日でもあって、この光のうちにすべてが観想のうちに置かれ(syntheōreitai),

すべてが受け継がれる。2) この日からわれわれの許に第一の知恵、覚知が輝く。なぜなら真理の光とは、影なき真なる光、信を通して聖化された人々に及ぶ分かたれぬ主の息吹、諸事物の認識のための灯火の働きを担うものだからである。この光は諸事物の認識 (epignōsis) のための灯の役割を果たす。3) かくしてわれわれは、この光に従うとき、その生涯を通じて情動を被ることのない者となる。これが<休らい>である。4) それゆえにソロモンもまた、天や地、すべての存在物に先立って、全能者の許に智慧があったと述べているのであり(箴言8,22)、この智慧の分有(可能態において、の意であって、本質的にと言っているのではない)が、神的ならびに人間的な事どもの知的把握であるということを見せているのである。5) かくして副次的に、この域に至った人々は、次の事柄をも心に留めておくべきである。それはこの論述が、第7そして第8をも過ぎ行くということである。というのも第8であるということは、勝義的に第7でもあり得る。第7であることは、明らかに第6でもある。それは完全に安息の日であり、第7とは仕事に定められている日である。6) なぜなら天地創造は6日間のうちに限界づけられたのであって、太陽の、あるあり方から別のあり方への運動は6ヶ月間のうちに完結し、それに従って葉が繁ったり枯れたりし、植物は芽吹き種子の成熟も行われるからである。139.1) さて一説によれば、人の胚も正確には6ヶ月、すなわち182日で形成されると言われている。これは医師のポリュボスが『8ヶ月について』の中で、また哲学者のアリストテレスが『自然学』(アリストテレス、断片282ロズ第3版)において述べていることである。2) 思うにピュタゴラスもここから、預言者にしたがい世界の誕生に基づいて、6を完全数と考えたのであろう。彼はこの数を「中直数」(meseuthys) と呼び、直数である10と2の間にあることから、この二つの数の婚姻であると考えた。双方から等しい距離だけ離れていることにもよるだろう。3) 婚姻とは、男性と女性から発するものであるが、ちょうどそれと同じように6も、男性と呼ばれる奇数の3と、女性と考えられている偶数の2から生み出される。2×3は6だからである。4) ちなみに、最も生産力の強い運動、それによってすべての誕生—上・下、右・左、前・後—がもたらされる運動は、この大きさなのである。

140.1) さて人々は、7が「母もなく」「子もない」数字であると考えるが、これは理に適っている。彼らは土曜日について、これが休らいのあり方を比喩的に述べたものと解釈している。この休らいにあってはくもはや娶ることも嫁ぐこともない>(マタイ22,30)と言われる。すなわち何らかの数と何らかの数を



掛けても7は生じないし、10以下のある数を掛け合せても7にはならない。2) 一方8について、人はこれを「立法数」と呼ぶ。これは、7つの惑星に恒星天を加えた場合にできる数である。これらを通り、いわば約束された報いの周期でもあるかの如くに、大きな一年の巡回が成立する。3) これに従って主は4日目に山に登り(マタイ17,1-5)、6日目には靈的な光に輝き、彼から、見ることができるように選ばれた人々だけに対して力を顕わにし、7の声を通じて神の子であることを告げた。これは、彼に信を置く人々が安らぎを得ることができるためであり、一方6で表される誕生によって徴を帯びた者が、8である方として、肉を帯びた神の力を明らかにし、人間として数えられながらも、自らが何者であるかを隠しつつ、顕現することができるためである。4) というのも、6という数字もまた、数字の列の中に数え上げられるが、諸要素の連関は、記されることのないものを、しるしあるものとして認識するからである。141.1) その際、この数字そのものを通して、その順序に従い、各々の単位は第7ヘブドマス・第8オグドアスへと進む間に救われる。一方数字としての文字から言えば、ゼータは第6番目であり、上に傍線の付いたエータは第7番目となる。どうしてもだかは分からないが、記号(「6文字」= Iesous)が文字列の中に紛れ込んでいるため、もしこのとおりに従えば、第7ヘブドマスは第6番目、第8オグドアスは第7番目となる。3) それゆえ人間は第6の日に創造されたと語られ(創世1,26)、かの6文字によって信篤き者となり、まさしく主の嗣業としての安らいを得ることになるのである。4) 救いの経綸に関わる「第6時」というのも何かこのような事柄を明らかにしている(マタイ27,45)。すなわち、この時間に人間が完成されたのである。5) 実に、8つの事物の中間(すき間)は7つであり、7つの物の間隔は6であると映る。6) 次のような理解はまた別様のものである。すなわち一説によれば、第7ヘブドマスは第8オグドアスに栄光を帰し、<天は天に>神の栄光を<告げる>(詩篇18,2)という。それらのものの感覚しうる型が、われわれの許で発語される字母だというのである。7) かくして主自身も<アルファでありオメガであって、初まりであり終わりである>(黙示録21,6)と語られ、<この方を通じてすべてが成り、この方なくして成ったものは一つもない>(ヨハネ1,3)とされる。したがって、ある人々が神の休息に関して仮説を唱えているような形で、神が創造行為を行いながら休息を摂ったのではない。なぜなら神は善き方であり、もし善行を為しながら休息を摂ったのであれば、神であることを止めたことになるが、それは口にするのも許されぬことである。142.1) かくしてここで休息を摂るということは、

創られる事物の順序が、いかなるときにも違反なく守られるように定めるということであるし、被造物のいにしえの無秩序の各々を止めるということでもある。2) というのも幾多の日々にわたっての創造というものは、その最大の帰結として、先に生成したのから尊敬をまず得て、すべてのものがその後順序良く成立してゆく中で、目的とともに創造されるにしても、すべてのものが同一の尊さのうちに成るわけではない。また創造が語られる際に、各々のものの誕生がいつときに創られたということが表現されて明らかにされるわけではない。なぜなら何かの名をまず挙げねばならないからである。3) 実にこのために、まず何ができたか、二番目に何ができたかが預言書の中で語られるにしても、実は万物が同時に、一つの実体から一つの力によって成ったのである。なぜなら思うに、神の意向とは一つであり、一なる同一性のうちにあるからである。4) どうして創造が時間の中で行われることがありえただろうか、諸存在物とともに時間も成立したのであるから。

いまや、生きて活動するものどもおよび生まれて来るものどものすべてよりなる全宇宙は、7を周期として回転している。143.1) 「7」とは、最大の力を持つて天使たちの最初に生まれた首長たちであり、また数学を専修する人々は、地球の周りの周回軌道を巡る惑星の数が7だと言っている。この惑星の協感によって、死すべき生命を持つものどもの事柄はすべて成り立っているとカルデア人たちは考えている。したがってこれに基づき、将来の事どもをも予言できると公言している人々がある。一方恒星の中でも、すばる星（プレリアデス）は7つであり、大熊座も7つ星より成り、この7つ星によって農耕も航行も期間づけられる。また月も7日間かけて満ち欠けをおこなう。2) つまり最初の7日間で半月となり、次の7日間で満月となり、第3の7日間で下弦の月となって再び半月となり、最後の7日間で見えなくなってしまうのである。3) だがそればかりでなく、数学者のセレウコスが伝えているように、7をもって星位が変わるのである。というのも新月から三日月になり、続いて半月となり、満月となってから、再び下弦の半月となり、下弦の三日月となるからである。

144.1) 「七弦の豎琴で、われらは新しい讃歌を奏しよう」

(テル<sup>o</sup>ントロス、断片 5.2)

と、ある無名でない詩人が記し、いにしえの豎琴が七弦であったことを教えている。2) われわれの顔面にも感覚器官は7つあり、眼が二つ、聴覚器が二つ、鼻が二つ、そして七つ目は口である。3) 人生の変転も7を期として行われるということ、ソロンのエレゲイア詩がおよそ次のように教えている。

「成年に達しない子供はまだ言葉を発せず、7歳を過ぎて  
 ようやく、言葉が齒並の垣を超えるようになるもの。  
 次の7年の期間を神が満たすころ、  
 成年に達してその徴が現れる。  
 第三の7年期には、四肢も成長し  
 頬にはヒゲが生え、血色が変わって花盛りとなる。  
 第四の7年に、人はみな大いに力を増し、  
 そのころ人間としての徳の徴も顕著となる。  
 第五の7年は、人が結婚するに恰好の、  
 それに続いて子供を儲けるによい時期だと憶えるがよい。  
 第六の7年期には、すべてにおいて人の理性が十全に備わり、  
 もう虚しき業を手がけようなどは望まない。  
 第七の7年は、理性も弁舌も最高の時期、  
 第八もまたそうである。双方合わせて一四年間。  
 第九の7年間は、まだ精力は盛んだが、身体も力も  
 やや温順となり、大いなる徳に向けて進捗するころ。  
 そして第十の7年間は、神が7つの十年期を果たそうと望むころ、  
 死の運命を享受しても、機を逸してはいない」(ⅡⅡ, 断片 27)。

145.1) また病にあっても、7日目そして14日目が転機となる日であり、その日をもって本性が、病を起こす原因に対して闘いを起こすのである。2) そのようなものとしては、ベリュトゥスのヘルミッポスが『7について』という著作の中で幾多の面を挙げ、その数を聖なるものとしている。3) 一方幸いなる者ダビデは、7ないし8を明確に神秘の数として、覚知をなせる者たちに提示し、およそ次のように詩篇にしている。〈われわれの年月は蜘蛛の巣の如くに織り成される。われわれの生涯の年月は、そのうちにあって70年ほどのものである。健康に恵まれても80年ほどのものである〉(詩篇 89,9 以下)。その間、われわれは人生の王でありうる。4) しかるにわれわれが、世界が創られたものであることを学び、神が時間のうちに創ったのではないということを思いなせるように、預言は次のように付言する。〈これは世界創造と、そのうちにあるものが成った際の事柄に関しての書である。その日に神は天と地を創造された〉(創世 2,4)。5) 「成った際の」という語句は、アオリストによる表現であり時が定まっていないことを表している。一方「その日に神は天と地を創造された」、すなわち「その日にまたその期間に神はすべてを創造された」

の部分はすなわち、この日なくしては何一つとして成らなかった> (ヨハネ1,3) わけであるが、子によるエネルギーを明らかにしており、この子に関してはダビデがこう述べている。<今日こそ主が創造した日。われわれは、この日において喜び祝おう> (詩篇 117,24)。すなわち子を通じて伝えられた覚知に従って神的な寿ぎを執り行おう、との意である。6) というのも「日」とは、隠されたものに光をもたらす御言葉であると言われていて、この御言葉を通じて、個々の被造物は光と誕生に至ったのである。7) そして十戒は全体として、イオタ (I) という文字を通じて幸いな名を明らかにしており、これは御言葉としてのイエスを提示しているのである。

146.1) 続いて第五 (cf.137.4) は、父と母に対する敬意に関する掟である。ここで「父」とは、主なる神のことを述べるものであるのは明らかである。2) それゆえ彼は、自らを認識する者たちを「子たち」また「神々」と呼んでいるのである。よって万物の創造者である方は、主また父である。よって、ある者たちが言っているように、われわれがそれで成り立っている実体は母ではなく、また他の者どもが主張するように、教会でもない。むしろ神的な覚知すなわち智慧は、ソロモンが述べているように (シラ3,1 【テソ訳】)、智慧のことを「正しき者たちの母」と呼ぶ。そして智慧は、それ自体として選び取られるべきものである。すべて、美しきもの・崇高なるものは、神より子を通じて知られるのであるから。

3) さてこれに続くのは姦淫に関する掟である。姦淫が生ずるのは、教会に基づく真なる覚知、および神をめぐる把捉を棄て、相応しからざる虚偽の憶見へと赴く際、ないし何か生み出されたものを神としたり、非存在なるものを行き過ぎにより偶像化したりする際であり、これはむしろ覚知の逸脱と呼ぶべきであろう。虚偽なる憶見は覚知者とは無縁のものであって、本来的でくびきを共にすべきなのが真なる憶見であるのと正対照である。147.1) それゆえ、正真なる使徒もまた、偶像崇拜を姦淫の種類のひとつと呼んでいるが、これは次のように語る預言者に従ってのことである。<彼は木や石に対して姦淫を犯した。彼は木に向かって「あなたはわたしの父です」と言い、石に向かっては「あなたはわたしを産んだ」と言ったからだ> (エレキ3,9 ; 2,27)。

2) しかる後、殺人に関する掟が続く。殺人は力による破壊である。神と、神の永遠性に関する真なることわりを破壊しようと望む者は、欺瞞を真実化するため、万物について「先慮が働いていない」とか、宇宙を「創造されたものではない」とか述べ、真なる教説に拠れば確固たるものを、悉く破壊しようと

するが、この人間はいとも破滅的である。

3) この後、窃盗に関する掟が続く。他者の持ち物を盗む者は、大いに不正を働くのであるから、相応しき災いに陥って当然であるが、ちょうどそれと同じように、彫塑や描写の技巧により、業の神聖性を己がものとして、自らこそが動物や植物の創造者であると言う者は悪に堕ちる。同様に、真なる哲学を偽って模倣する者は窃盗者である。4) 農夫の誰かであれ子供の父親であれ、種子の蒔き方は心得ている。しかし神こそが、万物の生育と完成を提供し、現象を、本性に従った状況へともたらすのである。148.1) ところが大多数の者たちは、哲学者たちと一緒にあって、主として星に成長や変化を帰し、それらのうちなる疲れを知らぬ力に関わる限りの事柄に関して、そこから万物の父を外しておく。2) しかるに諸要素と星は、すなわち「支配的な諸力」は、経綸に適う事柄を果たすように配されているだけであり、それらとて彼らに対して定められた事柄に従って説得され導かれているのである。そのあり方は神の言葉が導くままである。それは、神の力が隠されたあり方ですべてにおいて働くような本性となっているためである。3) したがって、「自分は何か、創造行為に関わる事柄を発見した、あるいは成し遂げた」と公言する者は、その不敬な企てを正すことになるであろう。

4) さて第10番目は、欲情すべてに関する掟である。ちょうど、相応しからざる事柄に望みを抱いた者は正されるのと同じように、虚偽の事柄を望んだり、仮定したりすることも許されていない。それらは創造のうちにあるものだが、その一部は自ら生命を有し得るものであり、また一部は生命を持たないものであって、自らを救ったり損ねたりすることはできないものである。もしある人が、これらの解毒剤は、癒す力もなければドクニンジンの毒を消す力もないと言う人があれば、その人は奇を衒っているだけで肝心なことを忘れている。5) なぜならこれらの物質は、草や薬を調合する人がいなければ、何の働きもしない。それはちょうど、木こりがいなければ、斧も働かないし、挽く人がいなければ、鋸も働かないのと同様である。6) これらの道具は、自分からは何も実行することができないが、職人の活動とあいまってそれ本来の働きを果たしうる自然学的な物質を有している。ちょうどそれと同様に、神の普遍的先慮により、働きをなす力は、次第に個々物へと伝えられる。それは、隣接するものを越えて運動し、各々の個物にまで及ぶエネルギーをそこから得るものである。

## XVII. 覚智者と哲学：神認識に到る受容の状況

149.1) だが思われるに、ギリシア人たちの哲学は神という名を、用いながらも実は知らないように映る。なぜなら彼らは神を神として崇敬していないからである。彼らにあって哲学されている事柄は、エンペドクレスによれば、

「あたかも、多くの口の舌を通じて虚しく出で来たが、  
その口は万物のうちのわずかしか理解していない」

(エンペドクレス、断片 39,2).

2) あたかも太陽から放たれた光を、技術的に、水を満たしたクリスタルの容器を通じて火に変容させるかのように、哲学もまた、神の聖書から炭石を取り、わずかのうちに幻想するのだといえる。3) 実に、生けるものはすべて同じ空気を吸っているのに、皆それぞれに異なった仕方できているのと同じように、大方の者は真理、ないしむしろ真理をめぐる言葉に近づくのと同様である。4) つまり彼らギリシア人たちは神について何かを語っているのではなく、自らの情動を神にことかけて説明しているのである。というのも彼らにあって人生とは、真理ではなく、もっともらしい事柄を探究するものと化しているからである。真理は模倣によっては学び取ることができず、学びによるしかない。5) というのもわれわれがキリストに信を置くのは、キリスト教徒と思われるためではない。それはちょうど、われわれが日なたに赴くのが、ただ日なたにいますと思われるためではなく、むしろ暖まるためであるのと同じである。すなわちわれわれは、むしろ善く美しくあるために、自らに対してキリスト教徒たるべしと強いる。それはとりわけ<神の王国は力づくで奪われている> (マタイ 11,12) とあるために、探究と学びと完全なる修練によって、刈り取られた収穫の王国となるためなのである。150.1) 実に、模倣する者は、憶測と予捉 (prolepsis) の次第を明らかにする。人は、事物の閃きを受け取ると、これを靈魂の内部で、渴望と学びによって捉える。それに即して、すべてが認識に向けて動き出すのである。2) なぜならそれを予め把捉しない限り、それを渴望することも、そこから生ずる益を願うこともできないからである。3) かくしてその後覚知者は、正しき行いの完成を目指して主を模倣する。人間に許される可能性の限りにおいて、神の似姿となるために (創世 1,26)、主の属性 (poiotes) とでも言うべきものを掴むのである。ところが覚知を知らぬ者は、真理の規準を獲得することができない。4) したがってわれわれは、以前の想念を自らのうちから取り除かない限り、覚知による観想の対象に与ることが

できない。真理が、すべて思惟界の事柄と感覚界の事柄に共通して語られるのは、端的にこの意味においてである。5) 真実を描いた絵画は安っぽいものから、また崇高な音楽は低級なものから区別することが可能である。同じように哲学の真理は、真理でない哲学者のものと、真なる美は、欺瞞と異なる。6) つまり、それに基づいて「真理」と述語づけられるところの真理の部分ではなく、まさしく真理そのものが問題として取り上げられるべきなのである。探究する人は、名のみ学習に終始してはならない。7) というのも神をめぐる問題は一つに限らず、幾多にも及ぶ。神を求めることと神に関わる事柄を探究することは異なる。総じて述べるなら、個々の問題に関して、実体と付帯的な事柄とは峻別せねばならない。

151.1) いまわたくしには、神が万物の主であるということを表明する必要がある。ここでわたくしは、神が自立的に、何ごとについても特に留保なく、万物の主であると言うのである。2) さて真理には二つの範疇 (idea) がある。それは名に関するものと事物に関するものとである。名に関して語る人々は、言葉の美について論議する。これに該当するのはギリシアの哲学者たちである。しかるに事物に関する哲学は、われわれ異邦人たちの許にあるものである。3) 主が卑しき肉体の姿を撰ることを望んだのは、意味のないことではなかった。それは誰も、見目麗しさを賛美し美しさに驚嘆して語られた事柄から離反することのないように、そして取り上げられなかった事柄に固執し思惟される事どもから切り離されてしまうことのないようにするためなのである。4) 注意を集中させるべきなのは言い回しではなく、意味された事柄なのである。実に、言い回しのうち捉えられうる事柄、覚知に向けて運動しないものは、御言葉とは信じられない。なぜならカラスにしても、人間の声を真似たからといって、事柄に関わると言われるものの想念を有しているわけではない。思惟的な把握 (antilepsis) は、信仰に属する。ホメロスも「人間たちと神々との父」(ホロス『イリアス』1.544) と言っているものの、誰が父であるのか、どのように父であるのかを知っているわけではない。152.1) しかるに、本性的に掴むための手を持つ者、光を見るための健康な目を有する者と同じように、信仰を有した者には、これを据えられた礎とし、さらに金・銀・高価な石を細工し打ち立てることに専念するなら、覚知に与かることが本性的に備わる。2) したがって、そこに与かることを欲するというを公言するだけではなく、それを主導するのである。将来の姿としてではなく、王的・光輝的・覚知的であることを標榜する。しかも名だけではなく、行いにおいて諸事物に携わろうと欲することが相応し

いのである。3) というのも神が善き方であるのは、あらゆるものを創造するその主導性によるのであり、その部分が保たれることを望むとともに、それ以外の部分も創造することに向かい、まずはこの善行を第一とし、始めからそれらのものに生成を提供するのである。なぜなら、存在しないよりも存在することの方がはるかに優れているということに関しては、誰もが皆同意するであろうからである。しかる後、各々の本性を受容するや、自らよりも優れたものへと前進することが生じたし、現に生じている。153.1) したがって、哲学もまた神の先慮によって与えられ、キリストによる完成に向けての予備教育をおこなうものであるということは、もし異邦の覚知によって学びを修め、真理に向けて進捗するのを恥としないのであれば、無意味なことではない。2) むしろ「髪の毛の数も数えられている」(ルカ12,7) し微細な動きすらも認知されているのであれば、哲学がどうして御言葉のうちに入らないことがあるのか。3) 実際、サムソンにあっても髪の毛の中に力が与えられており、これは、生活上の事どもに関わる些細な技術は、現在のものであれ、あるいは靈魂のこの世からの脱出以降も留まるものであれ、神の力なくしては与えられなかったのだということに思いを致すようにさせるためなのである。4) さらに主は、神慮があたかも頭部から滴るように、先導する者たちからすべての者に及ぶということ、次のようなかたちで述べている。それは「あたかもアアロンの髭、彼の着衣の袖に滴る香油のようだ」と(詩篇132,2)。(ここで「彼」とはすなわち大祭司の意味であり、「彼を通してすべてが成ったのであり、彼なくしては何一つとして成らなかった」と呼ばれる場合の「彼」である)。この場合、香油は肉体の世界に滴るのではないのであるから、民衆の哲学は、いわば衣の如くに外界から影響を及ぼすのである。154.1) さて哲学者たちは、自身の自覚に向けて感覺的靈でもって修練を重ねるのであるが、哲学の一部ではなく、哲学それ自体を自律的に探求するならば、必ず、真理への愛に満ちたかたちで欺瞞なく、真理に対して証しを立てることになる。それは、見解の異なる者たちの前で、麗しく語られた事柄に関してであっても、知解に至る。これは神の計らい、すなわち言葉にはし尽くすことのできない善性によるものである。この善性は、個々の場合に即し、可能な限りにおいて、最善の方向へと諸事物の本性を導くものなのである。2) しかる後彼らは、ギリシア人たちばかりでなく、異邦人たちとも語らいを交わし、信仰に向けての共通の修練により、固有の知解へと導かれる。3) 彼らは真理の礎石を受容し、探究を超えてさらに前進する力を得て、学びを深めたことによってさらに愛を増し、覚知を



希求しながらも救いへと疾走するのである。4) その次第に関して聖書は<感覚の霊>が技術者たちに神から与えられたと述べている(出エジプト28,3)。これは賢慮(phronēsis)に他ならない。それはまた、靈魂における諸存在物をめぐる観想の力、似たもの・似ざるものに連関する峻別の力でもあり、知解・命令・禁止の力であり、かつ将来の事柄を推察する力でもある。そしてこの力は、技術面に伸びるのみならず、哲学そのものにも及ぶのである。155.1)では何故、ヘビもまた<賢い>とされているのであろうか(創世3,1)。これは、悪事においても、ある種の連関・峻別力・知解力・起こりうる事柄の予知力を見出すことができるからである。2) また不正のほとんどは、次のことのために発覚を免れる。それは、悪人たちが、あらゆる場合においてあらゆる方法を用いて処罰を逃れようと予め配慮するということである。3) しかるに賢慮は多種の部分から成っている。それは世界全体にわたり、人間的な事どものすべてにわたって広がっているが、その各々に関して呼び名が変わる。第一の諸原因に関わる際には「思念」(noēsis)と呼ばれる。またこの思念を実証的な論理に固めるなら、「覚知」「知恵」「知識」と名づけられる。しかるにこれが信心に励む場合に援用され、詮索なく、そのうちなる働きの保持に関して主導的な論理を受け取った場合「信仰」と言われる。また感覚的諸事物において、それらのうちにあつて最も真理に近いと思われる事柄を信じさせるものは「正しき見解」と呼ばれ、手による実践に関わる場合には「技術」と呼ばれる。また第一の諸原因に関わる観想なく、類似するものの観察と変換をもって何らかの躍動性という磁力を生み出す場合には「熟練」と名づけられる。4) これは固有のあり方であり、真に優れたもの・主導的なものであつて、これはすべてにおいて、確固たる信仰を得て後、熟考を通じて霊を聖なるものと信じた場合にかち得ることのできるものである。

156.1) さて実に、哲学は様々に異なった感覚に与かることによって、上述した事どもから明らかのように、賢慮に与かる。2) 思惟される事柄について、選択と統合を伴いながら論理的になされる説明は弁証法と呼ばれる。そして、真理について語られる事柄の実証を伴う説明は確言、もたらされる未解決な事柄についての説明は詭弁と呼ばれる。3) かくして、哲学は神からこの世にもたらされたのではないと主張する者たちは、敢えて、神が万物をその細部まで知悉することは不可能であると述べ、また神は美しきもの各々の部分的な原因ではあつても、そのすべての原因ではないと語るという危険を冒す。4) だが神が、諸存在物の何がしかを望まずに有しておきながら、その端緒を引き受け

るということはありません。もし神がそれを望んだのであれば、哲学は神に由来するものであり、哲学が今あるような姿で、このような以外のあり方では諸悪を離れるつもりのない人々によって担われることを神が望んだのである。5) というのも神はすべてを知悉しており、現在あることばかりでなく、将来起こるべき事柄も、その各々がどのようになるかということも知っている。さらに細部にわたる動きまでも先見し、「すべてを見そなわしすべてを聞き届ける」（ホロス『オプティマ』3.277）。靈魂をそのありのままの姿で内側から見るのである。6) さらに個々にわたる諸事物の着想を永遠にわたって有し、劇場で、しかもその幕ごとに起きる事柄に、洞察・概観・共感をもって接する。これが神において行われることなのである。7) 神はすべてを総括的に、かつ各々のものの細部におよぶまで、一瞥のもとに見抜く。ただその際に、直接的な衝撃を伴わせることはしない。157.1) 人生における事柄は、神からその端緒を得ているにしても、すでに人間による何らかの推論にもその生成を負っている場合が多い。たとえば健康は医術に負い、強壯は訓練に、富は蓄財にその生成と現存を負っている。それは神の先慮によるとともに、人間の協働にも負うものである。3) 理解もまた神に由来する。すなわち、とりわけ善き人々の選択は神の意向に随順する。それゆえ、多くの卓越性は善き人間と悪き人間とに共通であるが、それが有用なものとなるのは善く真摯な人間における場合に限られる。彼らのために神はそれらを設けたのである。すなわち神から与えられた力は本性的に、善き人々が用いるためのものである。4) だがそればかりでなく、有徳の人々の着想は、神の着想によって生じる。それは、何らかの靈魂が整えられ神の望みが人間の靈魂に貫徹し、一部に関して神的な取り計らいがその種の務めに取り込まれた際に成立するものである。5) 天使たちの配慮が諸民族・諸都市に分かたれて、おそらくはそのいくつか、何らかの配慮が別個に配されるのであろう。158.1) 実に牧者は、羊の群れを一頭一頭に至るまで気遣う。そしてその配慮はとりわけ、本性的に卓越しかつ群れに益しうような羊たちのために、より熱心に行われる。2) それらの者たちは主導的かつ教育的であって、彼らを通じて先慮の働きは目に見える形で行われる。それは神が、教育によってあれ何らかの統率あるいは統治を通じてであれ、人間に対してよく計りたいと望んだ場合に為される。神は常に望んでおられる。3) それゆえ神は適任の人々を動かし、徳・平和・安寧のために資する事どもを有益な仕方で実現させる。4) しかるに有徳の事どもはすべて、徳から出発するとともに徳に向けて止揚され、真摯なる者たちとなるためであれ、その彼らが、本性的に優れ

た事物を享受するためであれ、与えられる。全体に関わる事柄においてであれ、部分に関わる事柄においてであれ、協働が行われるからである。159.1) かくして、無秩序と不正を悪霊に帰す人々をして、有徳の事柄、すなわち哲学の与え手とすることが、どうして不適当なはずがあらうか。2) というのも哲学は、ギリシア人たちにとって、善き人々となる上で、神の先見と思慮よりも穏便なものとなりうるからである。3) 逆に、思うに各々のものに相応しく固有でかつ効果的なものが賦与されるということは、律法と直しきロゴスすべてに固有の属性だと考える。4) というのも豎琴はキタラ奏者にしかできないし、笛は笛吹きに任せるべきである。ちょうどそれと同じように、卓越した優越性は善き人々の財産であり、善行を為すことは善を為す人のいわば本性的資質なのである。それは火があたため、光が照らすものであるのと同様である。5) しかるに善き人は悪を為さないであろうが、これは光が闇をもたらしたり火が冷やしたりすることがないのと同様である。6) それと同じように、悪が何か有徳のことに実行するということはない。悪のエネルギー（現実態）とは悪を為すことなのであって、それは闇の現実態が、視界を侵害することであるのと同様である。したがって、人を有徳の者とする哲学が悪の業であるはずがない。7) 残るのは哲学が神のものだという可能性だけである。善き計らいを為すというのは、ただ神だけの業である。そしてすべて神から与えられるものは美しく与えられ取り込まれる。8) 実に、哲学の使用は決して人間的な悪のうちに属すものではない。むしろ、もしギリシア人たちの中で最も優れた人々に賦与されたのであれば、それがどこから賜物として与えられたかは明らかである。つまりそれは、価値に応じて相応しきものを各々の者に分配するものすなわち先慮によって与えられたのである。9) かくしてユダヤ人たちに律法が、ギリシア人たちに哲学が、主の来臨に至るまでに与えられたのは適わしいことである。普遍的な招きはその後行われたのであり、それは信仰に発する教えによって正義に満ち溢れる民に向け、唯一なる主を通じ、ギリシア人にも異邦人にもその双方にとって一なる神、否むしろ人類すべてにとって一なる神が集わせたのである。

160.1) われわれはしばしば、哲学のことを「哲学による真理の呪文」と呼ぶことがある。それは部分的な面に話が及んだ場合である。だがすでに、技術に内在する諸々の善は、技術におけるものとして、神からその端緒を得ている。2) というのも何事かを技術的に為そうとする場合、それは技術の主題のうちに含まれることになる。ちょうどそれと同じように、賢慮をもって何かを為す

ことは、賢慮の下に配される。しかるに賢慮とは徳である。したがって何か他者に関わること、ないしそれよりもはるか以前に賢慮そのものに関わることとを認識することは賢慮固有の課題である。智慧もまた力であり、神的ならびに人間的な善に関する知識以外の何物でもない。3) <大地とそこに満ちるものは神のもの> (詩篇 23,1)。これは、諸々の善きものとは神から人間の許に届けられるのだということを聖書が教え、述べている句である。その賜物は神の力と威力によって人間のための助けに相應しいものとなる。4) すなわちすべての益と賜物に関しては、ある者から別の者に為される場合、三つの種類がある。まず訓練係が、意図して子供を計画的に訓練する場合である。次に、まねをさせる形で他の者を促し、さらに進歩を遂げるように誘う場合である。つまりその場合、ある事柄は学習者に協働し、ある事柄は受け取り手に益するものである。第三のあり方は、権威に基づくものであり、訓練係がもはや学習者を鍛錬することもなければ、自ら模倣のために組み打ちの「型」を子供に提示してやることもしない場合である。これは、子供がすでに「組み打ち」(palaisma) という名前自体が示唆する方法でもある。161.1) かくして覚知者は、益することの能力を神から受け取り、ある人々に対しては、理解によって形成し、ある人々に対しては模倣をさせることで促し、またある人々に対しては権威をもって訓導し教育することで助力するのである。言うまでもなく彼自身も同等者たちによって主の許で益を受ける。2) かくして神から人間たちに向けて伸びる益は認識のかたちで成立するが、その際に天使たちが相誘う。というのも神的な力は天使たちを通して諸々の善き事どもを提供するからであり、それは目に見える場合も見えない場合もありうる。3) 主の顕現に際してのあり方もそのようなものである。すなわち人間の着想に従い、神の力が推論に息吹を送るとき、その力は精神のうちに強さとより正確な共感とを成立させ、熱心な力強さと勇氣とを、探究と業とに提供するのである。4) そしておそらくは、われわれにとって模倣と類似のための、真に驚くべき徳の聖なる軌範が、特記された行為を通じて据えられるのであろう。5) そして実に、権威の種類というものは、主の掟とギリシア人たちの下での法、そればかりでなく哲学による教えを通じてこそ最も輝きを放つ。6) 簡潔に述べるならば、すべての生命に関わる益は、まずは天上的なロゴスにより万物を統べ父である全能の神から子を通じて完遂される。この子は使徒が言うように<すべての人間たちの救い主である> (1テモ 4,10) が、とりわけ<信じる者にとって>そうである。一方、第一の原因すなわち主に専心する者の

命と権威によるあり方によれば、個々の者に接することにより、絶えざる仕方で提供されるのである。

## XVIII. 結論

162.1) さてわれらが覚知者は、最も肝要な事柄のうちに常に時を費やす。たとえ、課題とした事柄からの閑暇と弛緩のための時間があつたとしても、他の娯楽の代わりにギリシア哲学を手がけ、これを饗宴の後のいわばデザートとしてたしなみ、より主要なる事どもをなおざりにするというのではない。むしろ適切である限りにおいて、加えてそれらのものを摂取するが、それはすでに述べたような理由による。2) しかるに、哲学のうちの必須でなく余分な部分に熱意を燃やす人々は、ただその論争的な詭弁にのみ専心し、必須で肝心な部分をなおざりにする。それはさながら、言葉の影だけを無闇に追い求めるありさまである。3) すなわち、すべてを知るということは美しいことである。しかるに靈魂は、博識なる経験を志向するために、何であれ力に欠ける部分に尽力することを選ぶ。それはより自らの意向に適った、より優れたものを専ら選ばうとする意図による。4) というのも真なる知識について、われわれはそれはただ覚知者のみが有しているのだと主張するのであるが、この知識とは、真にして確固たる言葉による確固たる把握なのである。しかるに何に関してであれ、真と偽とに通曉した人は、同じ事柄に関して通曉している。5) というのもかの言葉は、わたくしには実に巧みに言いおおせていると思われるのである。「もし哲学すべきであるならば、哲学すべきである」(アリストテレス、断片 51 ローズ)。これには次のものが続く。「たとえ哲学すべきでないとしても」。なぜなら人は、以前には知らなかった事柄は、知らなかったのであるから。かくして「哲学すべきである」。

163.1) これらがこういった状況にあるため、ギリシア人たちは、律法と預言者たちを通じて唯一なる神を崇敬することを学び取らねばならなかった。この神とは真なる存在者かつ全能者である。その後使徒を通して次のことを教わる。〈われわれにとって、世には何ら偶像の神というものはない〉(1 コリント 8,4)。なぜなら成ったものどものうちに、神の似姿は何ら存在し得ないからである。さらに加えては、彼らが崇めているものの似姿とは、まったくその像ではないということを経ばねばならなかった。というのも像である限りにおいて、ギリシア人たちが彫像として作り上げたようなものは、生き物の類には入らな

いからであった。2) なぜなら靈魂は目に見えはせず、理性的であるばかりでなく、理性を持たない動物にもあるからである。一方これらのものどもの身体は、その一部ではあるものの、靈魂の一部では決してなく、器官として、ある場合には道具であったり、ある場合には乗り物であったり、それぞれ様々なあり方による被造物だからである。164.1) しかし器官の像をありのままに描写することは不可能である。つまりたとえば、誰かに太陽を模写させてみよ。それを見たままに作り、あるいは虹を色になぞらえさせてみよ。それは不可能である。2) その幻影が残されたところで、次のような聖書の声が聞こえる。〈あなた方の義が、律法学者やファリサイ人たちよりも優っていなければ〉(マタイ5,20)。彼らは悪を回避することで義化されると主張する人々であるが、彼らの言う完徳をもって隣人を愛し隣人に善行をなすことが可能だとすれば、あなた方は王的な存在にはなりえない。なぜなら律法による正義への衝動こそ覚知者のあり方を示すものだからである。3) ちょうど同じように、自らの身体の主導的部分、すなわち頭を制した者は、信仰の極み、すなわち覚知そのものに向けて進む。感覚的なものはすべて、この覚知に関わるものであって、極みなる嗣業を獲得することになる。4) しかるに、覚知の主導的性格について使徒は明確に、精査することのできる人々に示し、ギリシア人でコリントの人々に宛てておおよそ次のように記している。〈われわれが抱いている希望とは、あなた方の信仰が増大し、あなた方の間でわれわれの規準に従って豊かに広がるようにということ、あなた方を超えて福音が告げ知らされるようになることである〉(2コリント10,15以下)。これはすなわち、場所に関しての教えの拡がりを行っているのではない(なぜなら彼自身が述べているとおり、信仰はアカイア州にまで拡張しているからである(2コリント9,2)。165.1) また『使徒行録』の中でも、彼はアテナイ人たちの間で御言葉を述べ伝えたと述べている【使徒17,16以下】)。ただ彼は覚知を学んだ。それは信仰の完成である。主の教えの偉大さと、教会の軌範に照らし、教えを超えて豊かでありたいと考えたのである。2) それゆえ彼は少し進んでこう付言している。〈もし言葉において素人であろうとも、覚知に関してはそうではない〉(2コリント11,6)。ギリシア人のある者たちは、真理を発見したと言ってわれわれに対して自慢するがよいが、それは誰から学んだかを偽ってのことである。彼らは、神から学んだとは決して言うまい。人間たちから学んだと告白するはずである。4) ただもしそうであるとすれば、言うまでもなく彼らの中のある人々が欺かれて自慢しているように、遅くなって自ら学び知ったか、あるいは他の類似した人々から学んだので

あろう。5) だが神について語る人々の中には、それが人間である限り、確かな師はいない。それが人間である限り、神について真理を語ろうともそれは信ずるには当たらない。弱く死すべき存在が、生まれず腐敗しない方について語り、創造者についてその業を論ずるということになるからである。166.1) あるいはまた、自らに関して真実を語ることのできない者が、それ以上、神に関する事柄について信じられるべきであろうか？ 人は、神の力を欠く限りにおいて、それと同じだけ神の言葉・ロゴスも彼のうちで力を弱める。たとえ神を語るというのでない場合でも、神についてないし神の言葉について語る際でもそうなのである。2) というのも人間の言葉は本性的に弱く、神を語ることはできない。わたくしがここで述べているのは名のことではなく（「神」と名づけるのは、哲学者たちばかりでなく詩人たちも共通である）、本質のことでもなく（それは不可能であるから）、神の力また業に関してである。3) 神を師としてこれに就く人々は、ほどなく神を想い描くに至る。それは恩寵が、豊かな認識（epignōsis）にまで彼らを覆うからである。そして彼らは意向において意向を、聖霊によって聖霊を観想する習性を獲得する。実に＜霊は神の深みをも究める＞（1コリント2.10）が、＜魂だけの人間は霊に関する事柄を受け入れない＞（1コリント2.14）。4) したがって、ただわれらの許なる智慧だけが神から授かったものなのであり、すべての知恵の泉は、真理に関して推察する限りにおいて、そこに根を有している。5) 言うまでもなく、主がわれわれを教えるべく人間の許を訪ねるまでに、多数の導き手・告知者・支度人・先駆者がおり、それは天地の創造以来、天上界より来たるものであった。そして彼らは業により言葉によって、救い主の来たることを、そしてその徴がどこに・どのように・何のかたちで現れるかを告げ知らせた。167.1) 言うまでもなく、律法と預言者ははるか昔から予め考えを練ったものであり、しかる後先駆者が、来臨する方を明らかにし、その後使者たちが顕現の力を告げ知らせたのである。2) ギリシア哲学を例に取って見よう。以下の人々に限られるわけではないが、プラトンはソクラテスを、クセノクラテスはプラトンを、テオフラストスはアリストテレスを、クレアンテスはゼノンを、それぞれ師として奉じた。これらの師たちは、いずれも自らの弟子たちのみを学派として育成し、説得したのである。しかるにわれわれの師の言葉は、ユダヤだけに留まることがなかった。それは哲学がギリシアだけに留まらなかったのと同様である。われらが師の言葉は世界じゅうに注ぎ出され、ギリシア人・異邦人を問わず、村や町すべて、すべての家々、耳傾ける者各々に対して個人的に語りかけた。そして哲学者たちの少数ならざ

る者、すでに真理に与かっていた者たちもこれに含まれるのである。4) してもし、ギリシア哲学を誰かある支配者が阻んだならば、直ちに死に絶えるであろう。一方われわれの教えは、そもそもその最初の告知とともに、王・僭主・大小さまざまな支配者たちや君主たちが、およそあらゆる傭兵たち、さらにはおよそ無経験な人々を遣わし、われわれに対して兵を向け、あらん限りの力でもって打ち滅ぼそうと試みた。5) しかるにわれわれの教えは、よりいっそう開花することになった。というのもこの教えは、人間の教説として死に行くこともなく、か弱き賜物として萎むこともなく（神の賜物にか弱きものなど存在しない）、阻まれることなく持続した。最後まで迫害を受けるであろうと予言されていたにもかかわらずである。168.1) しかる後、プラトンは詩に関してこう記している。「詩人は、虚しくかつ聖なる事柄を記すわけだが、その行為でさえ、神懸的な、常軌を逸した状態にならなければ不可能である」（プラトン『イウ』534B）。2) デモクリトスも同様である。「詩人が、神がかり状態で聖なる霊に満たされて書き記す限りの事どもは、いとも美しい」（デモクリトス、断片18）。われわれは、詩人たちがどのようなことを語るかを知っている。3) しかしながら、全能なる神の預言者たちについては、だれも彼らをでっち上げることはできまい。彼らは神的な声の道具となっているのであるから。

4) かくして、いわば覚知者の彫像を構築するようなかたちで、われわれはすでに可能な限りにおいて、その人の倫理性の偉大さと美しさをスケッチのうちに明らかにし、示してきた。これ以降は、自然学的観想においてこの人がいかなる人物と化すか、宇宙の誕生をめぐって論じ始めることにしよう。

## 注

- 1 「アレクサンドリアのクレメンス『プロトレプティコス』（『ギリシア人への勧告』）—全訳—、筑波大学大学院人文社会科学研究所文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 文藝篇』57, 1-82, 2010.3; 「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴース』（『訓導者』）第1巻—全訳—」、同『文藝言語研究 文藝篇』59, 1-62, 2011.3, 「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴース』（『訓導者』）第2巻—全訳—」、同『文藝言語研究 言語篇』59, 1-74, 2011.3, 「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴース』（『訓導者』）第3巻—全訳—」、筑波大学大学院人文社会科学研究所古典古代学研究室刊『古典古代学』第3号, 25-76, 2011.3; 「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』（『綴織』）第1巻—全訳—」、筑波大学人文社会系文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 文藝篇』63, 63-163, 2013.3, 「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』（『綴織』）第2巻—全訳—」、筑波大学人文社会系文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 言語篇』63, 147-223, 2013.3, 「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』（『綴織』）」



- 第3巻－全訳－], 筑波大学大学院人文社会科学研究科古典古代学研究室刊『古典古代学』第5号, 27-93, 2013.3.
- 2 「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』(『綴織』)第4巻－全訳－], 筑波大学大学院人文社会系文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 文藝篇』65, 2014.3 刊行予定, および「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』(『綴織』)第7巻－全訳－], 筑波大学大学院人文社会科学研究科古典古代学研究室刊『古典古代学』第6号, 35-113, 2014.3.
  - 3 アレクサンドレイアのクレメンス『ストロマテイス』第5巻(上智大学中世思想研究所編訳/監修『中世思想原典集成1 初期ギリシア教父』283-416), 平凡社, 1995.2.
  - 4 アレクサンドレイアのクレメンス『救われる富者は誰か』(上智大学中世思想研究所編訳/監修『中世思想原典集成1 初期ギリシア教父』417-466), 平凡社, 1995.2.